

文學士辻角常觀著

信仰問題

東京 文明堂藏版

明治
37 2 17
内交

信仰問題序

如何にして信仰を攫むべきかとは現代萬人の叫にして、如何なる理想を以て平和なる社會を來すべきかとは二十世紀の宿題也。蓋し信仰を求むるや、夫れ燧を鑽るが如きか。硜々乎として之を打ち、砢々焉として之に従ひ全力を傾注して、其間半點の余地を存せずむは、遂に燦然として靈光の英發するに至らむ。既に靈火一たび點せむか、腐敗焼く可し、罪惡盡すべく、慈愛悲憫の熱情能く萬靈を融和し、遂に平和清淨なる樂土を來たして理想の社會を實現することを得む。

信仰は苦悶の成産也、平和は慘劇の結果也。人生一たび激浪に漂ひて初めて其眞個の意義を悟り、世界慘澹たる舞臺を過ぎて終に最後の光明を認む。昔者源平の戦ありて遂に鎌倉時代の平和を開き、蒙古の外戦ありて國民は初めて偉大なる自覺を生ぜり。此時に當りて佛教の信念正さに其極に

達して電光影裡春風を斬り、靈界の威力森々として國民の上を蔽へり。朝廷は嚴肅なる禱を捧げ、野外忽ち警醒の叫あり。風雨一過。終に圓熟和醇の信仰は清明の天地を開闢し來る。今や正に我國民は第二の鎌倉時代に入り、絶大の使命を荷ふて世界の舞臺に上らむとす。洵に是靈活なる自覺を生すべきの時、肅々として自ら戒め、以て佛天の照鑒を仰ぐ可し。内心の至誠一たび到らば天地亦感應せむ。萬峯過き來りて平地あり。崇高なる理想を實現して、平和の光明を世界に光被せしむる豈夫れ難しとせむや。

吾人曩きに微言聊か國民の宗教的自覺を促し。歐米に遊ひて宗教界を視察すること三年。歸來専ら信仰問題の根本に向て修養を切礪す。本書收むる所、皆實驗の告白、理想の縮寫也。讀者幸に心絃相和して共に樂土を闢くを得ば、吾人の本懷亦何ぞ之に加へむ。

明治三十七年紀元節の日

著者識

信仰問題

目次

挿畫

- (一) 米國シカゴ青年會本部の圖
- (二) 英國上下兩院及ウエストミンスター御堂の圖
- (三) 獨逸ルーテル聖書講堂の圖
- (四) 佛國萬國宗教大會出席者の撮影

内篇

- 一。實驗の宗教……………一
實驗は生ける事實也——宗教に對する思考——佛敎の精髓——實驗後の實行
- 二。哲學の研究が佛敎信念の消長に與へし害毒……………一〇
佛敎研究者の態度——信仰と哲學——涅槃と本體論——内心の實驗——形已上學を要せざる宗教
- 三。倫理問題の解結如何……………二四
倫理學者の態度——泰西に於ける宗教と教育及倫理運動——佛敎道德の根底——

戒律の眞精神

四。社會に於ける内的制裁力の養成……………三七

五。學生間に於ける信仰の勃興……………四三

求道的新氣運——偉人の青年時代——現代の惡風

六。活ける讀書と清新なる信仰……………五二

信仰の新源泉——二宮尊徳翁——マルチン、ルーテル——法然聖人

七。信仰と苦悶……………六二

八。修養論……………六七

上、實際的修養——中、修養の目的は解脱にあり——下、修養には終りなし

九。信仰論……………七八

上、吾人は何ぞや、信仰は何ぞや——下、罪惡を自覺せよ、慈悲に融化せよ

▲親鸞聖人の信仰……………一〇〇

外 篇

一〇。宗教問題解決の要點……………一〇五

宗教なき國民——我國過去の宗教的經營——現時教界不振の病根——社會上宗教修養の缺乏——歐洲の教會經營及び宗教教育——解決の要點は實行にあり——適切眞摯なる實行

一一。英國及び其宗教界……………一二四

一二。宗教形式の變遷……………一三三

一三。佛教の見地に立ちて社會問題を解釋す……………一三九

一四。社會の根底的改造……………一四六

一五。阿片的佛教……………一五三

一六。歐米各國に於ける宗教の特色……………一六一

一七。宗教的經營及社會事業を論ず……………一七七

竹園精舎の經營——奈良朝時代の經營——平安朝時代の經營

一八。求道會館設立の趣意を披瀝す……………一八九

目 次

插 畫 附 録

獨逸ウツテンベルト宗教改革の遺跡

- (一) シェロス、キルへの圖
- (二) 同寺入口碑の圖
- (三) ルーテルの圖
- (四) ルーテル住宅の圖
- (五) ルーテル居間の圖

一。西教事情

緒言——米國——英國——佛國——南獨——澳匈聯邦

▲伯林より

▲折々に阿見をしのびて(常言)

二。日本花祭

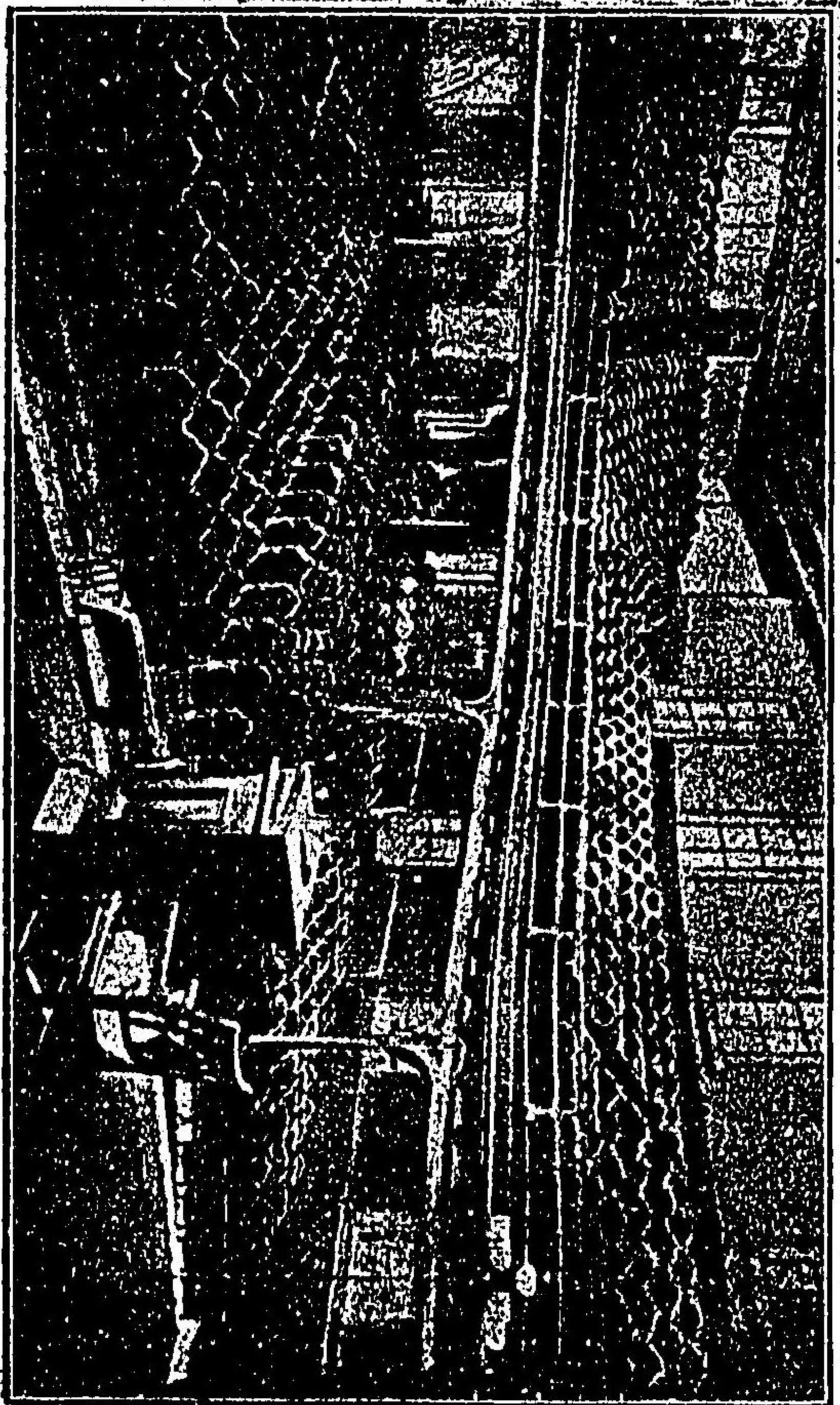
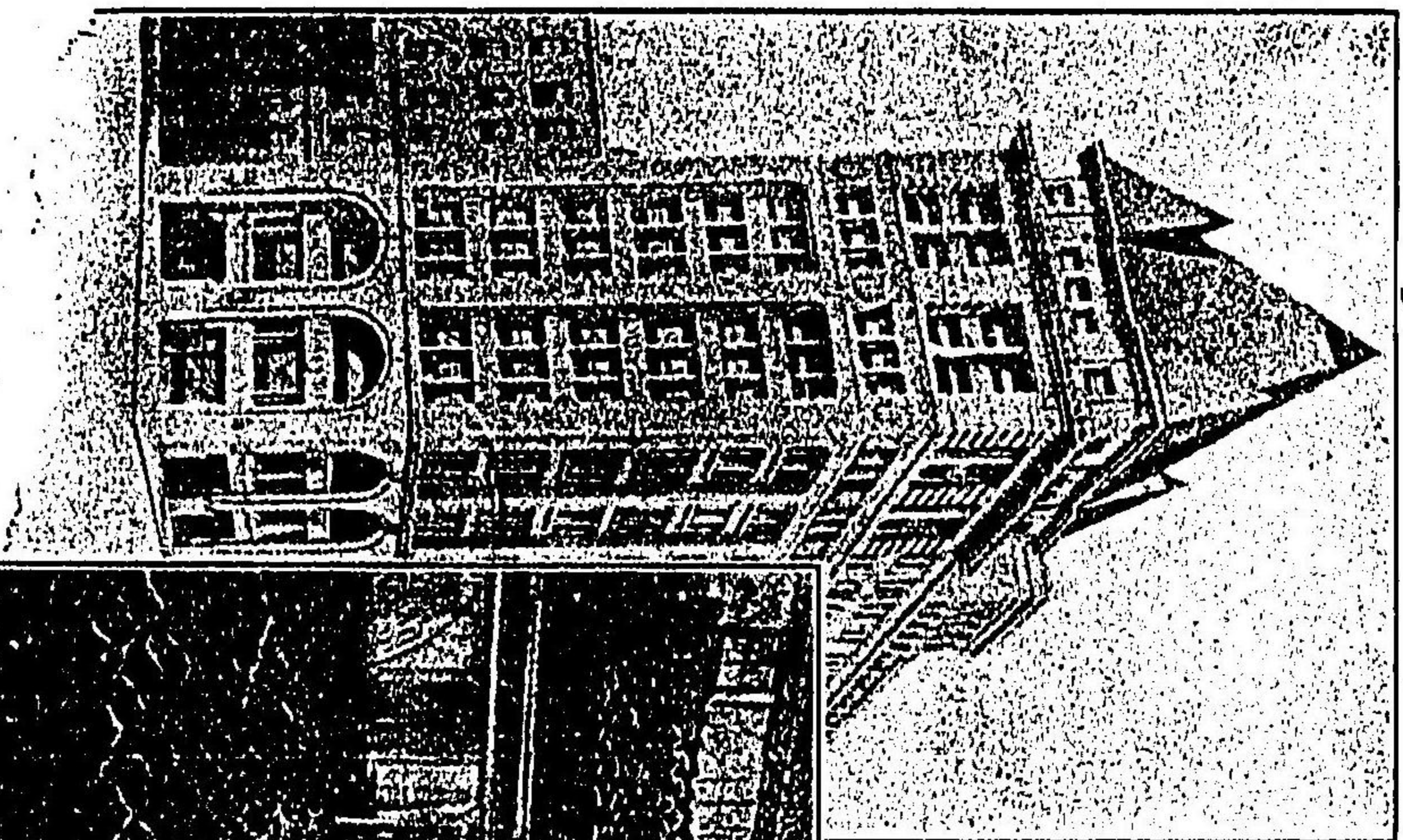
▲和蘭地より

三。ミルトンの隠れ家ヘンの會堂

四。マルチン、ルーテルの遺跡を訪ふ

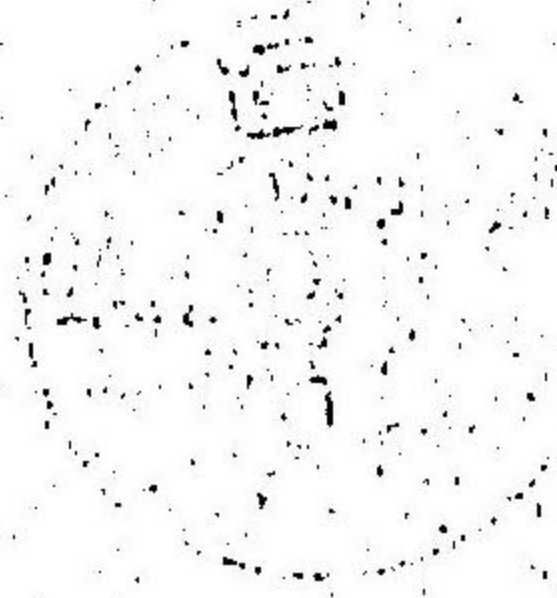
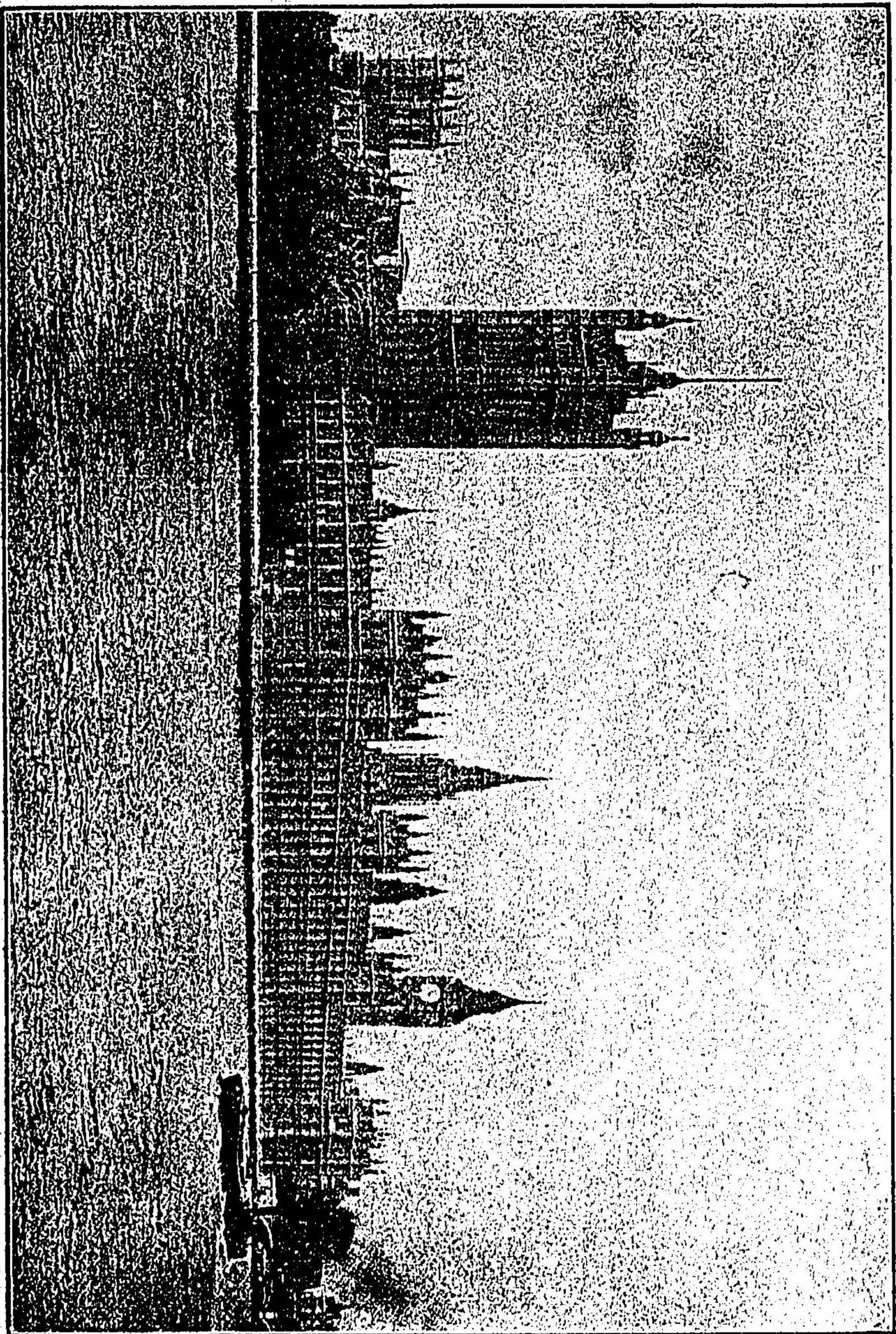
▲獨逸より

三三
三四
三八
四七
四八
五五
六一

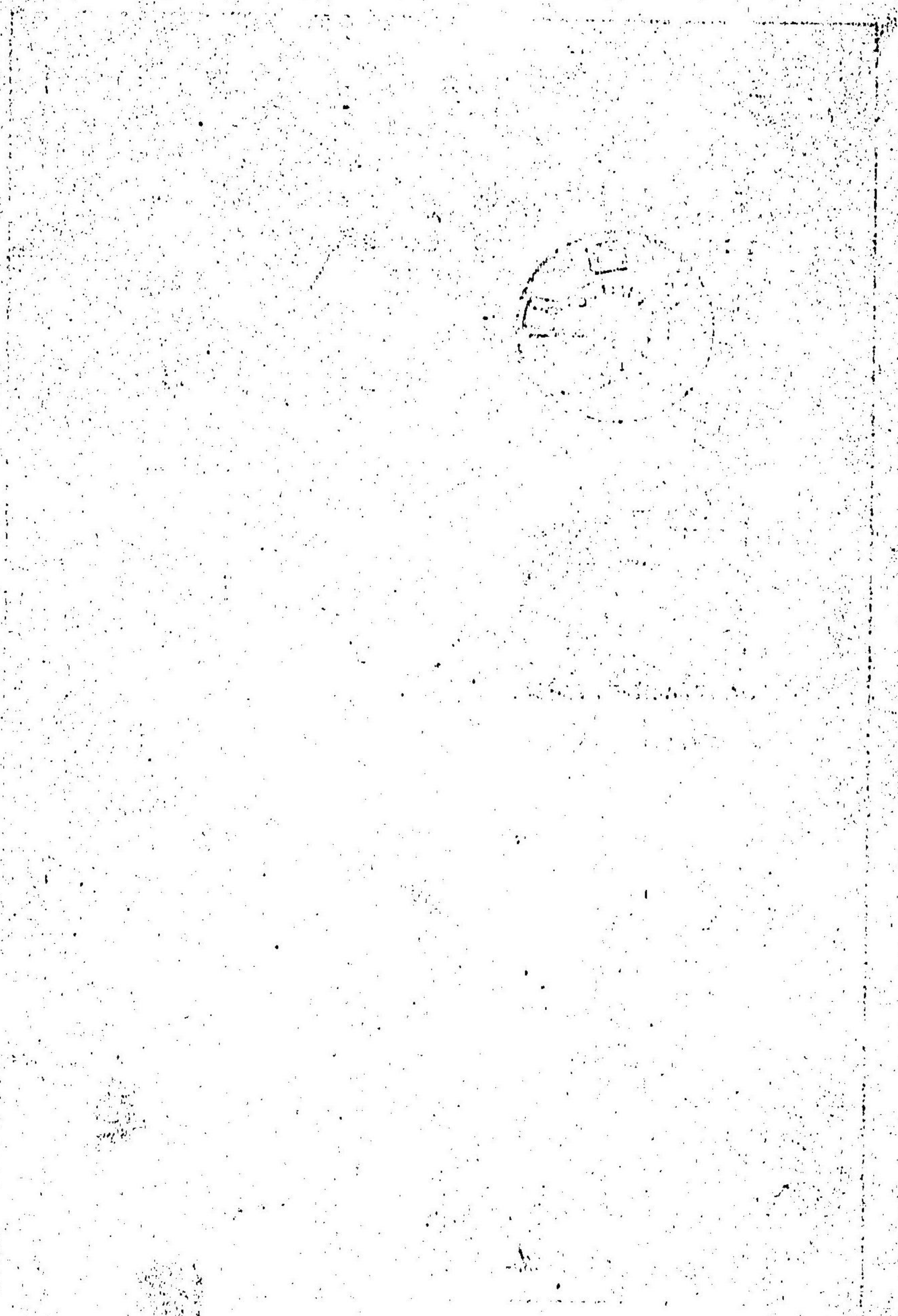
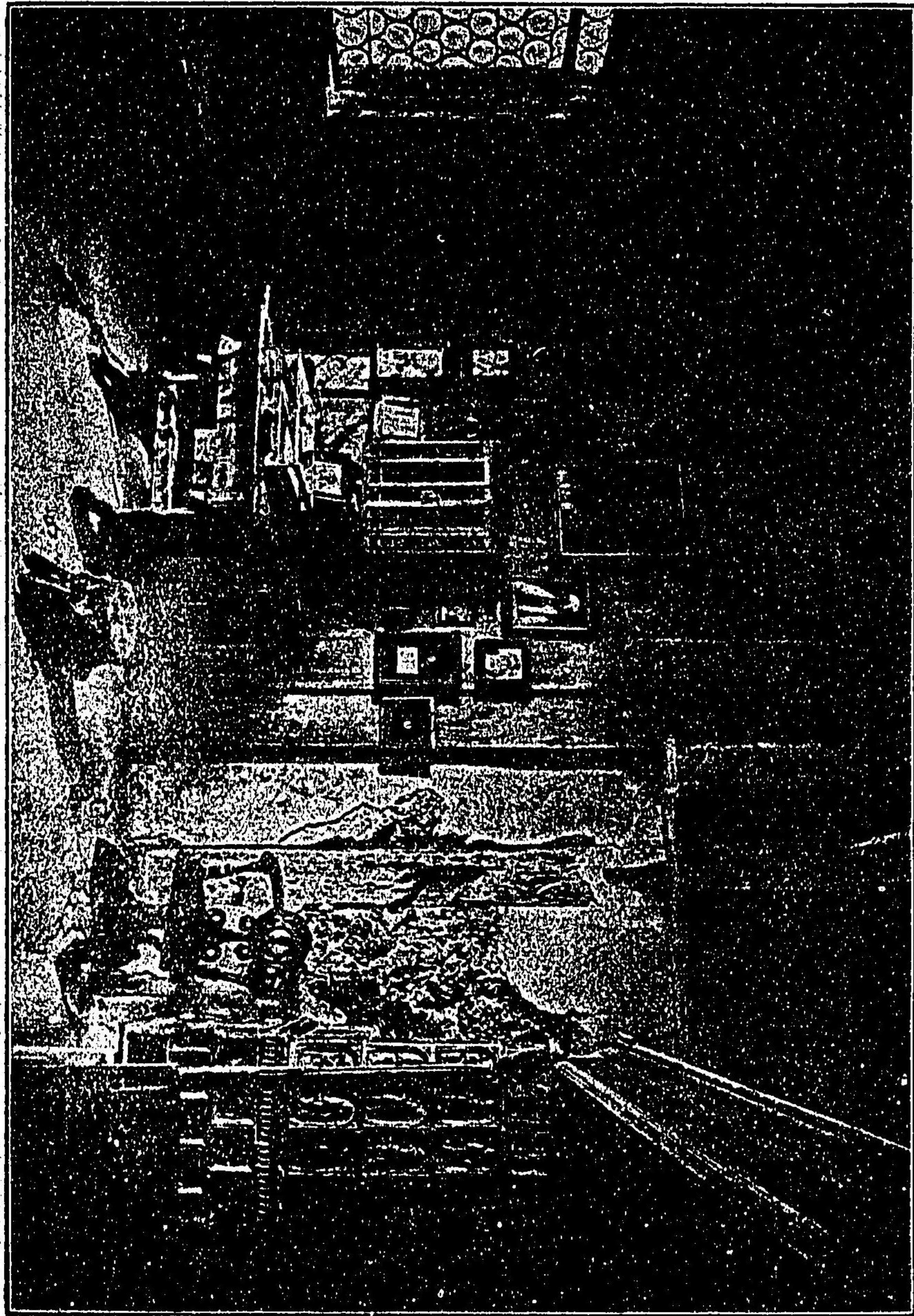


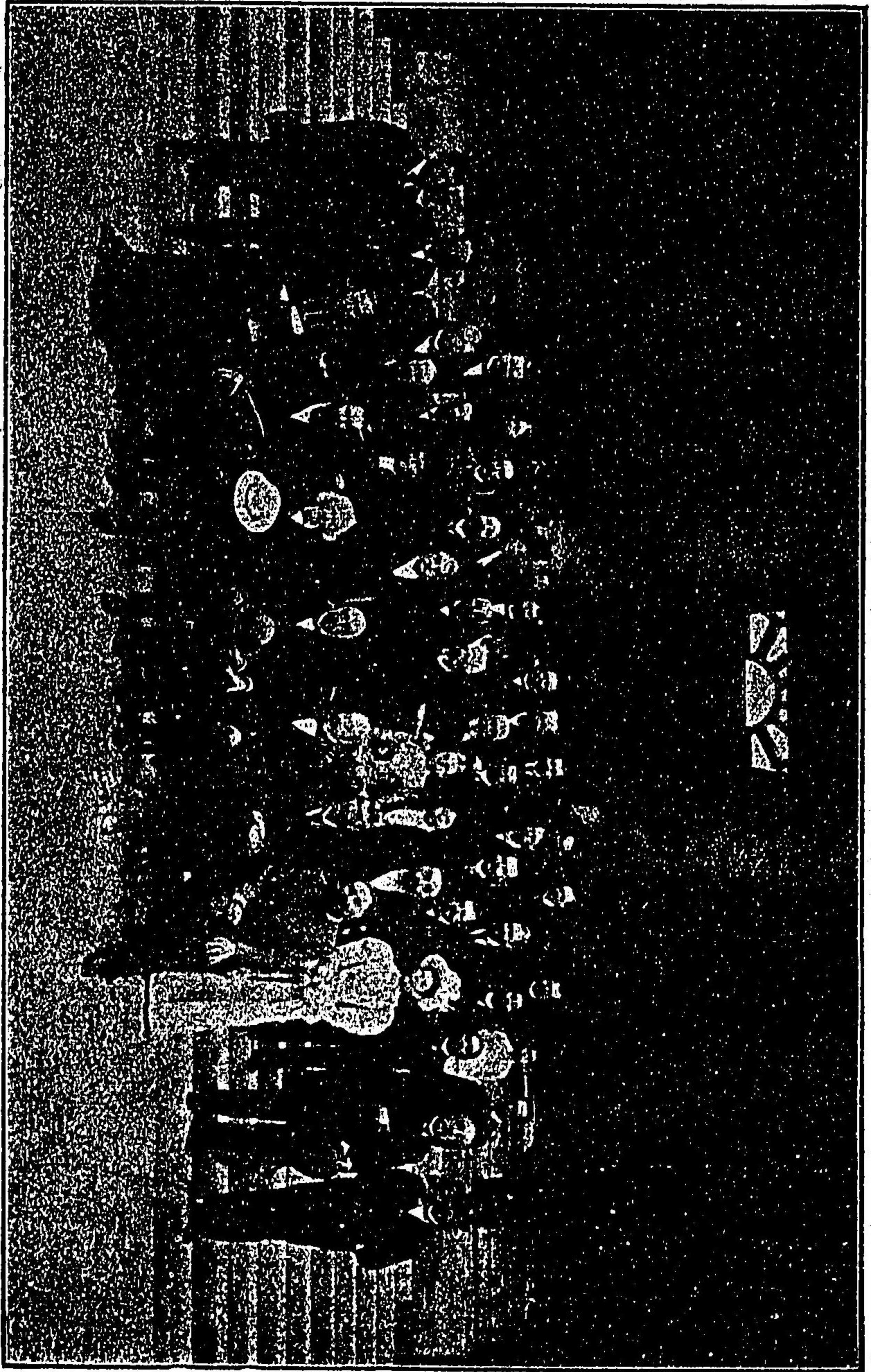
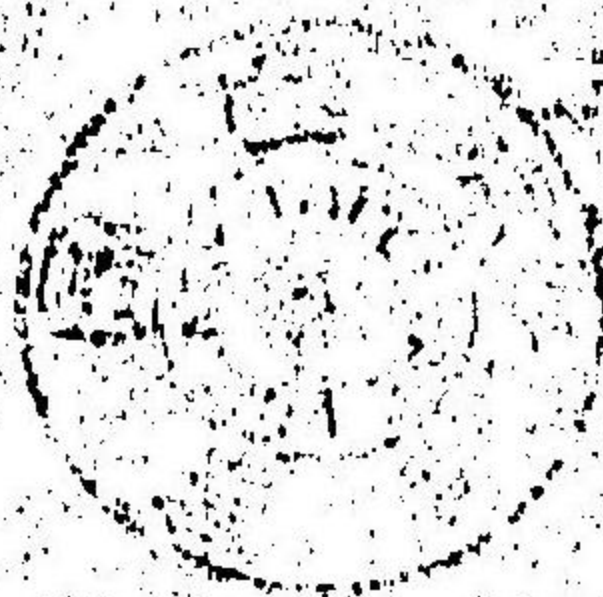
國の密講廳を占む階一の部内其風景全面外部本會年宵教育基イカソ過米 (一)

行宮を望むニラスネイトネモリにリ過カ左 景金の院雨下上るけ於に時河スカーラ國英 (二)



安田園遊場のマター人けかに中城ビルとエドワード塔 (三)





會任央中列前影撮の者席出會大史歷教宗國萬るを會開てし際：會聖理大らり於に里巴禮佛平百九千歲西 (四)

信 仰 問 題

內 篇

一 實 驗 之 宗 教

實驗は生ける事實也

吾人が宗教の眞髓として主張せんと欲するは哲學の宗教でもなく、教權の宗教でもない。言はゞ實驗の宗教とても云ふべきものである。實驗と云ふは吾人の心中に於て親しく實驗したる事實である。或は苦しみ、或は憂へ千變萬化極りなき吾人の胸中に於て、たしかに實驗したる生きたる信仰である。

實驗と云ふ言葉は頗る誤解に陥り易き弊がある。一寸聞くときは理化學上の實驗の如く、又ベーコン已後發達せる經驗學派の經驗の如く考へらるゝ虞もあ

文學士 近角常觀著

るが、決してそうではない。何んとなれば宗教は科學の範圍を超絶するものなれば、此の如き科學的實驗が宗教上に適用さるべき筈がない。去りとしてコントの主張する如き社會の實益を最終の目的とするものでなく、セエリングの説の如き神秘的事實の實驗を唱ふるのでもない。唯吾人の心中に於て感じたる生ける事實である。即ち佛陀の慈悲を適切に自己の胸中に感じ、直接に其靈光に接觸することである。蓋し實驗と云ふことは實驗したものでなければならぬ。生きたる人生界に於て、諸の悪しき心、諸の穢しき念を経験して一點の光明なく、一寸の餘裕なきに至り、煩悶苦惱の後、始めて佛陀の慈悲を生きく、と感じ、直接佛の心と融化する事實である。故に決して特に新らしきことを云ふのでなければ、宗教として生ける部分が不明である。故に特に明白に言ふまでのことである。

歐洲最近の思想

歐洲現時の思想界の傾向は、人生なる考を宗教に限らず、すべての學問の上に加へて研究することである。而して此新らしき傾向は恰も實驗的の生ける宗教と云ふこと、符合することとなる。歐洲過去五十年前までは何事によらず、純理

一方より説明することを主とし、形而上學の根底より築き上げる風であつたが、近頃は社會的心理的の考を以て研究することとなつた。嘗に學問上に於てのみ然るのみならず、詩歌にせよ、音樂にせよ、美術にせよ、若くは社會的事業、文明の評論に至るまで、皆人生なる根本思想より割り出して來ることとなつてきた。

此傾向を詳しく説明すれば中々一篇の論文の盡すべきではない。而して其中には極端なるものもあれば、溫和なるものもあり、健全なるものもあれば、病的のものもあるが、何れも人生と云ふ考が主眼となつて居る。政治上に於ては社會主義の如き哀々たる、貧民生活問題より割り出したるものもあれば、獨の中央黨の如き炎々たる舊教の信仰より實現したるものもある。シヨツペンハウエルの厭世主義の如きも、哲學として、純理的の方而よりも人生の上一種の色を以て眺めて居る人生觀に興味が存して居る。ニツツチエにしても自己が極濃かなる感情と暖かなる天性を以て、現時歐洲の文明のあまりに強食弱肉のなると、道德及宗教の形式的なるに稍奮激して起り、先づ自己の周圍に向て實行を試みて遂に精神病に陥りたるが如き、生きたる思想が價值のある點である。トルストイが世

界中の最も壓制極る露國政治に反抗して、愛の福音を宣傳して、貧民の爲めに奴隸の爲めに、救濟の方策を講ずるのは、たしかに人の心を動かすものがある。ハツプトマン等の作は社會的の方面を描き、人情の至微を穿ちて人生の急所を衝き、セセチオンの畫風は事物の特徴を擴大にし、濃厚なる色彩を用ゐて觀者の耳目を刺戟するものである。其美を極むるや、ワグネルの音樂の如きがあり、其放縱を極むるや、ゴルキイの如きがある。一々之を檢し來るに其美と醜と、健全たると不健全たるとは、偕て置き、何れにしても、生ける人間の胸中より迸り出て、人情の心琴に觸れ、棘々として、吾人の心を動かすに至りては、たしかに共通なる一種の傾向である。

宗教に對する思考

人生なる考を根本として考ふる歐洲現時の社會にて、亦宗教に對する思考も同一の傾向をとりつゝあるは決して怪しむべき譯はない。抑々シユライエルマツヘル已後初めて感情と云ふ思想を加へて宗教を考ふる様になり、理論一方でなくして生きた考が加はりて來たものである。殊に最近に至りては前記の總て

の方面に於ける、人生なる思想は宗教の考の上に著しく顯はれて來た、何んとなれば、宗教は人生中に於て中心問題とも稱すべき位置を占めて居るからである。近き例はトルストイが福音を解釋するに當りて、神は愛であるといふ考が主となりて居る。即ち神を解釋するに哲學的基礎やら歴史の傳説などを捨て、精神的情操たる愛なる思想を以て根本義とする考である。又ハルナツクが基督教を解釋するに福音の要義とする點は、神と人との間に於ける關係が、天父と子であると云ふ考と其間を結びつける愛の福音である。而して其他天國の思想、メシヤと云ふ考等何れも畢竟猶太的、歴史的遺物に過ぎないと云ふのである。ハルナツクと云ふ人はベルリン大學に於て教授をして居る人で、新教神學者として有名な人物である。氏は教條史の大家にして同氏の著書たる教條史 *Dogmen der schichte* 三冊は恐くは永久の書籍であろう。氏は自由主義で研究をするもの故、教會の方よりは批難があるが、氏の説は歐洲到る處に是非の論議の中心となつて居る。彼の『基督教の眞髓』*Das Wesen des Christentums* と稱する著書の如き、一たび世上にあらはるゝや、中々やかましき事であつた。氏は教會の側よりは異論があ

つたに拘らず、ヒスマークか内閣の側より無理に大學に入れたと云ふ次第である。氏は殊に原始的基督教の研究は最も得意とする所である。此の如く歴史を研究したる人が其歴史中に於て宗教としての要義となるべき部分と、附屬物と見做すべき部分とを分ちた後に、真髓として絞り上げた結果が愛の福音に結歸するのである。是即ち上に述べたる人生の考を中心として、宗教の上に著しくあらはし來りたものであつて、結局人生の救済と云ふことが宗教の要義となる。此の如く基督教としては思ひ切りて最も新らしき説を立てた所、漸く佛教の上に於ける實驗的信仰より眺めて見れば、左程珍らしくもないことを述べて居ることとなる。極端に云へば有神論と靈魂實在の考だけが存在して居る丈がまだ宗教としての極意に達して居らぬらしい。

佛教の真髓

佛の教を見るに、佛は釋尊及佛弟子を初めとして、後代の信徒に至るまで、根本的に人生の問題の解釋より起りたるものにして、宗教としては正さに其極致に達して居る。即ち人生の大問題とは單に理論でなく、實際の苦痛煩悶に陥りて、

遂に之を解脱したる實驗的の宗教である。而して其平和なる結果を涅槃と稱したるもの、是が佛教としての真髓である。而して佛教には時代に隨て諸種の哲學が加はりて居るが、此は宇宙本體論が色々と變りたるまでのこと、宗教としての要義ではない。全體佛教者が此哲學的論議の淺深によりて、價值か上下するか、かの如く考へて、甚しきは宗教としての要義本領たる解脱涅槃と宇宙の本體たる眞如法性と同一であるかの如く考ふるまでに至つた。此點に就きては古來幾多の宗教學者がつまらぬ戲論に多くの腦漿を絞り、又現時の學者や青年はつまらぬ心配をして居る様に考へる。吾人は次の文章に於て、哲學と佛教との關係に就いて述へんと欲するが、要するに佛教が今日の如く理屈一方に奔りて乾燥無味に陥りたは、確かに哲學の空論に沈みて宗教の要義たる人生の救済苦患の解脱と云ふ點を忘却したる罪に歸せざるを得ない。

佛教に於て宗旨の開闢と云ふことを、從來は只哲學的議論が一層高くなり、一歩進みたることと考へて居つたらしい。是は大なる誤謬である。唯從來の教理なるものが何時の間にやら、實驗の新らしき水が流るゝことなくして、版を捺した

様な形式的の型のみになつて死したりた時大なる宗教的人物が出て、實驗的に人生根本の問題に觸れて大に苦しむ大に悶へ大に安心し生きた事實を明らかに説きたが即ち宗旨の出來たものである。

鎌倉時代に於ける各宗の祖師の行動をみるに、皆何れも生きたる經驗を以て起つて居る。殊に親鸞聖人は佛教中に於ける哲學的論議の部分を斷然擲ち去りて、人生救済の根本義を擧みて立たれたものである。即ち佛教としての最終は解脱涅槃であるが既に解脱涅槃の極に達したる容體は正さに佛陀であつて、吾人は其人格の感化によつて救済せらるゝのである。而して其人格の働は暖かなる洪大の慈悲であつて、此慈悲の爲めに吾人は感化せられ救済せらるゝのである。而して全身感謝の念を以て満たされつゝ、此佛陀の慈悲を人類全體の上に、社會各部に向て傳へることに熱中することとなる。是實に佛教の眞髓にして又宗教としての要義は恐くは此上に出づることはない。

實驗後の實行

實驗は内心の事實であるが、此内心の事實は決して沈靜的に人を眠らしむる

者でなく、必ずや活動的に實行上に結果を持來すべきものである。言を換へて之を言はゞ、内心に於ける事實即ち苦痛を解脱した後は社會の方面にあらはれて社會救済の事業となるのである。此に於て人生の萬事に初めて意味を生じ來ることとなるのである。併し信仰の實驗なるものは、一度實驗すれば再びせぬと云ふ譯ではない。寧ろ毎々反覆して經驗するのである。經驗する度に新らしき光りを蒙るのである。光りを蒙る度に、一歩つゝ、實行するのである。

一たび生きたる信仰の實驗を経るときは、吾人は慚愧の念を以て自ら道德の實行を獎勵せられ、同情の心を以て社會の救済に走り、燃ゆるが如き熱心を以て傳道に盡瘁せしめらるゝ次第である。此に於て佛陀の生ける事實が吾人の心中に於ける生ける救済の經驗となり、社會に向て生ける感謝的實行となるものである。

Ich habe keinen Namen

Dafuer! Gefuehl ist alles!

Name ist Schall und Rauch,

Umnebelnd Gimmelgluth:— Goethe

二 哲學の研究が佛教信念の消長に與へし害毒

佛教研究者の態度

過去二十年間に於て佛教の聲價を貴からしめたものは哲學である。而して佛教の宗教的眞價を暗ましたものも亦哲學である。一時は佛教と云へば頗る古めかしき物の様に考へた時、佛教は哲學的の眼光で眺めると頗る高尚であるとの聲は、佛教者に向て百萬の援兵が顯はれた心持であつた。夫が爲め、佛教と言へば忽ち哲學を聯想するに立至つた。而して此潮流は靡然風をなして一場の講話に至るまで、哲學的研究によらずんば佛教を説くべからざるが如き趣になつて來た。殊に佛教を研究するには哲學的に研究するが唯一の方法であるかの如く考へられて、宗教家は帝國大學にては哲學科に入るもの多く、各宗教學校に於ても哲學は必需の科目となつてある。吾人は此傾向につきて少からぬ杞憂を抱きて居る。何んとなれば佛教の聲價を高めたる哲學なるものは、佛教を宗教として味

ふためには最も邪魔になるものである。理論的に佛教を研究することは、たしかに信仰的に佛教の生命を殺すものである。若し此點より論ずる時は、哲學は佛教に對する援軍でなくて、佛教信念を腐蝕する寄生蟲である。

抑々佛教の教理は頗る廣漠にして、果して其眞髓は何れにあるかと云ふに至りては、一般世人の擾み難き點である。是、何故に然るか、と云へば、佛教に附帶してある哲學の部分のみを見て、宗教としての要點を攫まぬからである。吾人情々考ふるに、佛教の宗教としての要點は、解脱涅槃の一點であるが、之に伴ふ哲學的本體論は、佛教の歴史の長さだけ、夫れだけ長きものである。其本體論を以て佛教の要點であるかの如く穿鑿して居るもの故、何年佛教の講話を聞きて居るも、一向夜が明けぬ。佛教の話と云へば、忽ち起信論の眞如緣起であるとか、天台の事理圓融とか、哲理ばかり高尚に成りて、毫も心靈上の養ひとなるべき成分の少きは、大に反省すべき點である。翻りて此等の佛教が宗教として行はれてあつた時代は、何時であつたかを顧るがよい。何れも遠き過去に於て行はれて、宗教としては既に業に生命の蟬脱したる遺骸である。即ち實行としては、夙に人より忘れられて

あつた佛教である。唯哲學的に面白ひと云ふて、骨董品を取扱ふかの如く、徒に詭弄的に古き佛教を品評することとなる。此の如き不眞面目な態度で宗教が得られる筈がない。夫も求むるものが不眞面目なれば仕方なけれども、求むる人は頗る眞面目であるにも拘らず、之に與ふるものが乾燥無味の哲學を以てするに至りては實に言語道斷の極である。

○信仰と哲學

古來哲學が宗教の信念を害した事例は決して少くない。基督教の如きも猶太に行はれた時には尠も哲學的分子がなかつたが、希臘に行はるゝに及びて、希臘特有の哲學的傾向は大に加はりて來た。勿論夫れが爲め、初めは迷信的分子を排除して之を清潔にした利益もあつたが、遂には理論を以て宗教を取扱ふ風を生じて、ノスチシズム *Nosticism* となつた。特にアレキサンドリヤ哲學と合して益々哲學的解釋が盛んになりて、神を見るにロゴスとするに至りて益々力が弱くなつたが、遂に其反抗として、ニケヤの會議に於てアタナシユスの説が勝利を占め、漸次教會の教條を樹立するに至りて大に力強くなつたのである。又近世では

獨逸哲學が盛んに行はれて、形而上的基礎を以て宗教を説明することとなつた。之が爲にの啓蒙時代已後に於ける宗教に對する懷疑を一時除くことを得た利益があつたが、一方にはたしかに宗教としての力を弱めた。所謂獨逸神學が兎角信仰を冷却せしむるはたしかに此點に存して居る。

佛教も原始的の有様を見るに、人生問題の解決として信念が溢れてあつた。吾人は小乘經文を誦するに如何にも佛弟子が胸中の煩悶の苦しうな有様、佛陀の説法をきいて安慰を得たる様子、一々吾人の信念に共鳴するものがある。之に反して小乘各部が分裂して、各哲學的論議を以て、教理の淺深を争ひたる時代即ち論部製作の様子を見るに、尠も宗教信念の味ふべきものがない。又大乘佛教の經文を誦するに其編纂年時の如何に拘はらず、高大の理想、崇高の事實、皆佛陀慈愛の結晶、信念修養の生産物として、吾人に永劫の生命を與へらるゝ次第である。之に反して大乘論部の或者に於て哲學的論理を極むるに至りては妙は乃ち妙なるも、宗教としての滋養分を得ることが難い。已上のことを事實を以て云へば、阿含經を誦するに頗る通世的傾向は多けれど、人世問題の解決としてはたしか

に生きてある。然るに有名なる俱舍論を初め、教理が系統的に組織されたるはよけれども味がない。特に俱舍論を作り、之を香象に載せ、鼓を撃ち、四方に廣告して反對者を挑み、若くは衆賢論師が躍起となり、俱舍論を草したなど、壯んなりとは云へるが宗教としては無意味である。又法華經にせよ、華嚴經にせよ、涅槃經にせよ、荒唐に渉るかの如く考らへる、程廣大な事實が書きてあるも、審かに之を味ふに心靈上に偉大なる感化を興ふる文字が多い。特に大無量壽經の如きに至ては、頗る適切であつて、拜讀して敬虔の情に堪へぬ。又維摩經でも、圓覺經でも、中々味がある。然るに後有宗、空宗の争となりて、戒賢、智光が火花を散らして論戰を試みたなどは、畢竟認識論や本體論に就て哲學論議を戦はしたまでの事である。古來、宗教の信念が哲學論議と常に反比例をなして消長したることは此の如く著しきものである。而して佛教が印度に於て生命のなくなつたのは、佛教徒が哲學的論議のみに耽りて、信仰の生命を扶植する事が出来なかつたもの故に、護法の精神、傳道の奮發心がなくなつて、内部既に枯死したるとき、外部よりは婆羅門が詩歌文學の上に宗教信念を謠ひ、社會儀式の上に宗教の實行を以て起り、特

にマホメット教徒が劍とコーランを掲げて攻入りたるとき、所謂枯を摧くが如き有様を以て、佛教は其母國印度に於て跡を絶つに至つた。是れ現代の佛教者が警醒一番すべき點である。

涅槃と本體論

宗教と哲學との關係と云ふ問題は古來屢論せられた問題であるが、佛教の上に於て適切に此點を論じたものが少い。即ち佛教に於て果して何れの部分が哲學であつて、何れの部分が宗教であるか、又兩部分が如何に關係して居るか、と云ふ問題である。

抑々佛教は天啓的の宗教でないことは釋尊の傳と佛教の教理が證明して居る。即ち釋尊自身の解脱の實驗と衆生濟度が根本である。其解脱涅槃の妙味が單純に消極的のものでなくて、積極的のものであり、又過去未來を通じて永久の生命である。從て人世上に於て實驗されたる釋尊は、僅かに其面影に過ぎない。ので、猶一層より大いなる形式を以て、より大いなる力を以て、人類の上に偉大なる救濟を下し賜へる佛陀あること、釋尊のその如くである。其解脱涅槃の妙味、攝取

救濟の威神力を開説したのが大小乗を通じての經文である。是が佛教が宗教としての要義信仰としての眞髓である。經文の本文批評教理の史的研究が如何にあるとも動かすことの出来ぬ點である。少くとも釋尊自身の事實のある已上は吾人は此偉大なる事實の存在をも證明さるゝ次第である。

さて此の如く佛教が宗教としての要點を擧げて見れば、他は之に附屬したるものである。即ち此宗教を實行する上に於て他の諸種の部門の智識と相調和して行く必要がある。たとへば宇宙論であるとか、又哲學的本體論とか色々の智識と相關が始まる。是が佛教に於て哲學的部分を生じたるもとである。即ち解脱涅槃の思想を説明するに、其各時代に於ける哲學的本體論の原理を以てしたまへたことである。例せば小乗有部の論では殆んど多元論とも稱すべき哲學で、殊に物質の實在を主張する。故に解脱涅槃を説明するに集合分散の原理による。又唯識論では、唯心論の極致である。故本體も顯象も皆心的原理を以て説明する。隨て解脱涅槃も唯心論の立脚地で説明をする。何れも皆此の如く、哲學的本體論は時代に從て變更する。されど宗教的要點は解脱涅槃の實驗にある。故、哲學は變ても

宗教的實驗は、毫も變はらぬ。佛教と哲學との關係は、例せば佛教と宇宙論との關係の如き者である。原始時代の佛教は須彌説の行はれた時代であつた。故之に從ふて説きである。佛教が宗教として毫も之に關係なきもの故、現時の如き天文學が大に進みたる時も宗教としては何等の影響もない。否、亦現代の宇宙論と相合して説くことが出来る。哲學と佛教との關係も同様である。例せば、哲學は溝渠の如きもので、宗教は其中を流るゝ水の如きものである。所謂哲理なるものは瓶の如きもので、信仰は其中に盛られたる酒の如きものである。溝渠は如何程改築してもよい。瓶は幾度取り換へても差支はない。常に清らかなる水を流し、美はしき酒を盛ることが必要なのである。然るに溝や瓶の穿鑿をして得意がりて居るは如何にも残念なことである。

後世に至りて最も大なる誤解を生ずるに至りたは、眞如とか法性とか實相とか云ふことを直ちに涅槃若くは佛陀と云ふことと同様に見るに至りたことである。抑、眞如にせよ、法性にせよ、若しくは實相にせよ、宇宙の本體である。哲學的原理である。此原理の上に、事理無碍とか、事々無碍とか、種々の哲學が立てられたの

て、其哲學の上で涅槃を説明し、若くは佛陀を説明したまでのことである。涅槃は煩惱を解脱したる妙境であつて決して宇宙の本體ではない。佛陀は飽迄無限の慈悲と救済の威力を具へたる人格であつて決して宇宙の本體ではない。然るに現代佛教の信仰の起らぬは此本體論に屈托して、理屈三昧に日を暮して居るもの故、宗教としての生命が日々に消磨する次第である。新佛教の人々が汎神的教理を根本義として信仰が定まらぬのも、村上博士が佛陀を理想としながら、頻りに之を拜まむと勉めて居らるゝのも、井上哲次郎博士が大我の人格を否定して、聲を聞かんと勉めらるゝも、精神主義の人々が如來々々と呼び乍ら兎角汎神的如來に陥るのも、結局此哲學的本體論が宗教の中心と見られたからである。

内心の實驗

佛教中に於て新しき宗旨を開闢することをば、哲學教理を組織することの様に思ふて居る人がある。即ち從來よりは一層深遠なる哲理を發見するときは、新たな宗旨が出来るもの、様に考へられて居る人がある。是は大なる誤りである。抑、宗旨の新たに起ると云ふは、從來の佛教が腐敗沈澱して水が濁りてしまつ

たとき、忽ち人生根本の問題を實驗上より解釋して、信仰の清らかなる水を再び流れ出てしむることである。其水が流れた結果として自然に溝渠が出来るのである。夫が教理である故に、佛教としての要義は、理論的に煉瓦を積み立て、哲學的に溝渠を作ることではない。非常なる苦悶の結果、佛陀の靈光が人間胸底の秘奥に接觸して、其中より、迸り出づる清鮮なる泉を作ることである。

基督教が教條史の永き發達の中に於て、敬虔なる信仰の泉と稱すべきものは、實にアウグスティンの實驗である。彼は實驗上に於て深く神の恩寵を感じ、人間の罪惡を懺悔し、非常なる精神的大革命を経た人である。而して彼が實驗より割り出したる教條は、遂に中古に於ける羅馬教會の大基礎を築きて、廣大なる組織を構成し、進みて宗教改革時代に於て、ルターにせよ、カルヒンにせよ、皆彼が敬虔主義によりて醸し出されたる人物である。而して何れも、非常なる苦悶に於て信仰の實驗を経、若くは嚴格なる實行に於て神意を勵行した人である。

佛教に於て古來、偉人が頗る多い。其中にて、佛教が哲學の爲に教理を化石せしめられ、信仰を枯死せしむる厄難に罹つて、殆んど解くべからざる紛糾となつた

時、信仰の利劍を揮ふて葛藤を破り、五濁惡時惡世界を絶叫し、佛陀慈悲の靈光を
 實驗して、信念歡喜の妙境に達し、哲學的部分を断然絶ち去りて、宗教的真意義た
 る、佛陀救濟の大德音を宣説せられたるものは、實に親鸞聖人である。親鸞聖人の
 眼に映ずる、佛陀は救濟の佛陀である。親鸞聖人の心に宿る、佛陀は慈悲の佛陀で
 ある。吾人の無明の闇黒の世界を救はむが爲に、佛陀は顯はれ玉ひたものである。
 諸の佛陀は此根本の佛陀の働きてある。而して又救濟の實際を親しく此世界に
 示し玉ひて慈悲の德音を傳へられたのが釋尊である。三千年來の、佛陀、八萬の經
 卷、實に此信仰の清鮮なる水が瀾漫したる結果である。親鸞聖人は此眼光を以て
 佛教を讀破して、其信仰の實感に觸れたる靈的文字を書き集められたるが、『文類』
 と稱する聖教である。而して其宗教を名けて『眞宗』と名づけられた次第である。

形己上學を要せざる宗教

吾人は茲に實際上の經驗を白狀して、哲學及び宗教に注意する諸君に警告す
 る。吾人は初めは中々人格的佛陀を信することは出来なかつた。世の佛教研究者
 と同じく佛教を哲學的に研究して興味を見出しつゝ、あつた。此時は人格の佛陀

は中々信ぜられなかつた。吾人は今日世人が佛教を説くのを聞くに、唯哲學的教理
 のみを貴びて、却て佛陀を全く擲ち去りて居るのは皆此流義であると信ずる。而
 して吾人は非常なる苦悶時代を経て、佛陀の靈光を感じた後、自己自身は之を
 感ずるも、他に説明するときは猶哲學的基礎を要すると考へた。夫故當時の胸中
 を白狀すると下の如くである。即ち親鸞聖人の時代には今日の普通學の如くに
 眞如法性であるとか、十界一如であるとか云ふ思想が一般に行はれてあつた故、
 人格的佛陀を直説しても善かつたけれども、今日の如き佛教の大主旨をも一般
 に知らぬときは眞如の本體論より説かねばならぬと考へて居つた。今より考ふ
 れば、是は大なる誤りであつた。親鸞聖人の當時とて決して愚夫愚婦に至るまで
 眞如法性の理を知りて居つた筈もなく、又現に私自身が佛陀の靈光を感じたる
 ときは一片の哲學的理論によらなかつた。自分は之を用ひずして他に説くに之
 を用ひんとするは大なる誤りである。事を悟つた殊に親鸞聖人の如きは此哲學
 的部分の宗教に必要なことを知り、世人の之に屈托せるを憐み、断然擲ち去られた
 點が最も尊き點である。義なきを義とすとは此意味である。言を換へて言へば、理

屈なしの宗教、哲學なしの宗教と云ふことである。嘗に人格的佛陀を本體的に説明せられぬのみならず、本體的なる自然とか法爾とか云ふ非人格言語まで人格的に解釋せられてある。加之人格的の佛陀を本體に戻して解釋するは畢竟哲學的論議を弄するので、宗教として不可思議力を信するのでなく、理屈を附けるのであると叱して居らるゝ。つねに自然を沙汰せは義なきを義とすといふことは、なを義のあるべしとあるが實に此點である。即ち哲學的研究が佛教信念を消磨し去ることを深く戒めたまひたるものである。

情々現代社會の大勢をみるに、物質的文化は非常に發達するも、精神的に墮落しつゝあるは何人も担ひことは出来まい。嗚呼穢れたる國土、腐敗せる國民、痲痺せる人心、如何にして之を清め、如何にして之を救済し、如何にして之を改造すべきか、正さに是れ宗教信者の眼前に提出されてある生きたる大問題である。此際吾人唯一の生命とすべきは佛陀慈愛の大いなる光である。佛陀救済の大いなる力である。是れ實に人心改革の大動機であつて、又社會改造の一點火である。冀くは道を求むるの士は、佛陀を求むるの人よ、徒らに哲學的戲論に走らずに、御互に

直撃の態度を以て頭燃を拂ふが如く、求哀懺悔して信仰を求むべきである。今や正さに時來りてある。確かに過去二十年間に於ける哲學的懷疑時代は去りて、明治時代に於ける清新なる敬虔時代の曙光は既に地平線上に來りつゝある。

自然といふは自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり。然といふはしからしむといふことば、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆゑに。法爾といふは如來の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふ。この法爾は御ちかひなりけるゆゑに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆゑに他方には強なきを強とすとするべきなり。

自然といふはもとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無彌陀佛とたのみせたまひて、むつへんとははせたまひたるによりて、行者のよからしむる、あしからしむるもおほはねを、自然とはまますたさきとてまふらふ。ちかひのやふは無上佛にならしめんとす。ちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、ちかひもなくまします。ちかひましまさぬゆゑに、自然とはまふすなり。ちかひましますとしめすときは無上涅槃とはまふす。ちかひましまさぬやうなしらせんとして、は下めに彌陀佛とまふすならひてまふらふ。彌陀佛は自然のやうなしらせんなり。この道理を、ちかひましますは、この自然のこゝは、つねにまします。ましますにあらざるなり。つねに自然をませば、強なきを強とすといふことはなきの強のあるへし。

(親聖聖人)

三 倫理問題の解決如何

倫理學者の態度

日本將來の倫理道德は如何なる根底の上に築かるべきかは、非常なる大問題にして、刻下志ある人々は心を潜めて、眞摯に研究しつゝある。抑、現時中學已上の諸學校に於て、倫理科として教授しつゝある方針を見るに、所謂教程なるものは一往定まりて居る。されど畢竟順序と形式に過ぎないものにして、實際上倫理道德を説く時には何等かの主義何等かの書籍によらずんば不十分である。若し此點に立入りて全國中學已上の學權の倫理科の内容を調査して見れば定めて色々であらう。中には漢學先生が儒教主義を以て教へて居るもあらう、又國學先生が國家主義を以て話して居るもあらう。又倫理學の講義を爲して、西洋では科學として研究された書物が、日本では既に教場内にて教訓として實地に應用されて居ることもあらう。されど大部分は一定の主義によらず、古來の道德宗教及び聖賢の言行歴史等雜然として之を集め來り、何等の統一もなく、何等の調和もな

く、断片零碎を以て青年の頭腦を形作らむとするものが多數を占めて居るであらう。是は公平であるだけ、夫れだけ要領を得ぬことゝなる先づ、此點が定まらずして眞の意味に於ける教育が出来るものはないが、吾人は早晩一大問題として新光明の來らむことを望むものである。學校夫自身が猶一層強固なる教育をなすか、學校已外に何等かの方法を以て此點を補ふことゝするか、何れにしても非常なる缺陷たることは明瞭である。

實際上に於て倫理問題の解決せられて居らぬは此の如くであるが、思考上に於ては如何なる有様であるか。

現時倫理問題は最も樞要なる題目として研究され、從來の如く單純に哲學的基礎のみで説明され得べきものでなく、歴史、宗教、文學、美術、苟も開明の分子となるべき者は皆關係を有し、西洋に於ては彼が如き歴史と、彼が如き修養とを以て、彼が如き道德の基礎を置きたる原因を明らかにし、東洋に於ては其歴史を顧み、今後如何なる修養に出づべきかを研究して、將來の倫理道德の理想を形作るべき運命を有しつゝある。吾人は從來學者教育家が此理想を形作らむが爲めに非

常に苦心しつゝあるを見て、多くの尊敬を拂ふものである。從來學者の胸中に蓄かれたる理想なるものは所謂空想にして學說としては問然する所なく、哲學的系統としては洵に完備したるものもあらむされど、惜い俄歴史を離れ、宗教を別にして考ふるもの故實行上欠くべからざる動機なるものがない。恰も時計を造りて其發動機を入れず龍を畫きて其睛を點せざるも同様である。吾人は今後一層廣き眼光を以て研究されむことを望み、又大勢として此くなるべきことを確信する。

此の如きが日本現時の倫理問題の現状である。古來歴史上、思想混亂の時代は少くない。されど現時の日本程混亂を極めて居ることは少からう。又今日我國の如く倫理的內的制裁のなくなつたことも稀である。社會が腐敗し、人心が墮落して、漸次闇黒が近づきつゝあるも深く其原因の存することである。

○泰西に於ける宗教教育と及倫理運動

西洋にては實際上に於て倫理道德の根底となれるものは宗教である。彼等は宗教已外に道德の成立するものとは思はない。宗教といへば耶蘇教の外にない

様に思ふて居る。即耶蘇教なければ道德なしと云ふ考て居る。一見頗る笑ふべきが如きも、此に至りて道德的の制裁が著しくなるのである。此の如くなるは何故であるかと云へば、即ち教育の結果である。即ち宗教教育が普通教育の中に入れてあるからである。全體個人として宗教の信仰が能く人の品性を養ひ、道念を涵養するものならば、社會全體の教育上に於て必要缺くべからざるものとなる。現時西洋に於ける宗教々育につき一言するに、米國の如き自由教會制なるにも拘らず、猶小學校に於てバイブルを教へて居る。只其解釋が一定の教會の信條を以て律せぬと云ふまでの事である。米國は信教自由であると云ふもの、夫は耶蘇教の諸教會の間柄のこと、基督教國と云ふ點に於ては、毫も歐洲と變りない。獨逸は何れの州にも新舊兩教の宗教々育を小學から中學に涉りて授けて居る。地方の多くの部分では寺院の僧侶は學校監督者の一人である。英國の如き教育上に於ける宗教の力は偉大なるものである。曲橋牛津の大學を初めとして、中學に於て精神的教育の中心は宗教家である。小學校には學校局に屬するものと私立のものとの二種がある。私立のものは英國教會ウエズレー教會、番教々會等に

屬するもので、夫々其宗派の主義を以て教育をして居るが、學校局のものは各隨意を以て其所屬の宗教教育を受けしむる次第である。近頃問題となりて居た教育案にては私立小學にして、教育局の補助を受けつゝあるものは一定の教會の宗教々育を強ゆることもなく、又強て拒まるゝこともなしといふ次第である。要するに宗教々育を拒むのでない。特に佛國に於ては學校内に於て全然宗教々育を排して居るが、是れは現時の國家政策として舊教的勢力を排斥するより起りたるものである。學校外即ち教會で宗教教育を受けるのは妨げさるのみならず、之れが爲には學校は時間の融通して隨意に受けさして居る。かく歐米に於て宗教はたしかに實際上教育の中心となり、道德の動機を與ふるものとなりて居る。歐洲に於ても倫理學は科學として研究せられて大に行はれてある。されど其學說を以て學校内部の實行的の倫理として居ることはない。實行上に於ては宗教と相待ちて其効を有することゝなる。日本に於て或者は倫理學を以て宗教に代用し得るかの如く考へ、既に歐洲に於て實際上此の如き現象が起りつゝあるかの如く考ふるは大なる誤りである。勿論米のアンドラー、英のスタントン、コイト、

獨のギンツキ、等の倫理運動なるものがある。又ボサンケイ、ムイアヘッド等の率ゆる會もあり、又倫敦倫理會なるものもあり、シヂウツクの主宰して居つた曲橋の倫理會もある。是等とても教權の宗教信條の宗教の如き權威の宗教を排斥するあるも、實驗の宗教の如き人間内心の情操に實感する眞の宗教に至りては排斥するものではない。吾人が考ふるに、佛教の如き此點に於ては其純粹なる眞體を握みて實際上に應用するときは、寧ろ倫理實行の動機を與ふるものとして、確かに其理想に叶て居る。世人動もすれば、既成宗教は不可なりと云ふて、耶穌教を斥くると同様に、佛教を斥くは理由のないことである。吾人をして云はしめば、倫理實行の動機を與ふる爲めには、寧ろ歴史的宗教でなくては力がない。實際之を實行したる事實的宗教でなければならぬ。吾人の腦裡に偉大なる人格感化を與ふるものでなくては、活動の源とならぬ。唯信條教權を以て吾人の内心を強ゆるが如き宗教ならば、それは宗教として、確かに其極意に達せざるものである。此點に於ては吾人は他迄實驗の宗教を主張する。

佛教道德の根底

佛教が本來道德の點に於て卓絶して居ることは何人と雖拒むとはない。西人にして佛教を研究したる人は此點に感心せぬものは少ない。勿論吾人が論ずる佛教は真正の意義に於ける佛教にして、現時の腐敗せる状態は眞面目の意味から云へば佛陀の意思に反して居るものである。恐懼すべきことである。諸此真正の佛教、即ち原始佛教を始として、後來發達せる諸宗派開祖に至るまで、實行したる道德なるものは、佛教に於ける何れの部分に於て此の如き力強き動機があるかを研究しやうと思ふ。予は斷言する、佛教道德の根本は戒律である。佛教を佛滅後に於て結集、即ち蒐集編纂したる結果が經律論の三藏であつて、後代の作も今日藏經にあるものは此三者の何れかに屬する事は何人も知つて居る。されど此經律論の三藏なるものが如何なる分類であるかを適切に感知して居るものが少ない。第一に經なるものは安心立命に關する、佛陀の直説を書き集めたる部分にして、宗教の眞髓は此に集りてある。其小乘經たると大乘經たるとを問はず、原始佛教たると發達せる佛教たるとを問はず、信仰の生命、安心の實驗は經の中に集りてある。第三の論なる者は即ち佛教に伴ふ哲學形、己上學にして、教理の合

理的説明である。是は主として後代の研究發達の餘に成れるものである。而して第二の戒律なるものは、即ち佛教の道德律である。佛陀直接の嚴戒である。信徒實行の軌範である。即ち佛教倫理の根本である。世人は戒律と云へば一種異様の感而起し、人世に於ける道德律でなくて、人生己外の苦行の軌則の如く思ふて居るは大なる誤りである。是後人が單に戒律の形骸を墨守することを知りて、其精神を攫むことの出来なかつた結果である。若し今日佛陀が戒律を制し賜ひたる精神を服膺したらむには、今日の如き佛教の腐敗を招かなんであらう。

抑々戒律なる者は、世の所謂箇條的た形式規則を列べたるものではない。佛弟子にして醜き所行をなしたるものあれば之れを禁し、又粗暴なる言語を放つが如き事あれば之を制し、遂に積りて譴然たる戒律を生し來りたるものである。故に戒律の精神は外でない。佛陀が吾人遺弟に對する直接の聲である。小乘の意味ならば戒は單に消極的に惡を禁制する事である。然るに大乘に至りては、消極的に禁制を事とするのみではない。積極的に善の獎勵をも加はりて居る。又戒律の種類によりては單に人間として德義を獎勵したるものもあり、特に道を求

するもの道を行ふもの、爲めに必要な教團組織に關するものもある。而して予か今大いに云はむとする所は其戒の精神を得ることである。佛陀將に入滅し玉はむとする時阿難佛に問ふて曰く佛滅の後ち我等佛に遇ふこと難し何を以て教を受けむと佛答て曰く我滅度の後は戒を以て我と思ふべしと乃ち戒は佛陀の生ける誠なり是か戒の精神である。佛教倫理の根底である人間道徳の動機である故に戒の形式なるものは時代の相違、人種風俗の相違、社會事情の推移の爲に決して直譯的に實行せらるゝものでない。又た中には之を墨守して翠に膠して彈するの愚を學ぶこともある。然れども此戒の精神は千古失ふべからざるものである。然らば如何なる形式を通して戒の精神が吾人道德實行の動機として吾人の行爲に力を及ぼすものであるか、宗教の實驗上の一問題である。

戒律の眞精神

現○今○倫○理○上○の○問○題○と○な○る○要○點○は○何○物○か○實○行○の○動○機○で○あ○る○か○と○云○ふ○事○で○あ○る○。人○或○は○稱○し○て○良○心○の○聲○と○い○ひ○内○心○の○私○語○と○い○ふ○何○れ○も○力○強○き○働○を○願○は○さ○ん○と○勉○む○る○も○の○で○あ○る○。而○し○て○實○驗○上○に○於○て○如○何○な○る○効○果○を○有○す○る○か○と○云○ふ○に○カ○ン

トの所謂無上命令法で、畢竟此の如くせざるべからず、彼が如きは爲すべからずと云ふ觀念に過ぎないのである。此觀念を形容するに此の如き人格的言語を以てするのみである。若し取りつめて考ふる時は、其方強き言語も雲消霧散して何等の効力なきに終る様になる。吾人の實驗上道德實行の點に於て、心中危機に瀕したるときは單に此の如き觀念のみにては其力が弱い。必ずや人格的形容に止らずして、人格の實在が非常なる力強き指導を與ふるに非んば不可である。

此に至りて吾人は實驗の宗教を睡らねばならぬ。吾人の宗教は信仰の一點である。直接に佛陀に接觸して、其慈悲心中に融化せらるゝのである。而して吾人は確かに嚴父の膝下に坐するが如く、慈母の懷に眠るが如き實感を抱きつゝあるのである。心中に於て其光を見、其聲を聞くのである。此味たるや、筆以て描く能はず。口以て語るべからざる者である。而して此偉大なる佛陀が吾人實行上に於て與へらるゝ指導なるものは非常なる力強き者である。此の如く爲すは佛陀の意志である。佛陀の命令である。彼が如きは佛陀の禁戒である。佛意に背反したる行動にして、佛陀は昭々乎として吾人の頭上に照臨し、賜ふと云ふ實感を生ずるの

である。吾人は實驗上此の如く偉大なる力を感ずる次第である。之を實驗せざる人には此の如き力強き倫理的の動機を感ずることはなからう。吾人は之が爲めに他よりもより多く道徳を實行するとは敢て思はぬ。されど若し此動機なかりせば、吾人は既に業に非常なる危機に瀕したりし時、深淵に墮落したてあらうと回想して、坐ろに佛陀の拯濟を感じて居ることが少くない。

此佛陀の命令、佛陀の禁誡なるものが、即戒律の精神である。信仰の上に備はれる大なる徳である。吾人は勿論形式的の戒律を受くるものでもなく、眞面目なる意味に於て之を厲行することは頗る困難である。然れども信仰の一點に於て自から戒律の精神が生きて働きつゝあるのである。即ち釋尊が佛弟子及在俗の信徒の行動に對して一々下し賜ひたる戒律を法の如く規律的に行ふことは出来ぬ。寧ろかくすることは枯木死灰の如く、形式に拘泥するのみにして其各時代に處して、社會的に道徳を實行する戒の精神を忘るゝを免れない。されど吾人の心中に感ずる佛陀は事件の起る度毎に一々教誡を下し、指導を與へ賜ふこと、恰も釋尊の世に在りて親しく訓戒を下し賜ふが如くである。是決して驚くべきこと

ではない。心中生ける佛陀を感ずるものは、亦此生ける教訓を感ずることは寧ろ當然のことである。佛教の眞髓を佛陀の一點に鍾め來りて之が感化を蒙るが信仰である。故に此信仰の中より自から實行上に佛教の精神があらはれてくる。所謂知らず識らず帝の則に従ふと云ふ、佛陀の意志に協へる生活を實現することとなる。此に至りて信仰の宗教的實驗によりて倫理問題の圓滿なる解決を得た次第である。

將來の宗教は倫理的ならざるべからずとの言は、度々反覆せられたれども如何にして倫理的たるべきかを聞かない。亦宗教は倫理已上の安心の畛域を開拓することは明らかであるが、助もすれば、夫が爲めに宗教が非倫理的行動を平氣に行はしむるが如き誤解に陥り易い。又教育と宗教との關係及び倫理と宗教との關係につきても種々の言論があるが、兎角其論點が不明瞭である。吾人は茲に實驗を披瀝して敢て大方に批評を請ふのである。即ち吾人は倫理問題從て教育問題の最終を眞正なる宗教の眞髓を待ちて初めて解決を得ること、確信する次第である。

吾、世を去りて後。経道漸く滅し、人民困憊にして復た衆惡を爲り。五燒五痛、避て前の法の如くならむ。久うして後轉々劇しからむ、悉く説く可からず。我但汝が爲に略して之を言ふ耳。佛彌勒に語り賜はく。汝等、各善く之を思ひて、弊々相教誡せよ、佛の經法の如くして犯するを得る勿れ、と。是に於て、彌勒菩薩を合せて白して言さく。佛の説き賜ふ所、甚苦るなり。世の人實に爾り、如來、善く慈みて哀愍し、悉く度脱せしめ賜ふ。佛の重を蒙受けて致て遺失せずと。

(無量壽經)

昔人あり。久しく吉祥天に事ふ、遂に徳解を感ず。餅中より一切の寶を出す、此人忽にして慳慢の心を起して、雙脚を擧て餅を踏む。餅即ち破れて、寶も亦奪て失す。法華の行者も亦此に類するあり。故に吾佛般涅槃に處て、重て戒門を明らかにして救世の凡夫の甘羅に酔へるものに示し玉へり、余十年前涅槃經を讀む、と一過、今悉く遺忘して未だ破まざる時の如し。是淺夏季病少しく間あり、高臥の餘、偶々明の圓澄の會疏を取りて再び讀む、感々に舊論に逢へるが如し。仰て佛性常住の旨を觀下、俯して扶律の意を察す。

〔深草元政上人「如來秘藏錄」〕

四 社會に於ける内的制裁力の養成

教科書問題は一なる小問題ではない。社會全體が腫み腐されて居るのが、單に傷口を見出して其醜態を暴露したものである。故に國民は深く心を潜めて此警戒に聽く所がなくてはならぬ。教育者は神聖なる職分である、教科書は教訓を書きたる本である。此人が此本に就きて腐敗の事實ありとすれば、如何に教育の内的制裁力が弛緩して居るかを知らるべきである。

翻て社會を顧みるに、何れの社會が此等の事件に對して、十分に制裁を加へ得べき資格を有するか。政事家は如何、若し仔細に檢舉し來らば猶一層の醜態を暴露するなるべし。鉤を盗むものは罪せらる。國を盗むものは侯たりと云へるが如き感がある。然らば社會上唯一の制裁たるべき新聞紙は如何、彼等の中他に對して制裁を加へ得べき資格のあるものは寥々たるものである。寧ろ平和の服裝をしたる暴君である。熱々社會の奥底まで見透すに何れの社會か他に對して制裁を加ふることを揚言し得る資格がある。

かく云へばとて吾人は決して今回の事件を以て其關係者を恕すべしと云ふにはあらず。他の社會は兎も角、教育の社會に此事ありたるは最も反省すべき點にして、社會全體も深く此警戒に鑒みて各自戒むる所なくてはならぬ。此に於てや、吾人は如何なる方法を以て此社會の腐敗を救ふべきかと云ふ問題を講じやうと思ふ。

社會に於ける制裁力なるものは、單に外的制裁力だけでは何の功力もない。外的の制裁力には必ず内的の制裁力が伴はざれば何の効果もなからう。外的制裁力は團體の勢力とか、多数の輿論とか、幾多の方法はあれど、畢竟是れ團體を形作る各員が心中深く感ずる制裁力を、外形に顯はしたるに過ぎない者である。又多数の精神上に於ける内的制裁に抵觸する行爲に對して、自然に一致したる聲でなくてはならぬ。故に外的制裁が有效なるには内的制裁の嚴格なる精神がなくてはならぬ。從來我國に於て一時制裁を加へられた人が再び社會に出づると云ふは、制裁が眞實の制裁でなくて畢竟形式に過ぎないからである。

制裁を感ずることも心中に於ける内的制裁にあらざれば何の益もない人が

自己の内心に於て一黠疾しき點あらば忽ち之を控へ、其正しと信ずる事柄なれば輿論に反しても主張すると云ふ様でなくてはならぬ。單に他の迫害を恐れるとか、名聲の如何に懸念して行動云爲するが如き者あらば不眞面目の極である。人は内的制裁によりて行動して、始めて眞摯となるものである。若し人が此點を顧みずして單に外的制裁のみに眼を付けて、動くに至れば慥かに偽善に陥る様になる。虚名を追ふ輕薄なる人物となるのである。眞個の人物は此内的制裁を以て行動する人であつて、健全なる社會とは此内的制裁が社會に於ける外的制裁に顯はるゝ事である。

猶一層進みて、今日すべての社會がかく迄腐敗したるは何歎と云ふに、畢竟誘惑に對する抵抗力がないからである。腐敗を斥くる勇氣に乏しいからである。此點に於て今日の社會が如何にも力が乏しい。現今社會上の腐敗は諸種の點より觀察することが出来る。經濟の膨脹に歸することも出来よう、政治的事情に歸することも出来よう。然れども何れにしても畢竟社會上の不平均に歸するだけのことである。社會上の不平均は又社會が矯正せねばならぬ、之を矯正すべき根據

がなくてはならぬ。是れ内的の制裁に待つより外に策はない。英國の社會が何故に健全であるか、英國の政治は何故に立憲的に運行するかと云ふに、決して制度組織の爲めにあらずして、各個人に於ける内的制裁力がよく養成されて居るかである。

人間の内的制裁力は如何なる方法を以て養成すべきかと云ふに、宗教の力を待つより外はない。苟も常識を有するものならば賄賂をとるがよいか、悪しきかを判断出来ぬものはない。唯其悪しきを斥け、善きを取ると云ふ意志の力が弱いのである。此力強き意志は實驗上、進も宗教の力によらずんば養成することが出来ぬ。人間は平素考ふるときは通常の事でも、實地の場合に至れば、随分至難なることがある。他より誘惑の來るとき、諸種の口實を以て、色々の口辯の下に自己が自己を欺かんとする。此時之を切り拂ふもの之れが墮落を救済するものは、獨り偉大なる力ある佛陀の照鑒より外にない。此時に於ける佛陀の救済の力強きに打勝つものはない。此時の心中は所謂天知る地知る我知る人知る底の明々白々なるものである。

此制裁力は如何にして養成さるかと云ふに、宗教に待つことは言ふまでもないが、宗教でも嚴密に此佛陀の冥鑒を感ずる様にならねばならぬ。宗教は一方には嚴格なる實行を誨ふると共に、一方には無限の救済を説くものである。然れども動もすれば救済を説く極、罪惡を寛容するが如き誤解に陥り易い。此點に於て最も深く戒心すべき點である。蓋し人の實行なるものは一種の惰性を有するものである。故に一刻一時佛陀の威神を感すべく修養せねばならぬ。

然らば社會全體が如何にして宗教の力を感ずる様になるかと云ふに、決して一朝一夕にして成るべきことでない。然れども實行の方法としては教育の根底に宗教の考がなくては可かぬ。吾人は歐米各國に於ける宗教々育なるものが、此社會的制裁力を養成するに大に力あるものと感ずる次第である。蓋し宗教は一時に其功能のあるものではない。されど幼時より之が薰陶を得れば、實際問題に衝き當たりたるとき、初めて偉大なる力と清淨なる光を發するものである。吾人は教科書問題によりて暴露せられたる社會腐敗の根本的救済は、社會の内的制裁力の弾力を強むるにあることを切言する。

涅槃經の中に、洵に適切なる譬喩が説きてある。人ありて淫蕩を帯びて大海を渡らむと企てた。海中に一の羅刹が來りて其淫蕩を求めた。そこで其人が思ふには、今若し之を興へたらば必ず溺死するに疑ない、汝等も我を殺すとも決して淫蕩を興へないを斷言した。すると、羅刹重ねて暗ふて曰く。汝若し全く、我に興ふこと能はずむば、願くは其半を蕩まれよと、此人猶之を拒絕した。羅刹復言く。汝我に半を蕩む能はずむば、願くは三分の一を興へよと、此人猶拒むだ。羅刹復言く。夫も出來れば唯手ばかりを興へよと。此人猶肯はぬ。そこで羅刹哀訴して曰く。我今飢窮して衆苦に逼られて居る、若し手ばかりも興ふること能はずむば願くば微塵ばかりなりとも我に興へよと。此人復言く。汝今寒むる所は誠に多からず、然れども我今日方きに海を渡らむとして、未だ前途が如何程あるか其遠近を知らぬ次第である。若し微塵程でも汝に興へたならば氣が漸々出で大海を渡る能はず、中途にして溺死するより外はないと答へた。此淫蕩とは禁戒を譬へたものである。即内的制裁である。羅刹は煩惱を譬へたものである、即勝惑である。十人見て雖も恐ひと感ずる者しき勝惑には打勝つことは困難でないが。此位な値かなことは、普通の事なれば可からむとて。一點なりとも自ら欺きて勝惑に従ふときは、其一點の穴より、如何に大なる淫蕩中の空氣も皆出て仕舞ふ。内的制裁の彈力の緩みて仕舞ふも同様である。世上、禁酒禁煙を誓ふたる人が、之を破る場合が其通例である。一杯位は可ならむ、一服位は可ならむとの勝惑の私語は、忽ち十年の修養を一期にして破壊する。

五 學生間に於ける信仰の勃興

求道的新氣運

近時學生の間に信仰を求め宗教を得むとするの氣風が勃興し來りたる事は頗る著しき様に考へらるゝ吾人は此に對して非常なる希望を以て眺めつゝあるものである。而かも其提起せらるゝ問題道を求むる精神なるものが從來の如く、試みに坐禪をするとか面白半分には講義を聴くとか哲學が高尙だとか文學が清新であるとか云へる如き表面上形式より來りたるものでなく、猶一層眞摯なる態度を以て根本的に宗教の精神を握まむとするものである。甚しきに至りては本人自身は宗教を求めつゝあることを自覺せずして苦悶しつゝあるものすらある。

抑○宗○教○問○題○は○人○生○問○題○の○最○後○の○解○決○で○あ○る○故○に○眞○面○目○に○抑○人○生○ど○は○如○何○な○る○も○の○で○あ○る○か○を○考○ふ○も○の○な○ら○ば○必○ず○宗○教○の○精○神○信○仰○の○樞○機○に○達○せ○ず○は○止○ま○ぬ○者○で○あ○る○近○頃○青○年○學○生○間○に○あ○り○て○多○少○眞○面○目○な○る○人○は○何○れ○も○何○ん○と○か

人生觀を定めむと欲して苦心しつゝある者が多い。勿論中には随分思ひ切て宗教と反對の方向に趨つた考もある。然れども人生と云へる大問題に手が達して居るだけ、確かに形式的に宗教を弄するよりも、より多く宗教的である。ニツチエの如き人生觀は固より宗教の眼よりみれば邪まなる道に陥りて居る。されど人間の弱點を看破して、非常なる反働の聲を發したるものである。若し個人と社會とは同一なる生活の行路を辿るものとすれば、ニツチエの如きは宗教を求むる時代精神を代表する飢渴を訴ふるの聲と見做すことが出来る。こは宗教に最も遠き思想でも人生問題を解釋せんとする活ける實感を顯はしたる聲は宗教の精神に近いと云ふ一例を挙げたまで、ある。とにかく現代學生の頭腦を苦しめつゝある問題は、理論や教理の如き宗教の形骸にあらずして、人生の根本義、精神上の安慰と云ふ如き充實せる問題である。又道德上の問題の如きも、單に其原理の説明にあらずして、實行上力強き動機を得むとすることである。其甚しきに至りては苦悶の極、學問夫れ自身に於て何等の目的をも見出すことあたはず、人生其物の意義をも發見することあたはずして、失望落膽の淵に沈まむとする如き。

眞鑿なる態度に出づる人の少からぬことを實見しつゝある次第である。門は叩けば開かれ響へらる。鐘は撞くを待ちて聲を發す。求めずして得らるべき筈もなく、通常の生活に尋常なる態度であつて信仰の來るべき筈はない。釋尊が城門を出て、老人、病人、死人の如何に苦むべきか悲しむべきかを目撃して、人生問題の解決に苦しみ、煩悶の極、城を遁れられたるが如き、最も宗教的實驗の模範として、偉大なる感想を吾人に與へらるゝ次第である。又ルイテルがエルフルト大學に在るの日、アウグスチーネル、修道院に遁れて其一室に籠りて苦悶に沈みたるも、クロンウエルが非常なる憂鬱病にかゝりて苦痛に堪へず、半夜屢々醫の助けを呼びたるも、皆人生問題の解決に苦みたる實驗である。吾人は、此種の求道精神の傾向はたしかに青年學生の間に潜伏しつゝあることを確信する次第である。

偉人の青年時代

此の如く、求道の精神の熾んなる學生が如何にして満足安心の地位に達すべきかは直ちに解決を要する問題である。吾人は必しも釋尊の如く家を捨てざる

べからず、ルーテルの如く學校を遁れざるべからずとは論せず、勿論彼ルーテルの如きは苦悶の極安坐するに忍びずして此の如き結果に陥りたもので、特にかく爲さむと企て、爲した譯ではないのである。故に眞摯に道を求むる精神だにあらば、寧ろ學問と平行しつゝ、信仰の確立を謀ることが最も適當であると考へる。併し人によりては前に配せる如き苦悶に陥る事はあるが、又苦悶せざる可からずと考ふるも頗る不自然である。要は健全なる方法を以て宗教を味ふことが必要である。

然らば如何にして宗教を味ふべきかと云ふに、吾人は眞摯なる精神的談話會を催ふして、各自の實驗を語り、信仰を披瀝し、宗教の聖典を輪讀し、古聖の教訓を味ひ、殊に其實行の上に於て一々信仰の生命より推し出して、生活上に宗教の意味を實現することが最も適切であると考へる。予は必しも多數相會せざるべからずとは思はず、又深遠なる研究を爲さざるべからずとも考へぬ。活ける研究、實踐的の信仰が最も適切であると考へる。即ち直ちに人生夫れ自身の上にて實驗的に解決するが最も其所を得たるものと考へる。

古來、宗教的運動の起源か其青年時代、學生時代に始まりたるものが多い。親鸞聖人の如き叡山に在りて、幾多の研究に腦髓を絞つたる後、非常なる求道心に驅られて遂に法然聖人の庵室に安所を發見せられた。當時吉水黒谷の地方は求道者の集會所であつたに違いない。日蓮聖人も叡山修業の當時既に一種の思想を抱き、南都地方の旅行を終へ、古郷に歸りて其所信を宣傳した。ルーテルは學生時代に信仰定まりたる後、以太利亞の旅行に於て幾多の感慨を齎らして歸り、ツツランベルヒの大學に教授たりし時、宗教改革の事業を起し、同學の友メランヒトン、スマラチン等之を助け、晩年ツツランベルヒの住家に於て、ブーゲンハーゲン、ヨイナス等と共にバイブルの翻譯を完成した。當時の室は今猶依然として舊の如く存在して、旅行者をして感慨措く能はざるものがある。又ロヨラは巴里大學に在りたる時、サビエー等の六人の友人と共にモンマートルの山上に於て相誓ひて、奮發の恢復を謀り、遂にセイイツトの組織となり、サビエーの東洋傳道となつた。其結果が天草の亂である。又セイイツト主義の大成功は今日モンマートル山上の舊跡に、天に聳ゆる大伽藍の新築せられつゝあるにても明瞭である。又チ

ロンドン、ウエズレーは牛津大學に在るの、日、第のチャールズ及びモルガン、キルクハム
の三人と共に夜會を催ふし、希臘語の新約全書を輪讀し、隙ある時は監獄を見
舞ひ、貧民を慰める等のことをした、是がメソヂスト運動の起源である、看よ學生
時代に於ける、敬虔なる信仰と熱心なる實行が如何に大なる結果を社會に残し
たかを。

吾人は青年學生にして道を求むるの士に警告する、諸君の任務は決して小な
るものでない、諸君にして苦しむ所以のものは先づ覺るべき使命を負ふて居る
のである、諸君の求めむとする所は乃ち社會か得むと欲して居る所の者である、
予は斷言する、現時學生間に於ける熱心なる求道の精神の勃興せる所以のものは、
たしかに現時の社會上に於て大なる意味の存することであると確信する。

現代の悪風潮

古來思想の混亂の時代は随分多けれど、現時日本に於ける思想界ほど混亂せ
るはなかるべく、古來不眞面目なる社會は決して少くはないが、我國今日の社會
ほど不眞面目なる社會はなからう、近頃新聞紙上にあらはるゝ事實を見ても實

に忍び難き事ばかりである、して之を筆にする新聞紙なるものも、畢竟人の嗜好
に投じて售ることを求むる爲めである、又世人も腐敗したる語を面白がつて見
て居るなど、實に不眞面目の人間ばかりの集合である、宗教界の腐敗は固より言
語道斷である、されど之を攻撃する社會が決して他を攻撃出来る資格はない、日
本現時の政治家も、實業家も、教育家も、學者も眞面目の意味から言へば一も取る
べきものはない、勿論權謀に巧みなる政治家はある、權勢に阿諛して齟齬を事と
する實業家はある、逢迎主義の學者、器械的の教育家はある、して人間はかくして
生活し、かくして云爲し、かくして醉生夢死すればよいのであるか、人生は此の如
き滑稽なるものであるか、浮薄なるものであるか、人生問題の解決、即ち宗教の振
作、信仰の確立ほど現時の日本に於て必要なる活問題はなからう。

古風なる漢學的の教育を受けたる人は頑冥ではあるが、一點堅持する節操な
るものがある、舊信仰を抱ける人は随分古めかしき形式はあるが、精神上に大安
慰を得て居る、然るに現時維新當時より、已後の所謂知名の士と稱せらるゝ中老
年輩の人士ほど、不眞面目なる人種は、恐くは少からう、法律に觸れざる限りは何

事を行ふも可なりと考へ、品性の何物たる、人格の何物たる信仰の何物たるをも知らず、宗教と云へば表面的儀式の事と考へて居る。かく云へば僧侶が夫已外の事をせぬからだとな非難するものもあらうが、宗教を以て一部階級に属する一種の職業的事業の如く考へて居るのが抑の誤りである。宗教は社會の宗教である、人間の宗教である、各自の宗教である、各自の信仰である。

吾人は切に現時の學生諸君に望む。諸君は堅牢なる信仰の地盤に立ちて活動し、健全なる宗教を以て其生命とせよ。將來の社會を清むるものは悉くは宗教已外に之を求むることは出来まい。政治にも宗教は必要なり、實業にも宗教は必要であり、學者教育家にも宗教は必要である。苟も今後の社會に立たんとするもの、何人と雖宗教の必要ならぬものはない。若し此必要なる宗教、夫自身の爲めに、身を捧ぐるものあらば、是即ち宗教家である。傳道者である。古の親鸞日蓮も、ルーテル、ロロラも眞面目なる態度を以て青年學生時代より信仰の爲めに熱中した聖賢人傑である。

今や東西兩京帝國大學内に佛教青年會あり、第一高等學校に徳風會あり、千葉

醫學專門學校に樹徳會あり、第二高等學校に道交會あり、第三高等學校に佛教青年會あり、第四高等學校に道友會あり、第五高等學校山口高等學校内亦佛教青年會あり、早稲田大學に教友會あり、高等師範學校に亦佛教會あり、其他公私の各學校佛教教信仰を中心として起れる會合甚だ多い。近時此等の會合か或は信仰談話會を設け、或は自炊寄宿舎を設け、學生の眞摯なる信仰の要求に應ぜんとする氣運の勃興するを見て心中深く感ずる次第である。吾人は益々此等の會合が健全に發達して、明治の社會に於ける敬虔なる信仰を振作せむとを望むものである。

建仁第三の原春の聖人(二十九歳)隱遁の志にひかれて源空聖人の吉水の禪房へ尋ね寄り給ひき。是すなはち、世下り人拙くして邪行の小路迷ひやすきによりて易行の大道に趣かんざなり。眞宗紹隆の太祖聖人、特に宗の淵源を盡くし、教の理致を極めて、之を述べ給ふに、たちどころに他力攝接の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし〜けり。

(親鸞聖人傳繪)

六 活ける讀書と清新なる信仰

信仰の新源泉

近時新たな宗教を呼び新らしき信仰を求むる聲が聞こゆるが割合に其要求に應ずる救済の聲が反響しないやうである満足したる歡喜の叫が響かぬやうである。こは何故であるかと云ふに之を求むるに徒らに理論のみに奔り甚だしきは一種新奇なる教理でも發見したいと考へて居る弊がある。中には隨分満足の叫を發しつゝあるものあれど何んとなく生氣なく、光輝なく、徒らに當世風の文字を用ゐて實感なき形式を反覆しつゝあるが如くある。何人にしても確かに今日の青年が渴望せる靈的の要求は未だ満足せぬ様である。然らば如何にして之を攫取すべき、如何にして之を修養すべきかは實に大切なる問題である。

吾人情々考ふるに宗教が俄かに新たに作らるゝものではない。唯舊來の化石的の形式を破りて新たな眞面目を攫めばよいのである。故に若し眞個に之を求むるものならば既に吾人の目前にあるのである。清新なる泉は決して此朽葉

堆く巖石礫礫たる地層已外に存するのではない。若し深く穿ちて層内の水脈に達するときは如何なる處でも清泉は迸り出づるのである。人は古き宗教であると思ひ一讀信じ難き事實を以て滿たされつゝある如く考ふる經文も眞實求道の活ける仰望を以て誦するときは其間に信仰の泉が迸ることを認むることを得るのである。信念益々深きに達するときは到る處に佛陀救済の清泉は彼處の巖角よりも此處の苔藓の下よりも流れ出て、漚らかなる佛陀の中心は吾人の心内に流れ込みて直接に其感化を蒙る次第である。此信仰たるや清淨無垢のものである。佛陀と相接觸して融化せらるゝのである。教權を以て強ゆべからず、信條を以て拘束すべからず。况んや煩瑣的研究、理論的追求などの手の達せざる人心の奥底に潜みつゝあるものである。

古より活ける讀書眼を有するの人は、書籍の下に潜める光明を發見し、文字に寓せらる古人の靈智を攫み來る。其例古今東西決して少くはない。吾人は其二三を擧げて道を求むる人の爲めに示さふと思ふ。

二宮尊徳翁

二宮尊徳翁の一生は實に生ける人道にして、社會救濟者の明星である。彼が濟世利民の精神と慈愛至誠の赤心は如何にして感得したるものか、報徳記は吾人に示して曰く、

先生十四歳の時、隣村飲泉村觀世音に參拜し、堂下に坐して念することあり。忽然として行脚の僧來り堂前に坐し、讀經す。其聲微妙、深理廣大、一聞了然として、意中歡喜に堪へず、誦經既に畢る。謹て僧に問て曰、今誦する所の經は何の經ぞ。僧應て曰、觀音經なり。曰、予嘗て屢々これを聞けり、而して今聞く所に異なり、何ぞ余が心に徹することの明なるや。應て曰、世の誦する所は、吳音也。今國音を以て轉讀せり、是子の解する所以歟。先生懷中を探り、錢二百を奉して曰く、願くは寸志を呈せん。今一たひ誦讀し玉へ。僧其志を感じ、轉讀以前の如し、讀畢て去る。其行所を知らず、先生胸中豁然として、大に喜ひ、栢山村善榮寺に至り、和尙に謁して曰、大なる觀音經の功德、其理廣大無量、其意云云と説、解流水の如し、和尙大に驚て曰、予既に耳順を超たり、多年此經を誦する事、幾百千篇、未た其深理を解することあたはず。然るに子若年一たひ讀誦を聽て、無量の深理を明解す、嗚呼、是所謂菩薩の再來歟。今野僧此寺を退くべし、子願くば僧となり、衆生の爲に、此寺に住し、大に濟度の道を行ひ玉へと云、先生固辭して曰、是子の望む所にあらず、予祖先の家を起し、其靈を安せんとす、志す所出家にあらずといふて去る。是より後彌々佛意も諸人を濟ひ安するより、大なるものなきことを了知せりといふ。

翁の如きは實に心眼を開きて、經文を活かして讀めるものである。吾人は此話を聞いて、心中深く感じたる次第である。翁は確かに觀音慈愛の精神を感得せられたるに違ひない。是についても最も注意すべき點は、彼の行脚僧は國音を以て轉讀したる事である。眞率多感の青年が貧窮困難の場合に於て、經文の靈的文字が一句一句胸中に深く刻まれたる有様は、見るが如き心地がする。經文は全體信仰の結晶したる生産である。而して此の如き力強き靈的作用は、千古たしかに經文に存しつゝあるのである。現時最も必要なることは、之を信仰の力ある國文に譯する事である。若し國音を以て之を讀み讀むもの、聴くもの、非常なる仰望を以て之に對せば、何人か感ぜざるべき筈はない。之を感じたる人には、確かに清新なる

信仰である、感ぜざる人には古き資卷赤軸たるの外はない、如何にも革新は畢竟復古であつて、新たななる信仰とは新たななる經驗の巖角に出口を見出したる地下に磅礴せる千古靈活なる清泉である。

マルチン・ルーテル

歐洲に於ける宗教改革は、ルーテルがバイブルに於て新たな光輝を見出したるが源である。彼がエルフルト大學にありて、一旦憂悶に沈み、苦悶の極、斷然としてアウグスチーネル、クロースタルに入りて、日夜暗澹たる生活の中に懺悔を以て暮しつゝあつたが、一日其圖書部に於てバイブルを掃きつゝ、新たななる生命を見出した、是れ彼が全身を込めたる熱心によりて眼光紙背に徹したのである。されど彼は決して、理性的解釋や、煩瑣的討究によりたのではない、又之に對して、譬喩的、寓意的、比典的解釋を用ゐたるのでもない、一見最解し難き奇蹟や、吾人の最も信じ難き事蹟に向て、文句通りの事實的解釋をとりたのである、而して之が最も力強き點であつたのである。最も奇妙なることは、十五世紀の頃に於ける獨逸の他の高等なる學校が、バイブルの解釋に於ては、逆もエルフルト大學に及

ぶものはなかつたのである、而してルーテルは毫も此等の解釋によらずして、信仰の活眼で心讀したのである。否寧ろ當時の神秘的解釋の葛藤を破り來りて、最も單純素朴なる字面通りの解釋をしたのである。然れども彼は當時一般に用ゐられて、羅馬教會の便利になる様に書きてある羅甸文のバイブルではなくて、希伯來より猶進みて希臘文のバイブルに於て生命を見出したのである。當時ルーテルを親切に慰藉する事に力を盡したる、スタウピッツに送りたる書面に、當時の様子が見るが如く描かれてある。即ち左の如き事實である。

從來羅甸語にては、服罰受刑と解せられて、全く外形的形式として教會に對する罰金の意味と理解せられたる文字は、希臘語にては全く反對にして、内心的、精神的實感にして、懺悔改悛の意味なることを發見して、彼は非常なる愕然と喜びを以て満たされた。此に於てや新たに起されたる精神的の活氣と宗教的激動は、千古の信仰的生色を回復し來りて、内心的救濟、精神的勢力を勃興し來りたのである。

彼は此筆法を以てバイブルを讀了した。此に於てや當時の教會は古代の教會

とは全く異るとを發見し、教會の教權はバイブルの教權と置き代へらるゝに至つた。是やがて贖罪符の賣却に對して反抗の聲を擧ぐるの根元である。看よ驚天動地の大業が如何に深く信仰上に根底を有して居つたかを。夫故彼が事業は遂に又ワルドブルヒ城に於てバイブルを獨逸の國語に翻譯して、此新たなる生命を當時の社會に普及するとを以て大成されたのである。他山の石以て我玉を磨くに足ると思ふて之を例として擧げた次第である。吾人は平素親灸拜讀しつゝ、ある佛教經典の中に、靈活なる救濟の光明が溢れつゝあるにも拘はらず、未だ社會に光被せられざるは大に残念に感ずる次第である。

法然聖人

古より一宗開闢の祖師と稱せらるゝ人は、皆是れ經文の上に新らしき生命を認めたる人である。親鸞上人は大無量壽經に於て救濟を發見し、日蓮上人は法華經に於て妙力を感得した人である。是れ皆内心の實感に於て經文より偉大なる佛陀の力を享けたる次第である。結局迄言ひ込むれば、經文夫自身か、生きたる人格として現はれたものと稱すべきである。法然聖人の如きは最も著しき一例に

して、拾遺古德傳に左の如く示されてある。

聖人みづから淨土門に入る。濫觴をかたりてのたまはく、われむかし出離の道にわつらひて、寢食やすからず、多年心勞ののち、往生要集を披覽するに、序にはく、それ、往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤たれか、歸せざらんものぞ、たゞし顯密の教法その文ひとつにあらず、事理の業因その行これおほし、利智精進の人は、いまだかたしとせず、予がごとし、頑魯の者あへてせんや、このゆゑに念佛の一門によりて、いさゝか經論の要文をあつむ、これをひらき、これを信ずるに、さとりやすく、行じやすく、と云云、序は畧して一部の奥旨をのぶ、まさしく念佛の一門によると云云、中畧このゆゑに、予往生要集を先達として、淨土門に在るなりと云云、そののち黒谷の報恩藏に、いりて、一切經披覽五遍と云云のとき、光明寺の觀經義をみたまふに、極樂國土を高妙の報土とさだめて、往生の機分を垢障の凡夫と判せられたる義理をみるに、奇異のおもひやうやくうごき、別してまたかの疏を三遍披覽したまふに、第二遍にいたるまでは、いまだその宗義をぬず、これすなはち本宗の執心をさしはさみて、聖道の教

相になつむがゆゑなり第三遍にいたりてつぶさに本宗の執情をすて一心
詳敷のときふかく浄土の宗義を得たり。

聖人が寢食を忘れて熱心に道を求められた精神と血を吐かんばかりの多年
の心苦とは遂に一篇の往生要集の上に光明を發見されたのである。師匠の教空
を初めとして、當時の人々が觀佛を主として書けるものなりと考へられつゝあ
つた往生要集は適切なる安心を求めつゝあつた聖人の眼中には念佛の一門な
る文字は饑渴を醫する甘露の一滴であつたのである。殊に汗牛充棟の一切藏經
の中より觀經義を發見せられたること。山を穿ちて瓦礫土沙の間に一塊の金鐵
を發見されたるが如くである。而して此鐵石を内心熱中したる燃ゆるが如き求
道心を以て陶冶精練して此に純粹なる淨土宗義の金塊を見出しけりたる次第
である。後年聖人が其弟子に對して法を説くに當りて往生要集を緝き音吐朗々
として前記の序文を讀まれたる時、一種言ふべからざる森嚴の氣に襲はれて滿
座肅然として容を改め其席に待せし關白兼實は身を地に投じて感泣せられた
と傳ふることである。實に聖人の信仰より迸り出づる聲を以て其信仰の淵源た

る文字を朗讀せられたることなれば如何に神聖靈活の感を興へたかは千古想
像するだに其徳風を仰ぐ次第である。

嗚呼是れ皆古聖賢が活ける讀書によりて清新なる信仰を見出したる實驗で
ある。吾人も亦經文を心讀して無限の光明永久の生命絶大の偉力を感得すべ
である。事荒唐に類したるを以て棄つる勿れ心を潜め之を冥想すれば靈界に
對して如何に自己の小なるかを反省せむ言平易に似たるを以て之を輕んずる
勿れ手を下して之を實行すれば佛陀の教訓が如何に人生の秘奥を盡せるかを
悟らむ。

文字を目に見覺ゆる事ならざれども、聖人の本意を能く得心して、我心の鏡とするを心に心を讀むと申候。
眞實の讀書なり。心の會得なく、只目にて文字を見覺ゆる斗りなるをば、眼にて文字を讀むと申て眞實の讀
書にあらず。我眼にて書物を讀むことならざれども、聖賢傳を深く信仰して讀み覺えたる人に讀譯させ
其本意を能く得心して我心持身の行ひの鏡とするゆゑ、俗學の書物を讀み申より一層増りたる書物讀みにて
候得ば、嗚呼哉女も書物を讀まずして讀にて候。今時流行る俗學は書物を讀て讀まざるにて候。斯様の極意
能く體認有へし。

〔中江藤樹問答、無窮堂獨語より〕

七 信 仰 と 苦 悶

宗教は人生の根柢を自覚せしむ

宗教と云へば、殆んど人生已外のことの様、に考ふる弊がある。こは大なる誤である。若し果して人生已外のことならば、人間の企て及ぶべからざることにして、如何程高尚であらうとも、如何程微妙であらうとも、何の益もない。宗教は寧ろ人生に最も適切なるものである。人生の眞髓を攫むだものである。切言すれば、人生の人生たる眞意義を自覚せしむるものである。かく宗教を人生的のこと、と解すれば、又反對の極端に趨りて宗教を全く社會的の意味に解釋し、人生界一種の現象にして、全く内心の投影に外ならずと考ふる様になる。此點よりみれば、宗教は詩歌音楽と同じく、人文史上の一要素に過ぎない。淺薄なるものと考ふる様になる。是は亦大なる誤である。たしかに宗教は人生的のものである。が人生の表面にあらはるる一現象位のことではない。人生の全體を徹觀したるものである。人生の始終を自覚することである。切言すれば、人生の根柢を極めて、而して、其人生

なるもの、價値、人生なるもの、運命、進みて人生なるものが如何に靈界に接觸して如何なる位置をとりつゝあるかを自覚することである。

吾人が頻りに實驗的宗教を主張する所以は、即ち此自覺を切勵するのである。屢苦悶につきて云云するも、決して苦悶其物が必要であると云ふのではない。人生の極限を自覺する一の場合として、古來宗教上の實驗上、苦悶の結果安心を得たる人が多いのである。若し、苦悶が信仰の要素の如く考ふるならば、大なる誤である。全體人生の根柢を知るには、人生の極限に達することが必要である。例せば、死の問題とか、病氣に罹るとか、非常なる最大不幸に陥るとか、絶體絶命の厄難を被るとか、極端なる事例を擧ぐれば、墮落して殆んど人生を滅さんとするとか、絶望して自殺を企つる等の場合に於て、非常なる信仰を得たる人が多い。されど此等か宗教の要素であると云ふのではない。唯此の如き場合に、人生の極限を自覺した迄である。若し上來列擧したるものが、宗教の信仰上の必要の條件とすれば、宗教の信仰程不健全なるものはない。宗教の信仰程危険なるものはない。唯此の如き場合に、人生として試み得らるべき、凡てを實驗して、人生は此位なるものであ

る。人間の力は此所にて極るものである。人情は此邊にて盡きるものであると悟るのである。平時不真面目で暮して居るときは、何氣なく過ぎつゝあるも、愈々となれば人間は此程冷淡なものである。酷薄なものである。無趣味なものである。滑稽なものであると知るのである。如何程奮發しても人間は人間である。如何程心を清めても煩惱は無盡藏である。親子と雖此邊涯を越ゆへからず、兄弟と雖此邊壁に至りて極る者である。死の問題や如何所謂獨生獨死獨去獨來である。未來の問題や如何後生は獨り凌ぎ所謂親鸞は父母孝養の爲めに念佛一邊も申したること候はずである。此人生の邊畔に至りて人間の力は既に絶へて初めて絶體無限の力は始まるのである。此處に至りて人生の危殆なることが分かりて、靈界の地盤の上に立つべき必要が来るのである。人溺れむとするや必ず固く握み、人斃れむとして必ず杖を握る。其間髪を容れず、決して苦悶其物に何等の必要もない。唯苦悶によりて人生の極限を知りて、絶對佛陀の偉大なる力が初めて光輝を發するのである。

人生は一種の囹圄である。狹隘なる水滸である。此囹圄に居り乍ら囹圄たるこ

とを自覺せず、悠々として醉生夢死しつゝあるのが凡俗的生活である。然るに四方八面の鐵檻に突き當りて初めて之を自覺するのである。狹隘なる水滸を以て江湖の如く考へて、彷彿自得して居るのが小魚の實況である。然るに彼處此處の土沙瓦礫に妨げられて、如何に淺水雨滸の中に生活しつゝあつたかを悟るのである。囹圄中に苦悶すること、水滸の中に不満を訴るのが、決して安心する要件ではない。如何にも叩かざれば閉かれず、求めずは與へられぬ。されど叩くのは開くためである。求むるのを得るためである。然るに開くのを忘れて叩くことが信仰と考へ、與へられぬことを勉めず、求むるのを信仰と考ふる一種の誤がある。其しきは叩けぬと嘆き、求められぬと哀むに至るものがある。所謂急走急作して晝夜十二時に頭燃を拂ふが如くするも、凡て雜毒の善と名くとあるが、此點である。患可腕を斬て抛つ腕を斬つたのが要點でない。心を求めて不可得なるを悟つた點が、必要なのである。釋尊六年の苦行、遂に尼連禪河に沐して、一命を捨て、むとせられた。されど苦行は毫も解脱に利益がなかつたが、樹下の降魔得道の大樂境を、追り出した道行きてある。オ、ガ、ス、チ、ン、の墮落ル、イ、テ、ル、の苦悶、何れも、人生の

極限を知るの一場合たるに過ぎないのである。

一たび苦悶の暗を破り來りたるときは忽ち世界は光明界である。人生の極限を悟りして絶對の靈界に手が達したるときは、人生の邊畔を沒了するのである。戸を排して蒼穹を望む即ち室内は天空と連るのである。首を回らせは今の小人生は豈圖らむや永久の靈活の生命と連続して悠久なる生活を吾人日常の行動の上に持來するのである。此に於てや、我向ふ所佛之れを助け、我據り立つべきもの、獨り佛陀の大威神の他に何物もなき様になる。此に至りて苦悶は宿夢の如きものである。

古今偉大なる人物は常に苦悶症に陥るとあり。深黒迷暗にして永久の生命は其路を塞ぎ、天上の明星は其影を隠し、茫々たる地獄の深坑は蒼々たる曼天の魔尊に接せり。見よ、沙漠中に於ける誘惑、ヘルケレスの選擇何れも心靈上の一大變化を意味せざるなし。ナリヴァーをして彼が暗淡なる悲哀と憂鬱に於て慰藉を取らしめよ。彼が感ぜざる悲哀の分量は直に是れ彼が有する同情の分量及び彼が有すべき靈能勝利の分量を意味するものにあらざるや。吾人が悲哀は吾人が高貴の倒影なり、吾人が失望の深きは吾人が希望の高遠なるを徵するに足れり。黒煙地獄の如く宇宙に漲れり、而して眞實なる内心の偉力一たび加はらば怒潮火炎となりて天上の光榮は此に開闢せらむとす。

【カーライルのクローンヴェル徳】

八 修養論

上 實際的修養

信仰は修養の産物である。人物は苦心の塊である。全體宗教其物からが社會が一大悲境に陥り、一旦黒闇昏昧の極に達し、修養苦心の結果として生み出したる光明である。嚴寒嵐を劈く霜雪の苦に耐えて初めて梅花南枝の清香を放つのである。迅雷風烈天地も碎けむばかりの劇雨の後、夕陽青山一點の塵を留めざる清淨界を現出するのである。源平二氏の大争鬪は日本全國をして腥風血雨の修羅場と化し去つた。此深酷なる人生の極點を閱了したる日本の社會は、是非共鎌倉時代の高遠なる人生觀と敬虔なる信仰とを生み出さねばならぬ。空理を以て建設する宗教、文字を以て修飾する信仰は、圖案や畫餅と一般、人生上に向て何等の價値もない。十六世紀宗教改革前の歐羅巴の社會も其通りである。飢饉蝗、ヘスト、政治的野心、社會的墮落、宗教的腐敗、殆むと出來得る限りの罪惡を集め有らむ限りの弊害を積みたのである。今日より回顧すれば、よくもかく迄空氣か沈滞した

ものである。四方八面如何にも世運が梗塞したものであると考へる次第である。何ぞ圖らむ、醜積したは大爆發を促す爲であつた。他まで燃り切つたのは、世界を焼き盡す大燃燒を來す準備であつた。社會精神が修養鍛練の極に達して醸し出したのが宗教の開宗者である。此社會上の宗教的經驗を一個人の上に於て、反覆するのが信仰である。已上は、苟も修養を心掛くるの人は、先づ此慘澹たる人生界を實驗することが必要である。

全體修養と云ふことを考ふるに、恰も暖室に於て草木を培養し、牧場に於て家畜を飼ふが如く考ふるものがある。こは、大なる誤である。暖室に於て養ひ得る者は、華麗なる草花や、熱帯地方の質の極めて柔かなる乾木に過ぎない。牧場の柵内に於て育せらるゝものは、馴致し易き牛羊に過ぎない。草花は如何にも奇麗である。時節も早く開き、以て珍とするに足る。然れども畢竟眼を喜ばしむるだけのことである。牛羊の肥へたるは如何にも見事である。されど、莊子の所謂大牢の犠牲に供せらるゝ運命を有して居る。此の如きは、皆人爲的に養ひたるものである。養はむと欲して養ひたるものである。人間でも、修養せむと欲して爲したる修養の

如きは何等の用をもなさない。

ロッキン山の深谷に於ける氷雪巖角の間に、榎枒枝を交ふる盛々たる萬丈の老杉を見るときは、如何にも吾人の心を、壯快ならしむるものがある。彼等は幾百千年の星霜を閱了して、千古黒風白雨を、嘲りて居る。不幸であるか、幸であるか、人力の至らぬ所に生へてあるが、若し之が運び出さるゝことを得たならば、是こそ實に棟梁有用の材である。人間も其通りである。養ふ所のものは、用ふるところのものにあらず、用ふるところのものは、養ふ所のものにあらずである。故に修養なるものは、人工を以て培養することではない。實際上の困難、苦辛に衝き當りて初めて鍛ひ上げることである。

古來の偉人は、皆實際上の大困苦の結晶である。釋尊の大解脱は、生老病死の人生問題に苦悶を抱けるを初めとして、内心に於ける愛慾瞋恚の惡魔の迫害に、駢て遂に之を降伏するに至るまで、其生ける實驗は、吾人をして、實驗的宗教の模範として、千古感泣、渴仰に堪へざらしむるものがある。クロンウエルが眞摯敬虔なる清淨教徒の氣質を作り出したるは、彼が幼年の時ヒポコンデリヤに罹り苦悶

に堪へず、夜間屢々醫を呼びたる時期に胚胎して居る。ダンテ若し自ら人生に於て實際上高壯幽婉なる詩的感想を経験して、髣髴として天上に遊び、恍惚として幽明に來往するにあらずば、何ぞ神來の妙曲を遺すことを得む。想ひ回せば、古來の偉人が後昆に貽せる信仰の生命は何れも是れ一生を萬死の間に得、萬斛の愁を一瞬に集めたる慘澹たる心血の塊である。

苟も信仰を求むるもの、修養に心掛けるものは、此等の古聖賢の如く、實際的苦心が必要である。眞劍勝負が必要である。今日の所謂修養なるものは、畢竟型に過ぎない形式に過ぎない。此の如くして得たる信仰なるものは、畢竟信仰の眞似である。模倣である。眞實の信仰なるものは、人生の邊畔に達して、靈界絶對の堅城に據り据りたる境界である。此に至りて萬雷の爆烈するも笑ふべく、魔軍の雲集も嘲るべきである。

中 修養の目的は解脱に在り

信仰を得むとするに理論によらむとし、若くは餘裕ある態度を以てせむとする如きは、未だ修養問題に手の達せざる頗る遠き輩なれば、特に論ずべき必要が

ない。然れども吾人の最も愛ふべきは眞摯なる態度を取り、殆んど餘裕を存せざるまで熱心に道を求め乍ら未だ安心の境に達せざる人がある。是修養の中途にありて未だ至らざる者で、最も注意すべき時代である。

古來宗教に於いて罪惡の觀念の如き、厭世的的人生觀の如き信仰に入るの鍵鎗として、殆んど必ず欠くべからざる宗教的經驗である。故に宗教を説くものは先づ之れを口にせざるものはない。然れども自ら強て罪惡視せむとし、故意に悲觀せむと企て、いも決して經驗せらるべきものではない。何んとなれば此等の觀念は自覺より來るものである。必しも此の如く考へざるべからず、此の如く思はざるべからずと自ら強めたりとて、恰も苗を抜き、蕾を啓くが如きもので、何の益もない。寧ろ退て徐ろに雨露を仰ぎ、日光に面するがよい。又時としては罪惡の觀念に陥り、人生を悲觀して出づる能はざる人がある。如何にも罪惡を感ずることは慈愛に對する飢渴の情である。厭世的觀念は信仰的猛火を點すべき火藥である。されど飢渴は満足を得ずば安んずる能はず、火藥の裝置も點火せざれば何の益もない。此満足を與ふるものは宗教的妙味である。此火を點ずるものは佛陀光

明の直接の接觸である。然るに此妙味を口にせずして人生の苦味を訴へ、此光明を後へにして切りに世界の闇黒を嘆くものがある。吾人は此等の苦悶中にある人に對して、憐々として同情に堪へ難きものがある。此等の人は宗教的經驗に於ける疑城胎宮に幽囚されつゝある人である。

蓋し疑城胎宮なる文字は信仰の經驗上頗る意味の深きものである。若し其場合を數へ上げなば色々の種類がある。自力的罪福に陥るものあり、詩的懈慢界に遊ぶものあり、佛陀光明に接觸せざること華中に含まるゝが如く、未だ恢廓なる世界に出てざること胎裏に處するに似たるあり。悠々として既に知り得たるが如く考へて猶進む可きを知らざるあり。急走急作して、晝夜十二時に頭燃を拂ふが如くするも、水のかゝらぬ水車を踏み廻はして居るが如きものがある。何れも是れ信仰實際の城内に入りたるものなるも、未だ眞摯至誠の堅城に據らずして、邊地に於ける疑惑の牢獄に迷ひ込みたる有様である。修養の實際上最も注意すべき點である。蓋し疑城の繫縛は自ら脱し得たる後にあらざれば、之を自覺出來ぬものである。是猶更注意を要する譯である。

吾人が修養的眼光より見て最も惜むべきことは、正さに修養的機会が來りつゝあるにも拘はらず、空しく之を逸し、自覺すべき時機たり乍ら自覺せざる人である。修養は眞劔勝負であり、實際的境遇より生み出すものとせば、人生此等の場合に遭遇することは決して容易の事ではない。人生固より夢幻の如しとせば、其深き洞察力を有するものは、慥かに之を聲なきに聞き、形なきに見得可き筈のものである。されど通常の場合には一寸見難き虞がある。然るに大なる迫害が來るとか、悲惨なる事變に遭遇するとか、盤根錯節の困難、天運梗塞の悲境に陥りたる時は、信仰を磨くべき砥石を得たのである。正さに修養すべき機会が與へられたのである。若し俗耳より見れば不幸とか、不運とか云ふて相吊し相悲むべきことである。が、修養的眼光より云へば、又も來らぬ機會にして千歳の一遇である。所謂天の將に大任を下さむと欲して大なる試験を授けたのである。佛陀は吾人の信仰を促すべく、大なる催促を下し給ひたるものである。若し大なる試験、大なる催促を雲烟過眼視し去る如きは、修養上最も惜むべきことたるのみならず、佛天に對して最も恐るべき罪惡である。

下 修養には終なし

吾人は修養に入るの門戸と堂奥の極に達すべきことを論じた。而して一たび堂奥に達したりと雖夫て修養が終りたと云ふことはない。修養は卞和の璞を磨くが如く松柏の益々翠なるが如くである。磨かずして光あり養はずして翠なるものならば却て偽物たるの證據である。

古來の宗教の開祖は皆修養を以て一生を始終した人である。宗教家の一生に得意なる時代がない。其當時に於ける社會の懶眠より覺醒して大聲疾呼したものである。さればこそ社會に大なる力を遺したのである。其代りには社會は決して彼等を歓迎せぬ。寧ろ迫害した。社會は決して彼等に傾聴せぬ。寧ろ嘲罵した。彼等は時流に了解せらるべくあまり大くあつた。彼等は救濟せねばならぬ社會から賞讃を受くることは寧ろ苦痛であつたであらう。社會が迫害するだけ益々其眞理を宣傳するの必要を感じ、嘲罵を聞くに附けても如何に社會が迷ひつゝあるかを見て、坐ろに悲愴の涙を灑がれたに相違ない。此に於てや自信力は益々固くして孤峯峭峻として俗流を抜き、慈心汕然として同情の雨は乾燥無情なる敵

者の心胸を濕すに至つた。

全體人格の如何人物の眞價は其實質によりて定むべきものである。其實質の中心たるや學問にあらず、技藝にあらず、才智にあらず、位置財産にあらず、自信力である。即ち信仰である。當時の評價は關すべきものではない。然れども人間は本來虚飾心に富める動物なる故、諛辭は入り易く、贊詞は兎角心腸を腐らし易きものである。故に修養の點より着眼せば、寧ろ得意に處するよりも、失意に居る方が藥である。當時に知らるゝよりも、未だ知られざる方が趣味が深い。人間の眞價がある已上は、其眞價を世人が知らぬとて毫も愛とするに足らぬ。恰も黄金を埋むが如く、知らるべき時來らば自ら知らるべきである。自己の行ひたる功績は世に顯れずとも、功績は功績である。實際功績ありて世人の之を認めざるは、例へば貯金をなしたるが如き者である。一朝之を世上に發表し終るは得たる金を忽ち消費する様なものである。若し實に伴はざる名聲を博し、敢て當らざる好遇を世に受くるが如きは、社會に對して過大なる借金を負ふ様なものである。蓋し事瑣細なるが如きも一旦信仰を得たる後と雖、修養上頗る趣味の存する點である。

吾人は屢、親鸞聖人の一生を觀察するに、如何様に考へても當時頗ぶる冷遇されたりし。又攻撃も受けられたらしい。法然聖人の如きは當初は頗る非難はあつたらしいが、後に至りては門弟四方より雲集して、社會の一半は敵たると共に、他の一半は味方であつたらしい。親鸞聖人に至ては一向味方がなかつた。三十五歳一たび京洛の繁華を去りて、流離の奇禍に罹られて、後にも晩年に至るまで再び故郷に歸る氣もなかつたらしい。さりとて東國傳道中にも、毀譽紛々たるものであつた。蓋し親鸞聖人の腦中に宿れる敬虔なる信仰は時流と全く趣を異にして居つた。唯之を知るもの佛陀と同信の同朋のみであつたのである。其當時世人が知られざるだけ、後代に知らるゝこととなり。其信仰の單純にして、奥深きだけ、今日に至りて其實驗は生命となりて光彩を放ちてある。若し親鸞聖人をして當時に歡迎厚遇せしめられたならば、果して此の如き眞摯素樸なる信仰を修養し得たるや否や。吾人若し修養的眼光を以て外界を洞察せば、人間一生に於ける天然の顯象人事の出來事として、吾人が信念を練磨する修養の師父たらざるものはない。乃ち修養論を作る。

清濁師が平素愛敬を捨てざりし事三あり。一は阿含經、二はエヒクテラス、三は嘆息也。師は天性質樸の人、美食を好まず、美衣を嫌ひ、文學、詩歌、音樂等世の所謂優美なる分子に向ては先天的嗜好を有せず。師は實に生れながらにして阿含經中の人也。蓮華窟の一面門は寧ろ師の面目也。師一たび苦行を發してより、法衣必すしも絹を辭せず、食亦必ずしも肉を禁せず。雖、自ら持するも頗る薄し。師が窮乏なる規律的生活を處してより、益々師が眞個の精神的生活の眞面目をあらはし來りたるもの、如し。無戒中の戒、力行以て人を師と爲す。益々師の如きは近世再び見るべからざる事實也。而して自ら遇する此の如く薄きにも拘らず、人を遇するに益々厚く、自ら待つ此の如く嚴なるも、人を待つに寛也。師は阿含を繙きつゝ三衣一鉢弟子に圍繞せられ、安靜として食を市に乞ひ玉へる釋尊の風手に私淑せられしを想見せずむべからざる也。師固く士家に生る。自ら願乎として武士道の感化を享くるもの、如し。教界稀に見る所の資也。殊に克己自制的精神の激烈なる師の特徵也。宜なる哉、師はストイック的氣風を好み、意志的實行を尊ぶ。特に物質的快樂を避けて、精神的安慰の隱れ家を見出したる點に於て、彼のエヒクテラスが一奴隷、身として從容として天地の間を遊び、天下の富、帝王の尊、猶其樂を易ふ可からざるの精神に感ぜり。一日師語りて曰く、予が如き病軀、力維に然として苦悶の纏綿し來り、葛藤殆むと解けざるに及びてや、エヒクテラスの利劍を揮ふて之を切り開くに非ざれば、始むと活路を發見する能はずと。以て如何に師がエヒクテラスを心讀體讀したりしかを知るに足らむか。若し夫れ嘆息也。嗚呼師は苦しむべく生れられたり、人生を實驗すべく生れられたり。昨年一日師予に語せられたるの秘鑑也。嗚呼師は苦しむべく生れられたり、我長子は破壞せり、我妻は破壞せり、而して今や學校は破壞せり、我亦久しからずして破壞せんか。而して猶師を苦しむるに先づ弟二女を破壞して破壞は遂に師に迫る。人世若し慘憺たる歴史を求めなば師の如き亦其比を見ざるべし。而して師は毫も之が爲めに苦まざる也。師は實に人世に於ける運命を知れり、人生に於ける價值を知れり、實に生を知れり、病を知れり、死を知れり、嗚呼人生は實に此の如きものたるを知れり。人生は此の如きものなるを知ると共に、佛陀無限の救済は師が胸中に輝けり、佛陀無限の光明は師が全身を攝取せり。生くるも、死するも佛陀の御計也。善かれ、悪かれ如來の御思召也。云ふもの、是實に師の救済の光明を見出したる一大樂地にあらずや。死生命あり、富貴天にあり、云ふことある此命と天とが我信する如來の本體である」と云ふもの、實に師の最後の遺訓にあらずや。嗚呼此に至りて吾人亦何等の蛇足を加へむ。嗚呼清濁先生は是れ生ける信念也。嗚呼如來大命の權化也。此信念や天地辟くる時あるも動くべからず、此大命や世界破壞するさきあるも、千古常存にして歷々として其德音に接するべきを得べき也。實に是れ吾人永久の光明にして、又悠久なる生命の源泉と謂つべき也。

『善者清濁師之師及其信念』の一節

九 信 仰 論

上 吾人は何ぞや、佛陀は何ぞや

『一年有半』や、『天人論』が十數版を重ね、都鄙到る所に之を繕く人が多きを見れば、現時思想界の潮流を察することが出来る。吾人は之を見て、且つ喜び、且つ悲むものである。之を喜ぶ所以の者は、苟且にも世人が此の如き精神上に關したる問題に注目し、向上の途を辿らむとする傾向を卜するに足るからである。之を悲む所以の者は、此兩書の内容は恐くは時代精神を代表する者である。若し然りとすれば國民の内的自覺は猶程遠きものと言はなければならぬ。吾人は先づ此等の書に現はれたる思想を以て、社會の多數を代表する聲と見做して、信仰論の端緒を開かふと思ふ。

今日青年の人が先づ宗教に向て指を染めむとする時、普通に劈頭提起し來る問題は、靈魂は果して存在するものなりや、否や、佛陀とは如何なるものなるか、と云へる如き質問である。理窟から言へば如何にも宗教に入るに當つての先決問

題の如く思はれる。併實際上、信仰の問題として全然無意味の講究である。『一年有半』が無神無靈魂であると云へる、宣告を與へて呉れたとて、之を讀みたる人が、果して吾人は死せば虚無に歸するものと大覺悟して平然たることを得るか、『天人論』が如何にも直截簡明なる筆を以て、宇宙の本體靈魂の不滅を説明して呉れたとて、果して著者の想像せらるゝ如く、煩悶せる青年藤村操が、一讀の下に自殺を思ひ止るまで、安慰を得しや否や、頗る疑はしい。吾人は幾多の經驗の結果、決して効力のなかつたことを確信する次第である。

トルストイの人生論に於て、上に擧ぐるが如き態度を以て、宗教を求めむとする人を喻へて下の如く云ふてある。人ありて祖先已來水車を以て粉を磨く職業を執りしが、一日其水車の構造につきて考へ、各部を検し、最後に水の來る河を研究し始めた。之と同時に其家業を廢し、水車の運轉を止め、色々と講究の結果、河は即水車也との結論を得た。かく水車の目的たる所の粉を製造することを忘れて、徒らに無用の冷かなる戯論を弄しても、何等の得る所もなかつた。今世の宗教に對する議論は皆此愚をなすものである。若し人生の眞面目を知らむと欲せば、苦

痛、快樂、仰望等吾人の意識する事實を外にして、之を求むることは出来ぬ」と論じてある。流石はトルストイである。是實に宗教の眞髓に向て、直到したる實驗の叫である。

此の如く論ずれば、トルストイの思想は頗る斬新の如く考へらるゝも、佛教の眞意義は實に此に存して居る。トルストイよりも猶一層適切なる佛陀の教訓が箭喻經である。曰く、佛弟子に尊者摩羅鳩摩羅なるものありて、獨り靜處に在りて下のごとき念を生じた。抑、世尊は邪見を棄てよ、邪見を除けと云はるゝが、併積極的に此の如しと教へられぬ。全體、世間は常であるか、無常であるか、又世間は邊があるか、邊がなきか、又生命は即ち身體であるか、又身體と異なるか、隨て、人死せば命は終るものなるか、命は終無きものなるか等の事を考へた。是實に上に擧げたる『二年有半』及び『天人論』等に提出されたる問題にして、世間は唯物質の集合に過ぎないか、實在があるか、又有限であるか、無限であるか、又人間は、單に生理的身體に過ぎないか、又靈魂とも云ふべきものが存在して居るか、隨て吾々が死したるときは、生命は繼續するか、絶無に歸するかと云ふ問題である。そこで、若し世尊が

世に實在がある、無限である、靈魂があると云ふならば、我は清淨の行を爲すべし。若し世尊が積極的に世間は常なりと論ぜられないときは、論が立たない。隨て修行すべき根據がないと考へ、佛の所に往きて明答を求めた。其時世尊は之に對して言はるには、汝愚痴の人、此の如きことを論じつゝある間に、命の終ることを知らぬ愚かさよとて深く戒め、譬へは人ありて毒箭に當りたるが如くである。彼の親屬が之を慈愍して、安穩ならしめむために、毒箭を除く人を求むるに、彼人の念ふには、箭を除く前に、先づ我を射たる人の姓名、容貌、人性、方角を知らなければならぬ。又之を除く前に、其弓は如何なる木を以て作れるか、如何なる筋を用ゐたるか、矢は如何なる竹か、木か、其羽は如何なる鳥の羽歟、其鏃の金は何處の之を作りたる人は如何なるかを知らなければならぬと主張する様なものである。かくの如くなしつゝある間に、當りたる筋の爲めに命終るであらふ。今汝が世間は有限か、無限か、靈魂はあるかなきかを論じつゝある間に、命が終るべし。看よ、世間實に生あり、老あり、病あり、死あり、憂感啼哭して樂まざるあり、是眼前の事實ではないか。而して此の如きは、大苦陰の原因を窮めて、之を滅すために、清淨の道を行ふこと

が眞實の解脱の道であると教へ玉ひた。實に佛教の根本は此處に存して居ると云はねばならぬ。

此に至りて「吾人は何ぞや」と云へる問題は明瞭に解決された。即ち吾人の靈魂は存在するや否やと云へる如き冷かなる理論によるのではない。唯吾人は生老病死愛悲苦惱の實境に居るものなることを自覺することである。是が宗教に入るの門戸である。而して其根本的の模範が釋尊に於て示された次第である。

釋尊は人生に於ける宗教の眞髓を自覺されたる淵源である。世人は常に聞き慣れて居る爲めに、却て其生ける光輝を感じぬものがある。釋尊がカヒラヴスツの城門を出て、老人の憔悴せるを見、病人の苦惱せるを見、死人の墓なき有様を目撃し、深宮の間に俗的華麗を以つて包まれつゝあり、太子の胸を如何に刺戟したかは、吾人が想像も及ばぬ程であつた。太子が王宮を出てられたは決して計畫的ではない。半夜沈思止むべからざるものがあつたのである。實に三界は皆苦也とは實感の叫である。生死病死愛悲苦惱は現實的事實である。而して此三界の苦を如何にして滅すべきかとは、太子が實驗せむとする要點である。生老病死愛悲

苦惱は如何にして解脱すべきかとは、太子胸中の宿題となつたのである。所謂生死問題なるもの言を換ゆれば、人間の苦痛懊惱を解脱する、人生問題が、即ち釋尊の宗教の源である。

思ふに印度はウグダ時代已後、ウパニシヤツドの哲學的講究が起り、引續きて後世の所謂六派哲學なるものか、相競ふて起りたるものである。若し宇宙論や靈魂論ならば、如何なる説も皆備りて居つたのである。マクス、ミューラー氏が當時印度に在ては、歐洲の近世哲學の濫興が既に研究されてあつて、デカルト、ロツクも見出すべく、カント、ヘーゲルも徴すべしと言ふたは尤である。ニヤヤ派の如き、論理學を究明して、解剖的に研究するものあり、勝論派の如き、世界は極微細なる分子と其間に行はるゝ隠力の二元を以て成立すとし、數論派の如きは、自性と神我なる物心二元を以て説明せんとし、吠檀多派の如き純然たる汎神論あり、瑜珈派の如き、個人精神、宇宙精神の融合を説き、ジャイイミニ派の如き、ウグダの教權を主張するものもあつた。此の如き間に釋尊は生れたまひたものである。若し哲學的論議で安心が出来るものならば、釋尊は此等に満足を見出し得べき筈である。而し

て夫が毫も結果のないとは、太子が數論派のアラーラ、及びウドララーマ、ブトラに遇ひて道を求めて遂に満足を見出し得なかつたことと明瞭である。彼等は頻りに原理的に安心を説きたが、釋尊は我は病者の醫藥を求むるが如し、此の如き戲論を聞くを好まずと云ふて去られた。

太子六年の實驗は毫も哲學論議ではない。降魔成道は内的實驗の極所である。チャータカに詳かに悪魔の襲來がよく描かれてある。是所謂八萬四千の煩惱なるものである。暴風起り、驟雨來り、石飛び、劍降り、烈火天に漲り、黒灰空に滿ち、沙石、泥土、爛り燃え、最後に至りて四方より黒闇襲ひ來りて太子を包み去らむとした。是れ無明なるものである。然るに愈々太子に近くに及びて悉く消滅されて殆ど太陽の近きつゝあるが如く、佛は光明を放ちて照さぬ限なきに至つた。日西山に入るの頃太子は遂に年來の宿題たりし生老病死憂悲苦惱の根本は無明なる内心の闇黒に原因することを自覺された。即ち此無明あるが爲に誤れる行爲を起し、意識を生し、六官を生し、認識を生し、感覺を起し、執着を起し、乃至生老病死憂悲苦惱の人生を生し來るのであると解決された。即ち十二因縁の順觀である。故に

此無明を滅すれば遂に人生の苦痛を脱却し得る次第である。即ち十二因縁の逆觀である。而して此事は恰も降魔に於て實驗された境界であつたのである。此の如く初夜、中夜、後夜觀じ去り觀じ來りて五更明星輝くの時、内心一點の幻影を止めず、天真、廓朗、明月の清らかなるに至られたのが釋尊の成道である。覺者となられたのである。是が即ち佛陀である。

此に至りて佛陀は何ぞやと云へる問題は解決された。佛陀の存在は如何にして證明すべきか、杯と云ふ如き哲學的問題ではない。世の宗教を求むるものが、靈魂の存否に向て問を放つと同様に、又佛陀の存否に向て講究せんとするものが多い。蓋し基督教の如きは靈魂の實在と共に神の實在を根據とし、又印度婆羅門諸派の如きも我の存在を認むると共に、梵神の存在を認むるものである。されど佛教の佛陀は基督教、婆羅門教の神の如き、世界の主宰萬物の造化、宇宙の本體などと稱せらるべき性質のものでない。若し此の如きものならば、恰も靈魂實在論と同様に、たとひ存在すると證明された所て、單に冷かなる理窟に過ぎない。佛陀は此の如き原理的のものではない。今述べし如く、人生問題を解決し、終りて、絶對

光明の域に達せられたる妙境界である之を要するに吾人が生老病死憂悲苦惱の人生たることを自覺するのが宗教の出立點であつて其苦痛の根本たる無明を脱却したる覺體が佛陀である。

此に至りて猶一步進めて論ずべきは其佛陀の境界なるものは如何なるものであるかと云ふことである。一切の經文は此佛陀の境界を描き出したるものである。大乘經典は皆佛陀に關する信仰の結晶である。華嚴經の如きは其佛陀の力が宇宙に遍滿するの大なるより一微塵の芥子の中にも行き渡ることを説きたるもので實に佛陀の大悟海中の廣大なるを開顯せられたる者である。善財童子が切實に道を求め先づ文珠の智慧の導きによりて一たび信を生じたる已後百折不撓向上の一路を辿りて五十三の知識に遇ひ慘憺たる徑路を経て最後に普賢行願の力によりて佛道に入ることを得たことを説てある。法華經の如きは如何なる衆生と雖皆佛道に入らしめむとする佛陀の慈悲救済を説きたるものである。即ち柱朽ち梁斜に妖怪跳梁しつゝある大宅に忽然として火起り其中に群童が戯れつゝあるが人生の有様である。而して佛陀の大悲は大白牛車を以て

一切平等に救ひ出さむと勉めらるゝ次第である。涅槃經に於ては佛將に入滅せむとするに臨みて弟子に告げ玉ふには今色身は滅すと雖如來は常住にして變易あることなしと説き玉ひて一切の衆生には皆佛性あり若し人々大信心を以て此佛性を開顯せば皆如來と同體となるべしと説き玉ひたるものである。之を要するに何れの經文も此無限の佛陀を説きたるものである。而して華嚴の事事無碍の如き法華の諸法實相の如き涅槃經の佛性常住の如き其佛陀の境界を顯はしたるもので決して冷かなる哲理若くは宇宙論ではないのである。而して其佛陀の慈悲救済の願力を説き顯はしたるものが大無量壽經に開説せられたる阿彌陀佛である。此に至りて無限の光明と無限の生命を有せらるゝ吾人救済の覺體を認むることを得るのである。

下 罪惡を自覺せよ慈悲に融化せよ

吾人の何たるや佛陀の何たるやは既に之を知りたるが次に講ずべきは此の如き吾人が如何にして此の如き佛陀に接すべきかと云へる問題である。即ち信仰の中心問題である。

信仰は内心の偉大なる一大事實にして、殊に實驗したるものにあらざれば、之を知ることは困難である。今其大體の經過を略して述ぶるに、自己の罪惡を自覺すると同時に、佛陀の慈悲に融化することである。吾人が人生を自覺する時に著しく顯はれ来るものは、無常觀と罪惡觀である。殊に吾人が其力の小なるを感じ、煩惱の塊たることを自覺する罪惡觀がなければ、とても眞實の信仰を得られぬ。否、是が信仰を得るの條件ではない。寧ろ古來信仰の一方面として居るのである。此の如く自己の罪惡を感ずると共に、佛陀の哀々たる慈悲に接觸して、其清懷に攝取せられ、融化せらるゝに到らねばならぬ。此に至りて眞實の信仰が成立して、永久の救済を蒙るのである。

全體信仰の事たる、内心に於ける經驗の事實である。故に實際上に於て之を経験したる人の事實につきて叙述するが最も適切である。信仰家の告白若くは懺悔の如きものを味ふがよい。然るに其適例とも云ふべきものが少い。涅槃經梵行品に説きてある阿闍世か、佛陀の救済を蒙りた事實が如何にも剴切であると感じたから、其梗概を此に描きてみよう。

阿闍世王が、惡友提婆達多の教唆によりて、父王頻婆沙羅王を獄に投じ、其足を剛りて遂に死に到らした事實は、世人の善く知れる所である。然るに阿闍世王は其後、忽ち後悔を生じて、爲めに烈しき熱を生じ、瓔珞を脱し、伎樂にも出御せず、心悔熱を生ずるが爲めに遍體に瘡を生ずるに至りた。是れ精神の惱より身體の惱を引起した者である。然るに其瘡臭穢にして、近くべからざるに至りた。乃ち自ら念言すらく、我今此華報を受けた、地獄の果報も遠からずして到るならむと考へ、煩悶苦痛に堪へぬ。母韋提希夫人種々の藥を以て之に塗るも、瘡は漸々増すのみにして、少しも癒ゆることがない。即ち王母に白して曰く、是の如き病は、心より生ずるものにして、身體より來りたるものにあらず、決して人間の力で治療すること出來ぬものである。かくて日夜身心の大苦惱に沈んだ。そこで六人の臣が六人の師匠を紹介、推薦した。而して六師の説が何れも理論を以て慰藉を與へんと試みたが、何等の効力もなかつた。是「一年有半」を「天人論」か「靈魂論」を説くと同様であつて、前に記した六派哲學が宗教的安心を與ふることが出來ぬ實例である。現代行はるゝ信仰論の多くが此傾向を有して居る故、警告として一々擧げて見

よう。

大臣あり、月稱と曰ふ。往きて王の所に至り、白して言く。大王、何故ぞ愁悴して、顔容悦ばざる、身痛むとせむや、心痛むとせんや、王臣に答へて曰く。我今、身も心も豈痛まざるを得むや、我父、辜なきに横に逆害を加へた。我曾て智者の説くのを聞き、た世に五人ありて、地獄を脱れず、即ち是れ五逆罪なりと。我既に無量無邊の長時間の罪を得た、如何ぞ身心痛まざることを得べき、冥闇の之を治するものなしと、乃ち臣答へて曰く。大王、大に愁苦すること勿れと、諫め且つ偈を説きて曰く。若し常に愁苦せば、愁遂に増長す、人の眠を喜ぶが如し、眠れば、眠益々増し、姪を食り、酒を嗜むも、亦復是の如しと。此偈は他の五人の臣も皆同様に反覆したる言である。是世の苦悶者に向て屢々人の試むる諫言である。即ち愁ふれば益々愁を増すが、故に愁ふる勿れと云ふ文句である。勿論愁へずして止み得るものならば、誰も愁ふるものなければ、愁へずには居られぬ故に、愁ふるものである之を察せぬは、既に實感を缺きたる言である。且つ進みて曰く。世人が地獄を免かれずと言ふとも、誰か往きて之を見て來りて、王に語るや、今大醫あり、富闍那 (Purana Kasyapa) と

名く、一切智見に於て自在を得、清淨梵行を修して、無上涅槃の道を演ぶと、蓋し此人の説は一切萬物、其體空にして、一個の有も存するものなりと説く故に、曰く、世に黒業なるものなき故、黒業の報なく、白業なき故、白業の報なし、其他上業、下業等の區別あることなき故、又其報もあることなし、故に父王を弑したる罪は無しと云ふ。今是師王舍城中に在り、怨を屈して彼に往きて、王か身心を療治せしめよと、王曰く、審かに能く、此の如く我罪を滅除して、呉れるならば、歸依すべしと。されど煩悶は理論を以て解くことが出来なかつた。

復一臣あり、藏徳と云ふた。同じく王の愁を慰め、且つ曰く。抑々法に二種あり、一は出家の法、一は王法である。出家の法で云へば、蚊蟻を殺すも罪あるべし、されど王法に於ては、父を殺すとも罪あることなし、何んとなれば、王位を得るには、之を殺さなければ得られぬ故である。迦羅蟲が母の胎を破らなければ生るゝこと、出来なないも同様である。今大師あり、末伽梨拘舍離子 (Māskari-Gosāli) と名けた。此人は衆生一切の苦樂は原因ありて生ずと考ふるは、誤にして、皆自然であると考へて居る故に、曰く、人間の身體は地、水、火、風、苦、樂、壽、命の七種の常住なもので、毀つこ

とも出来ず、作ることも出来ず、之に利刀を投ずるも害すること出来ぬものである。故に罪がないと慰めたされど王の苦悶を解くに足らなんだ。

復次に臣あり、實得と名く曰く、世に非法を無法と名け、惡子あると無子と云ひ、鹽少きを無鹽と名くるが如きもので、前王罪無しと云ふと雖、猶餘業ありて招きたるものなれば、彼過去の餘業の爲に、其結果を得たるもの故、大王には何の罪もない。今大師あり、剛闇耶毗羅胝子 (Samgaysiradi) なる人ありて説きて曰く、一切の衆生は隨意に善惡の業を作るも罪あることなし、火の淨不淨となく、物を焼くが如く、地の淨穢となく、普く穢するが如く、乃至水風等の如く、秋になれば、樹が死となるも、春になれば再び生ずるが如く、人間が命終れば、又人間に生るゝまでのことである。故に苦樂の果報は、現在の業によらず、現在の業によりて自然に來るまでのことである。夫故に王には罪なしと慰めたされど王の苦悶を解くに足らなんだ。

復次に臣あり、悉知義と名く、彼は父を殺せる王の例を擧げて曰く、すべて因縁によりて生ずるにあらず、因縁によりて死するにあらず、因縁にあらずば善惡あ

ることなし、今大師あり、阿耨多翅舍欽婆羅 (Aśitaśeṣakambala) と名けた、一切平等を主張した。刀を以て右の脇を斫るも、左に梅檀の香を塗るも、二人の心同様にして差別なく、怨親の心がない。故に自ら人を殺し、他をして殺さしむるも、若くは一村一城一國の人を殺すも、刀を以て一切衆生を輪殺するも、若くは恒河已北の衆生を殺し、恒河已南の衆生に布施するも、罪福なるものは、少しもないと説いた。されど王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

復次に臣あり、吉徳と名けた。曰く、抑々地獄とは何であるか、是智者が文辭上に於て作りたるものに過ぎない。地獄とは如何なる意味か、地は地獄は破、即地獄を破るも罪なしとのことである。又地は人獄は天、其父を害して人天に到ると云ふことである。又地は命獄は長生を殺すが爲めに長壽を得ると云ふことである。麥を種ゆれば麥を得、稻を種ゆれば稻を得、地獄を殺せば地獄を得、人を殺せば又人となることを得べし。故に殺害を行ふとも罪あることなし。若し我があるものならば、我は常住にして變易なき故、破れず、壞れず、虚空の如きもので、殺せぬものである。若し我がないとすれば、無常にして念々に滅するものなれば、之を殺すこと

出来ぬものである。火の木を焼くに、火罪なく、斧樹を斫るに、斧罪なきが如くである。今大師あり、迦羅鳩駄迦旃陀 (Karakuda Katyayana) と名く。説て曰く、人を殺して心に慚愧の心を生せば、地獄に生じ、慚愧の心なければ、惡に墮せず。大地は水の爲めに濕るゝも、虚空は濕るゝことのない。一切衆生は自在天の作る所にして、恰も大工が家を造るも同様である。皆神の意志なれば、人には何の罪も福もないと説いた。されど王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

復次に臣あり、無所畏と名けた。曰く、壽命は風である。風氣は殺すべからず。如何にして罪あるべき。世に冥器あり、尼乾陀若子 (Nigantva-Gauti) と云ふ。世に施なく、善なく、父なく、母なし、修もなく、道もなし、八萬劫を経れば、自然に解脱すべしと説きた。然れども王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

最後に大醫あり、耆婆と名けた。王の所に往きて問ふて曰く、王安穩に眠るを得べきかと。王は大に罪を懺悔して曰く、我病は藥を以て治すべきものでない。我父法王法の如く、國を治め、實に罪がなかつた。我之を苦むること、魚を陸に處するが如くした。我將に地獄に墮せむとす。何ぞ安穩に眠ることを得べきと。實に阿闍世

は極端の罪惡觀に伴ふに、無常觀を以てした。此時耆婆の答は、全く他の六人の冷かなる慰とは趣を異にしてある。曰く、善き哉、善き哉、王罪を作れりと雖も、心に重悔を生じて、慚愧を懷けり。大王諸佛世尊常に此の言を説き、玉ふ。二の白法あり、能く衆生を救ふ。一は慚、二には愧である。慚は自ら罪を作らず、愧は人をして作らしめず。慚は内に自ら羞ぢ、愧は發露して人に向ふことである。慚は人に羞ぢ、愧は天に羞つ。是を慚愧と名く。無慚愧は名けて人と爲さず、名けて畜生と爲す。慚愧ある時は、父母師長を恭敬す。慚愧あるが故に、父母兄弟姉妹あることを説く。善き哉、大王具さに慚愧ありと、かくて先づ王の慚愧せるに對して、同情と慰藉とを與へて、進みて曰く、大王當さに知るべし。迦毗羅城の淨飯王の子、姓は瞿曇氏、字は悉達多、師なくして覺悟し、自然にして無上道を得玉ひた。大慈大悲にして、一切衆生を憐愍すること、犢の母を逐ふが如くである。王速かに其所に往きて、教を受くべしと、勸め親切に到らざることをなかつた。

此時空中聲ありて曰く、佛日將に大涅槃山に入らむとし、玉へり。阿鼻地獄の苦亦免るゝこと、能はざるへし。願くは速かに佛の所に往け、佛を除きては、能く救ふ

ものあることなし我汝を慰むが故に縋め導くなり王之を聞き終りて心に怖
 懼を懷き身を擧げて戰慄し五體掉動して芭蕉樹の如くであつた仰て答て曰く
 汝は是誰ぞや色像を現せずして但聲のみあるはと曰く吾は是汝の父頻婆沙羅
 なり汝今耆婆の所説に隨ふべし邪見六臣の言に隨ふことなかれと王之を聞き
 終りて悶絶して地に墜れた身の瘡は益々劇しく冷藥を以て之に塗るも毒熱し
 瘡蒸して少しも減ずることなかつた實に是れ身心大苦悶の極に達した
 此時佛は月愛三昧に入りて大光明を放ち玉ひ其光清涼にして王の身を照し
 玉ひたるに身の瘡癒へて鬱蒸消滅し身體清涼なるを覺へた乃ち驚て耆婆に問
 ふた耆婆答へて曰く佛此光を放ち先づ王の身を治め而して後心に及ふ譬へは
 一人にして七子あらむに父母は其中病に遇へるものを憐むが如しと實に骨身
 に徹する教である苟も大なる病を得て爲めに道に入りたる經驗のある人は其
 病の癒へたることを決して偶然と思ふべきではない
 阿闍世は地獄に墜ちんことを恐れて耆婆に頼みて象の上に同乗せむことを
 求め遂に佛の所に往きた其時の佛の慰藉と慈愛とは到れり盡せりであつた先

づ二十個條の法要を説きて佛教の要義を授け進みて人間は五蘊集合の結果な
 るゆゑに決して殺も眞の殺にあらず深く執着すべからざる旨を説き又罪にも
 輕重の別ありと云ひて口と意とを以てするも身を以てせざれば輕しと云ひて
 之を慰め遂には本諸佛が頻婆沙羅の供養を受けた故に其の功德て王になられ
 たものである王にならなかつたならば阿闍世王が殺す筈はない故に阿闍世王
 罪あらば諸佛亦實に罪あり諸佛は實に王の罪を救はざるべからずとまで慰め
 られた實に佛陀の慈愛は悪人と手を握り床を同じくして之を融和せしめらる
 る次第である猶進みて頻婆沙羅王及阿闍世王の本生を説きて相怨むこと偶然
 ならざることを述べ遂には貪狂藥狂呪狂本業狂の四種の狂人は其罪を記せざ
 ることを述べ徹頭徹尾大慰藉を與へられた
 阿闍世王遂に大安心を得感涙に咽ひて曰く薛蘭子より薛蘭子を生するを見
 る未だ薛蘭子より旃檀樹を生するを見ざりき今始て薛蘭子より旃檀樹を生す
 を見たりき薛蘭子とは我身是也旃檀樹とは即是我心無根の信也無根とは我初
 より如來を恭敬するを知らず法僧を信せず之を無根と名く我若し如來世尊に

遇○ひ○奉○ら○ず○は○無○量○阿○僧○祇○劫○に○於○て○大○地○獄○に○在○り○て○無○量○の○苦○を○受○け○む○今○佛○を○見○
 奉○る○を○以○て○衆○生○の○あ○ら○ゆ○る○一○切○煩○惱○惡○心○を○破○壞○す○と○遂○に○大○安○心○の○地○に○達○し○た○
 是○實○に○生○け○る○大○信○仰○の○告○白○て○あ○る○再○以○見○る○べ○か○ら○さ○る○信○仰○の○經○験○で○あ○る○親○
 鸞○聖○人○が○信○卷○に○自○ら○慚○愧○の○情○を○披○瀝○し○て○曰○く○が○な○し○き○か○な○恐○禿○鸞○愛○欲○の○廣○海○
 に○沈○沒○し○名○利○の○大○山○に○迷○惑○し○て○定○聚○の○か○ず○に○入○る○と○を○よ○る○こ○は○ず○眞○證○の○證○に○
 ち○か○つ○く○と○を○た○の○し○ま○す○は○づ○べ○し○い○た○む○べ○し○と○云○ひ○て○此○涅槃○經○の○文○句○を○引○用○
 し○て○暗○に○自○己○の○告○白○に○代○へ○ら○れ○た○る○を○見○れ○ば○聖○人○の○信○仰○が○如○何○に○罪○惡○自○覺○の○
 念○深○く○し○て○且○佛○陀○の○慈○愛○を○感○ず○る○點○に○於○て○高○か○つ○た○か○を○徵○す○べ○き○で○あ○る○蓋○し○
 信○仰○は○此○に○至○り○て○極○所○に○達○し○て○あ○る○乃○ち○聊○か○信○仰○論○を○作○る○

恩德廣大釋迦如來

韋提夫人に勸してぞ

光盛現國のそのなかに

安樂世界をえらばしむ。

* * * * *

額波沙羅王勸せむめ

宿因その期をまたずして

仙人殺害のむくひには

七重のむろにさとりられき。

* * * * *

阿闍世王は順怒して

我母是賊さしめしてぞ

无道に母を害せむさ

つるぎをぬきてむかひける。

* * * * *

大聖おのくもろともに

凡愚底下のつみひさを

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり。

（親 覺 聖 人）

親鸞聖人の信仰

求道學舎來集の諸兄姉妹足下!!

本日は日本宗教界の偉人親鸞聖人入滅の聖日なり。七百年の昔、聖人の胸中に宿り玉ひし佛陀は如何に慈愛の塊たりしよ、聖人の心中に味ひ賜ひし佛教は如何に醇の醇たるものたりしよ、其信仰の如何に單純にして其生活の如何に質朴たりしよ!!

聖人の一生は信仰の生活なり、佛心の實現なり。五千餘卷經典の眞髓を鐘めたるは佛陀救濟の御聲なり。三千年來開展せる佛教の骨目を收めたるは信仰の一點也。

聖人の信仰は一代佛教の燒點也。吾人聖人の生活を透し、勇猛として初めて佛陀の面影を拜することを得たり。偉大なる哉、聖人の信仰!!!

予は此聖日に際して聖人を追懐して悲喜の涙に堪へざるものあり。予は嗚々の言を列ぬるを止めて、寧ろ聖人が信仰の蘊奥を披瀝し玉へ

る嘆異鈔の一節を拜讀して、無限の法味に浴せむかな。

曰く、

各々十餘箇國ノサカヒロコエテ、身命ヲカヘリミズシテタツネキダ
ラシメタマフ御コ、ロザシ、ヒトヘニ往生極樂ノミチヲトヒキカン
ガタメナリ

洵に身命を顧みず、眞面目に道を求むる人は、安心問題を解決するより、他に目的のあるべき筈なき也との仰なり。

シカルニ念佛ヨリホカニ往生ノミチヲモ存知シ。又法文等ヲモシリ
タラントコ、ロニク、オボシメシテオハシマシテハンベラハオホ
キナルアヤマリナリ。モシシカラバ南都北嶺ニモユ、シキ學生クチ
オホク座セラレテサアラウナレバ、カノヒトノニモアホタテマツ
リテ往生ノ要ヨクノキカルベキナリ。

聖人は學者を以て自ら任し玉はず、學問の事なれば他に往きて聞くべしとなり。聖人の信仰は學問や理論にあらざる也。

親鸞ニヲキテハタゞ念佛シテ彌陀ニダスケラレマイラスベシト、ヨ
 キヒトノオホセヲカウフリテ信ズルホカニ別ノ仔細ナキナリ。念佛
 ハマコトニ淨土ニムマル、タネニテヤハンベルラン、マタ地獄ニオ
 ツル業ニテヤハンベルラン、總シテモテ存知セサルナリ。
 反獲熟讀シ玉ふべし、信ずる外に別の仔細なき也とは如何に簡潔なる
 信仰なるかな。如何に力強き確信なるかな。かく聖人の胸中に單純に響
 ける信仰の音は、如何て我等が心の絲に反響せざるべき。信仰は夫自身
 が目的なり、信せざるべからざるが故に信ずる也。地獄歟、將た極樂歟、其
 結果の如何を考ふるの餘地なき也。

タトヒ法然上人ニスカサレマイラセテ、念佛シテ地獄ニオチタリト
 モサラニ後悔スベカラスサフヲフ。ソノユヘハ自餘ノ行ヲハゲミテ、
 佛ニナルベカリケル身カ、念佛ヲマウシテ地獄ニオチサフヲハハコ
 ソ、スカサレタテマツリテトイフ。後悔モサフヲハメ、イツレノ行モオ
 ヨヒカタキ身ナレバトテモ地獄ハ一定スミカゾカシ、

世界廣しと雖も、未だ此の如き確固不拔の信仰を聴かざるなり、動きな
 きこと大盤石の如し、親鸞聖人の法然上人を信じ玉ふことの深き、一身
 の運命を全然其意思に委ねられたり、永劫の生命を其生殺與奪に任さ
 れたり。嗚呼、聖人の胸中一點の私なく、一毛の疑なし、實に是れ罪人斷頭
 臺に上りて生死を獄司の手に托し、亦慈母の懷に眠りて何事も知らざ
 る嬰兒の如し、何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし、
 實に是れ人生の奥底を叩きたる響なり。人生の苦痛を實感したるもの
 にして初めて其味を感ずべし。人生は洵に危ふき橋を涉り險しき岸を
 沿ふて走るが如し、瞋恚の炎は饑々として天を焦し、愛欲の海は青ずみ
 て其底を知らず、晏然として坐せるもの正しきか、苦悶して座に堪へざ
 るもの狂へるか、地獄は一定すみかぞかし、實に是れ人生の真意義を實
 感したる叫なり。此に至りて誰か佛の聲の聞へざるべき、誰か佛の光を
 仰がざるべき。嗚呼、信するより外に別の仔細なき也。

彌陀ノ本願マコトニオハシマサハ釋尊ノ説教虚言ナルベカラス、佛

説マコトニオハシマサバ、善導ノ御釋虛言シタマフベカラス。善導ノ御釋マコトナラバ、法然ノオホセシラゴトナランヤ。法然ノオホセマコトナラバ、親鸞カマウスムネマタモテムナシカルヘカラスサフラフ歟。

詮スルトコロ、愚身ガ信心ニヲキテハカクノゴトシ、コノウヘバ念佛ヲトリテ信シタテマツラントモ、マダステントモ面々ノ御ハカラヒナリト云々。

嗚呼是れ聖人の内心に響ける佛の御聲なり、聖人の心眼に映せる佛の御光なり、聖人が實際の披瀝也、聖人が信仰の告白也、首を回らせば年所悠悠七百歳、目を閉づれば聖人の温容洋々乎として吾人の左右に影向し玉へり、耳を澄ませば聖人の實語歷々として吾人の内心に響き渡れり。嗚呼聖人は吾人永久の光なる哉、吾人永劫の命なる哉!!

遙かに追懷欽慕の情を寄すこと此の如し、頓首。

明治三十五年十一月廿八日夜半燈下にて之を記す

同信の友なる 近角常觀

外 篇

一〇 宗教問題解決の要點

宗教なき國民

我國の社會に於て現時最も渾沌たるものは、實に宗教問題也、將來に於て猶最も望洋の嘆あるものは、宗教問題也、維新以後憲法を始めとして、法律制度、政治、經濟、軍制、教育、一に範を獨英佛にとりて、一往面目を整頓したりと雖、獨り宗教上に至りては、悠悠三十餘年、未だ何等の施設經營の見るべきものなく、他の諸種部門の發達と平行せざること遠し、故に足一たび泰西の地を踏みて、彼が宗教を重んずるを見、彼が宗教を經營するの備れるを見、而して翻つて之を我國の現狀に比較し來らば、實に斷腸の思に堪へざるものあり、吾人は今更宗教の必要を論ぜざるべし、唯吾人が朝野の諸士、教界の内外に向て切言せむと欲するものは、他なし、我國の應用したる制度文物なるものは、何れも宗教組織と密接の關係を有せざ

るはなく、又我國の模範とせる教育機關なるものは、宗教經營と平行して初めて其功力を顯はすものなり。故に宗教の組織經營整頓せざる以上は、我國の文明はたしかに其一半を荒涼に委するものと云はざるべからず。伯林大學教授ハルナツク氏總長たりし時、吾人に問ふて曰く、貴國より來りて本校に遊ぶもの、入學の際皆答ふるに無宗教を以てす、是れ果して何の理由によるかと。蓋し是れ細心味ふべきの言と聞ふべし。洵に宗教は母也、我國民果して母なきか、或は之を忘れたるか、吾人は他の備るを見て、初めて我か不足を感ずるの情頗る切也。たしかに我國民は父母を忘れ、山野に流浪せる長者、窮子の境遇にあるもの、須らく一日も早く宗教的自覺を生じて、慈母の膝下に復歸すべき也。

我國過去の宗教的經營

人屢言へるあり、吾國人は本來宗教に冷淡なりと、予以爲らく、宗教に冷淡なるは現今一時的の顯象のみ、過去の歴史を回想するに、我民族が宗教上に於ける信仰及經營の點に於て、其能力を發揮せしこと、他の政治、軍制等に於けると比較するに優るあるも劣ることなし。又從來吾國の宗教的人物に富めること、泰西宗教

界に同しくして時としては、より偉大にして其上に出づるものあり。聖德太子は敬虔なる信仰を抱き、佛教を經營興隆して國家經綸の根本義とし、政教相資の道を開きたるは、コンスタンチン大帝か羅馬帝國に向て、世界的基督教を以て國教となしたるに比すべく、而して其の信念、施設、一府眞摯にして誠實也、當時監眞等幾多の熱誠なる僧侶支那朝鮮より來りて傳道に熱中したるは、恰かも原始的基督教が小亞細亞を出て、希臘羅馬に福音を運びたるに似たり。南都の朝に於ては上下慈愛的精神發達し、内廷政令悉く宗教的信念の横溢せるをみる。特に聖武の朝全國に向て宗教的大經營を爲したるが如き、カール大王の偉蹟に似たり。且又光明皇后の身自ら佛陀の慈愛を事實的に發現せしを初めとして、當時慈善事業の實際的躬行は彼のセントアントニウス、及びセントフランシスクスを想起せしむるものあり。傳教弘法兩大師慨然海を渡りて、生氣ある佛教を傳へ、荆棘を啓きて叡山高野を開闢し、普く天下を周遊して濟民と傳道とを事とし、遂に平安朝佛教組織の根底を作りたるは、恰もセントアウグスティンが海を渡りてブリタニアに傳道し、現今の英國教會の基礎を作り、ポニフツチヌスがゲルマンの深林

に入りて福音を傳へたるが如し。鎌倉時代に至りては、實に日本宗教の精華也。榮西道元禪師あり、源信僧都あり、法然親鸞上人あり、聖覺法印あり。笠置に解脱梅尾に明恵あり、日蓮上人あり。教に殉ずるものあり、野に叫ぶものあり。其信念の圓熟せる、其自信の確立せる、社會に生命を與へ、國民に平和を持來たせり。詳かに之を歐洲の宗教改革時代の人物に比するに、毫も遜色を見ず。メラントンの知識ルイテルの信仰、エラスムスの學問、ツァングリの勇氣、カルヒンの實行、カールスタットの社會的傾向、悉く類似を吾鎌倉時代に見る。特に印度已來理想の點に於てのみ發達せし。佛教は鎌倉時代に於て大に實際的施設に偉大なる結果を來たし。宗派組織の根底を此時に殖へたり。爾後蓮如上人の如き大傳道家の出づるあり、石山戦争の如き宗教的戦争あり。已上の所説を以て過去に於ける我民族が、宗教信念に於て如何に敬虔なりしか、宗教的經營に於て如何に成功せしかを知るべし。惜哉徳川氏三百年の昇平は百般の社會をして眠に陥らしめ、其後半已後宗教的精神益々枯死し、其極に達したるの時に當りて、恰も維新の大變動を來たし、爾後物質文明の輸入に汲々として、日夜匆忙今日の狀態に至り、社會は腐敗し、道義

は地に墜ちたり。而して人稱して宗教に冷淡なる民族と云ひ、自ら無宗教の國民と稱す。豈慨すべきの至りならずや。然れども時は機運を促し來りて、今や正さに宗教的自覺を生ずべきの時期に達せり。信仰を求むるの叫は四方に響き、宗教を呼ぶの聲は社會に共鳴し來る。至誠摯實の士、心を潜めて宗教不振の病根を察し、徐ろに之が救済の策を講ぜざるべからざる也。

現時教界不振の病根

既に我民族に於て此の如き宗教的能力あり、而して現時宗教に冷淡なる此の如し。既に文明制度を運用するの頭腦あり、而して獨り宗教問題の解決に苦しむこと此の如し。蓋し是れ社會の根底に於て必ず宗教不振の原因潜伏するに由るなるべし。今や天下舉て偉人の出現を呼び、信仰の復活を望む。是洵に可也。然れども偉人無爲にして來り、信仰亦修養なくして來るものならむや。漫然として呼び、徒らに天を仰て望む、何の益か。之あらむ。請ふ審かに其病根を察せんかな。

維新以後百般の部門は、其組織を一變し、政治、實業、工藝、文學、醫師、軍人、何れも舊來の腐敗沈滞せる空氣を一掃し、社會全般より各部に適當なる能力を有せる健

全なる新分子を集め、其自由競争に一任し、其最優者のみを以て組織せらるゝに至れり。みよ、醫師に昔の如く家柄なく、軍人亦舊の如く血統によらず、其性質克く醫に適し、又軍人に適して之を以て職とせむと欲するもの、醫となり又軍人となる。獨り宗教界に至りては則ち然らず、眞宗の如きは家族的宗教組織なるを以て、幼よりして特に宗教的修養を興へ、其の實子をして其の寺を繼がしむるを以て、出來得べき限り親たるもの最も完全なる教育を授くるの便ありと雖、各人の性質必しも宗教的なりと斷言すべからざるものあり、之を以て各部門が夫々適當なる才能を有する健全分子を集むるものに比すれば、既に一步後れたるものあり、而して眞宗以外の宗派は如何、是生れて僧たるにあらず、必ず何等の原因ありて出家道に入りたるもの、原則としては、たしかに社會より宗教的性格を具へたる健全分子を集め得べき等なり。然るに事實は之に反し、却て今日幼にして僧となるもの、多くは社會的境遇より來るもの多し、親を失ひて孤兒依る所なく、寺に入るものあり、身體羸弱他の職に堪へずとして寺に入るものあり、家貧にして寺に入るものあり、吾人之を個人の境遇より觀察するときは、寧ろ其不幸に對し

て同情に堪へざるもの多し、然れども他の同情を受くる者、何れかの點に於て不完全なるものにして、若し忌憚なく、云はしめ、寧ろ社會不健全なる分子を驅り集めたる感なしとせむや、勿論孤兒の如き、貧兒の如き、宗教的教育其所を得たらむには、宗教に入るの因縁として寧ろ適當ならむか、蓋し是れ舊教か貧兒を以て僧となすを原則とする所以なり、然れども孤兒必しも宗教的性格を有すとは云ふべからず、況んや宗教的教育をも興へず、他の不幸なる兒童をして、徒らに經文を讀誦せしめ、儀式を執行せしめ、長するに及び之に委するに宗教家なる大任務を以てするをや、而して之に堪へざるを見て直ちに攻撃す、一而より觀察すれば、社會の宗教家を遇する冷酷と謂ふべし、勿論吾人は現時宗教家の腐敗を憤慨するものなり、然れども一步進みて、其社會的原因を察すれば、此の如くならざるべからざる原因ありて、此の如くなれるもの、極端に云はしめ、一種の社會問題と謂ふべし、即ち今日の教界組織の根本に於て、他の部内と平行すべからざる運命を有するものなり、是教界不振の根本的の病根なりとす。

社會上宗教修養の缺乏

翻て吾人は社會全般に於ける宗教觀念を檢せむかな。抑信仰は各自の生命にして活動の根原なり。人にして宗教なきは道德の根底なきなり。生活の目的なきなり。而して吾國人の宗教に對する態度頗る不真面目也。宗教を以つて閑事業とし、他の遊戯の如く考ふるに非れば、單に葬祭の儀式として一種の裝飾の如く見做すもの多し。彼の現世祈禱を主とする輩の如き、其毒害の甚しき云ふまでもなし。偶々多少宗教的修養を爲したりと云ふものも、道樂的に座禪に耽るにあらざれば、教理の斷片を聞き覺れたるに過ぎず。試みに彼等に向つて佛教の眞髓は如何、信仰の決着は如何等の問題を與へよ。果して明晰なる答辯を爲すもの幾人ある。唯漫然として演説を聞き、雜然として冊子を繕き以て自ら得たりとす。其要領を擧取し得ざる洵に其所也。現時日本社會に於て宗教として最も修養を重ね、其信念の強固なるは、上流人士、若くは讀書社會にあらざして、素朴敦厚なる田舎間の信徒にあり。吾人は彼等の間に於て佛陀の生命が、たしかに傳はりつゝあるを確信するものなり。

吾人は進んで、所謂無宗教を以て標榜して起つ社會に警告せむ。夫れ宗教は社

會の宗教にして宗教界の宗教にあらず。今日社會が冷然として宗教界を批評するが如きは、社會が未だ宗教的自覺を生ぜざるの證據なり。而して宗教家も亦宗教を以つて私事の如く考へ、宗教的運動を以て自己の利益運動と妄想するが如きは、度すべからざる極と謂つべし。蓋し宗教家なるものは、國民靈性の開拓を事とする神靈なる職務にして、天下の大なるも猶以て換ふるに忍びざるものなり。社會は之が腐敗を認めなば、腐敗せる分子を追放して健全なる分子を以て之を經營し、之か刷新を斷行すべき也。猶進んで論せむ。百般の部門世の所謂政治、實業等にして唯是等のみにして之と並行して宗教修養を缺きたらむには、其最終の目的を見る能はず。何れも皆無意義なる者と成り了らむのみ。政治家にして宗教心を缺かむか、權謀術數機を制し、虚を衝き、一勝一敗、掌中天下を弄して、快を一時にとるに過ぎざるのみ。實業家にして宗教を缺かむか、弱を伏し、他を欺き、機に投じ、險を冒し、一舉百萬の富を致して事終らむのみ。唯人生は權勢と利益の外、何等の目的を有せざる者たらむ。若し果して權勢利益の外、何等の目的なしとせば、權勢の爲めに節を折り、缺を呈し、利益の爲に詐偽を行ひ、他を陥弁するも何の辭す

る事かあらむ。是今日政治界の腐敗する所以、節操なき所以、迎合主義の行はる、所以にして、實業界の投機的なる、資縁的なる、日本國民の實業上の信用なき、忍耐力なき、着實ならざる所以也。皆是れ政治界、實業界中宗教的信仰の欠乏せる結果にして、維新の功臣、紳商が宗教を破壊し、道徳を無視したる結果の今日に報ひ來りたるもの也。看よ、彼の英國が印度に南亞に對して、全體としては頗る不道理極る非人道的なる政策にも拘らず、一旦採りたる方針を履行して、百折不撓遂に成功したる所以のもの、たしかに其民族が宗教的修養によりて、獲得したる堅實なる志操と忍耐力に由るものなり。吾人は其政策を惡むこと甚しと雖、其性質を敬慕する頗る切也。何んとせば、彼は我民族に最も飲亡せる堪忍不拔の血液を有すれば也。活潑遠觀の士は、須らく靜かに其來る所速き所を察すべし。畢竟今日社會に於て秩序ある宗教的修養の飲亡は、社會腐敗の原因也。

此の如く教界は健全なる分子を飲き、社會は宗教的修養を飲く。此二者は互に原因となり、結果となり。本來宗教的なる我民族の性質を麻痺せしめ、教界内外の空氣をして沈滞せしめ、社會をして化石枯死せしめむとするに至る。然らば歐洲

諸國の内外兩方面に於ける、宗教の經營及び修養果して如何。

歐洲の教會經營及び宗教教育

歐洲に於ける教會の經營は至れり盡せるものにして、舊教は今猶儼然として中世以來の教國主義をとり、羅馬パチカンより出づる政令は、佛、埃、匈、白を初めとして、山を越えて獨の一半を左右し、海を涉りて愛蘭を占め、特に新大陸米國に於ては、其教域の擴張嘖々として恐るべきものあり、新教に至りては、英國教會は全國を分て卅四の教監區とし、カンタベリーの大教監之を總轄し、加奈陀に、濠洲に印度に、其他各地殖民地に堪忍不拔なる、アングロサクソンの勢力と共に其大業を成就せり。獨の新教は獨逸建國と切實なる關係を有し、其質朴勤勉なる國民性を以て緻密なる經營をなせり。之を要するに、歐洲に於ける宗教的經營は他の部門の經營と相平行して進歩せり。故に宗教家なるものは他の政治家、實業家なるものと同じく、有爲の士健全なる分子を吸收し得べき組織にして、英に於てはケンブリッジ、オックスフォード、エデンバラ等の諸大學及ロンドン大學キングスコレッジを初めとして、必ず神學科の設けあり。之に加ふるに全國十五箇の神學

校ありて、國民中宗教的性質を有し、宗教を以て自己の本職となさむとするもの入りて以て學ぶべく、業成りて亦社會的の勢力を占むべし。カンタベリーの大僧正は、年金十五萬圓、上院に入りて皇族の次位を占め、ロッド、チェンシエラーを除きてはすべて國務大臣の上に位す。已下以て准知すべし。獨逸、奧國、及瑞西に於ける大學總數三十四校あり、其各大學一として神學科の設あらざるなし。單に新教科を授くるものあり、單に舊教科を授くるものあり、又或大學は此兩科を設くるあり、故に宗教が、他の政治、經濟、哲學、文學等と相平行して研究され、宗教家か其人物の點に於ても、智識の點に於ても、他の部門に後るゝなく、其勢力を増進する所以のもの決して故なきにあらざるなり。否、吾に他の部門と平行するのみならず、寧ろ神學科は諸科の第一位を占め、特に獨逸大學の或者は各科共通の神學科目の講義一週必ず三四時間ありて、全校の生徒をして隨意之を聽講せしむ。又英の大學コレツヂに長たるの人多くは僧侶にして、他の部門に入る人と雖、宗教を以て德育の根本となす。既に此の如く健全の分子を集め、猶其優勝者を以て教界を組織す。僧侶は地位高尚、國家は適宜の給俸を拂ふ。克く宗教家たるの品位を保ち

て其天職を全ふるもの決して怪しむに足らざるなり。

教會内部の組織此の如し、而して外部社會に於ける宗教的修養を檢せむかな。抑、歐洲現時の社會なるものは、中世宗教政治時代が宗教改革の變動の爲めに破壊せられ、以て現時列強の基礎を固めたるものにして、宗教は寧ろ建國に先ちて社會の地盤を作りたるものなり、故に風俗、習慣、儀式、制度、皆宗教に關係あらざるなく、誕生、元服、結婚、葬送、人事の始終一として宗教と深き關係を有せざるはなし。殊に兒童幼年の時、毎週教會に於て、數年間、大小兩種の教理問答抄を授け、基督教徒として其要義を心得しめ、終りて後初めて教會に於て元服式を擧げて、以て成人の資格を具へしむ。宗教として最も肝要なる幼年期に於て、此修養を成す、以て其功力を察すべし。是、教會直接の仕事なり、而して他の教育部門に於ける宗教的修養を察せよ。即ち歐洲諸國に於ては、初等教育、中等教育に於て、宗教は實に第一位を占むべき肝要の課目として、秩序的、教育を興ふるなり。先づ小學校に就て云へば、ブローイセンに於ては、一週に四時間、若くは五時間の宗教を授け、バイエルンに於て、多きは六時間に至り、宗教々育及聖書歴史を授く。オルデンベルヒに

は九時間を授くるに至る。其他獨逸、各聯邦、何れも宗教々育を授けざるはなく、級の上下に随ひ、一週間少くとも二時間多くは六時間授くるなり。其他高等學校、實業高等學校、商等實業學校、實業學校、高等女學校、女子高等學校等何れも二時間若くは三時間の宗教々育を授けざるはなし。而して學校教師か他の科目と同じく新舊兩教其所屬宗旨の教義より、教會史に至るまで其要領を授く。埃、太利、和蘭、何れも獨逸に同じ。佛、國は學校に於て宗教を授けざるも、時間を與へて各自其教會に就きて學ばしむ。伯、耳、義に於ては教會より僧侶來りて學校内にて授く。英國に於ては學校は二種に分れ、一は私設學校にして、英國教會に屬する學校、國教主義の貧民教育を奨勵する國民協會に屬する學校、ウエスレー學校、書教學校等なり。他は學校局所立の小學校なり。前者は既に教會所屬の學校なるが故に、各其教會の主義を以て宗教々育を授け、後者は單に聖書を授けて宗教々育をなせり。此の如く歐洲に於ける教育制度は、方法に於て多少の相違ありと雖、何れも宗教を以て德育の根本義とし、教育の精神となす。人耕さずして豈收穫あらむや。基督教か歐米に於て深く社會地盤の下に其根を張り、千古抜くべからざる勢力あるもの

洵に偶然にあらざる也。

解決の要點は實行に在り

上來論じ來りたる我國現時教界不振の病根と社會上修養の缺乏とを以て、彼の歐洲に於ける教會經營及宗教々育の整頓せるに比較せよ。勿論吾國宗教界には特別の長所あり、歐洲の宗教界も亦弊害多々あるべしと雖、大體實行の點に於て我の彼に後れたること甚だし。然らば如何にして此大問題を解決せむか、吾人の最も真面目に諸君と共に講ぜむとする所也。

我國人の彼の宗教界を一瞥するや、我と彼との相違は非常なるが爲めに反對なる二種の極端說に陥り易し。一は彼國に於ては、しかく完全に發達せりと雖、是古代より歴史的にかくなりたるが故に然のみ、決して現時我國に於ては企て及ぶ可からざるもの也として、全然之を放棄して顧みざるもの是也。一は我國か他の法律制度を適用したるが如く、直譯的に直に彼か條令の儘を用ひ、一氣呵成、法文を以て宗教界を律せんとするもの也。而して此兩者の見解何れも正鵠を得ず、前者は自暴自棄の極にして、後者は氣早なる皮相論者也。抑各國の宗教經營なる

ものは歴史あり、順序あり、其教理と密接の關係を有せるものあり、其の國民性と離る可からざる連絡あり、仔細に之を調査するに一として意味を有せざるものなし、故に之を以て我國の模範として、我國の教界經營に資せば其得る所實に大也、然れども其精神を攫取し、其要點を得る事を要す、吾人初めて彼教會の實狀をみて殆むと望洋の嘆ありき、一旦其緒を得るに及びて佛教者として又我國民として如何に實行すべきや、着々として其解決の道を得、自己の所信を認め得たり、みよ、所謂彼が歴史なるものは即實行の結果にあらずや、彼が教會なるもの亦是彼が經營の結果にあらずや、彼に歴史あれば我亦歴史あり、彼に教會あれば我亦之に應ずる宗派あり、彼が經營實行せることにして我豈爲し能はざるあらむや、而して宗教上の法律制度は事實に應ずる形式也、實行に伴ふ結果也、事實果がり實行伴は、法律制度忽ちにして成るべし、是實に問題解決の要點也、而して其事實や、其實行や、政治に實業に至大の關係を有するもの、故に此問題の解決たるや、獨り宗教家のみの仕事にあらず、政治家のみの仕事にあらず、國民全體は大局に着眼して完全なる宗教經營を期すへき也、從來政府者は全く宗教經營の考を有

せずして理想的に法文を畫せむとし、宗派は徒らに形式の速成を欲して、經營を怠る、又宗教家は自己の利益をのみ考へ、社會は冷然として對岸の火災視す、甚しきに至りては同一法文に律せらるべき佛教界の勢力を二分するが如き寧ろ恐の極也、何んとなれば其一に利なるものならば、他に對するも利にして、其一に對して不利なるものならば、他に對するも亦不利なれば也、須らく島國的根性を擲て、大局に着眼し局面を展開すべき也。

適切眞摯なる實行

然らば如何にして局面を展開し、如何にして實行に着手すべきか、曰く他なし、宗派の如何を問はず、教界の内外を論せず、すべて社會と宗教との間に空氣の疏通を謀り、宗教は社會上の感化を目的として眞摯なる實行をなし、社會は宗教的修養を重ねて、宗教の經營に力を致すべし、而して此氣運を促し來るには適切な施設なかるべからず、吾人は實行上に於て幾多の考案を有すと雖、徒らに空言を弄するを好まざるを以て、教界の方面に於て現時實行し得べきもの二件を擧げむ、即ち第一は各宗各派の内部の一大改良にして、第二は社會の宗教的修養也、

前者は宗教界を他の社會の如く健全なる分子を吸収し得べき組織とし、且此等の健全なる分子を教育すべき完全なる機關を整頓する事也。是れ教界不振の根本的病根を去除するものにして、此の事業にして成功したらむには、宗教問題解決の一半を終へたるものと謂ふべし。而して現時直接に着手し得べきことは、佛教各派の教育機關たる大學若くは中學校なるものを開放して、社會の健全にして而も宗教に適したる人物を吸収する事を勉むるにあり。此事小なるが如しと雖、多年空氣沈滞せる教界に向つて一條の血路を作りて新生面を開くを得べし。

後者即ち社會の宗教的教育に至りては、現時最も必要なる者なり。而して之を實行するや、先づ小學時代の兒童より肇めざるべからず。現時我國の教育界に向て、小學に於る直接の課目として宗教々育を施さんとするは或は困難の事情あるべし。然れども各日曜に於て、各寺院に於て、其村落若くは其の所屬信徒の兒童を集め適當なる宗教々育を施すことは頗る容易なる事業にして、宗教家が正さに勉むべきの好事業にあらずや。曩きに吾人が歐洲の實例に於て列記するところ

るのものは、我國佛教僧侶も亦其寺院に於て實行し得るの便あるにあらずや。夫れ心靈の開拓は人物の品性を涵養し徳器を成就するの根本也。若し兒童幼年の時期に於て修養宜しきを得ば、是社會を其根底に於て清淨ならしむる方法也。而して從來佛教者の教育方法頗る不秩序なるが故に勢力に比して結果頗る少し。今後は一定の教課書を作り、數年間に於て佛教の要義を授け得べき適當の計畫を設け、兒童をして反覆暗誦せしめ、頭腦に銘記せしむべし。且つ時として適當なる中央機關を作り、各地僧侶を集つめて教授を講習せしめ、又た特に出版物を作りて全國の連絡を通ぜしむ可き也。吾人は切に各地宗教家の眞面目に之れを實行せられむ事を望むもの也。進みて中學、已上高等學校及び大學に於ては、青年會の組織を以て宗教々育の目的を達せられむことを切望せざるを得ず。現時各地既に青年會の設けありて、漸次發達の傾向あるは大に喜ぶべき現象也。吾人は今後着々として其機關を整頓し、範圍を擴張し、大に信仰の猛火を呼び來りて、青年の氣風を刷新し、嚴格なる道徳を實行せられむこと吾人の切望に堪へざる所なり。

一 英國及び其宗教界

英皇戴冠式は全世界より派遣せられたる代表者環視の中に莊嚴なる儀式を以て舉行せられたり式場は是れウエストミンスター寺院英國帝王政治家詩人文人の眠れる該伽藍は、テームス河畔に聳立せる上下兩院の高塔と相待つて彼が尊大の氣風を發揚するなるべし。

巽きに女皇ヴィクトリヤ祝賀祭の時はセントポール寺院に嚴肅なる禮拜を行ひ、今又歴代の慣例に従ひ式をウエストミンスター寺院に擧ぐ吾人は英國民が志操堅實常に歴史を貴び慣例を重んじ其の行動毫も輕佻浮薄の嫌なく宗教に於ても國家に於ても頑として其地步を占むるを見て私かに其自信力を多とするなり抑彼英人なるものは頭腦冷靜詳かに利害得失を打算して徐ろに手を下すを常とす。一たび手を下すや意志頗る強健向て取らざるはなく望で達せざるなしたとひ百千の頓挫に遇ふと雖決して彼は避易せざるなり彼は理論に拙し然れども克く實行する者也彼は頗る迂濶なるが如し然れども結局遂行せず

ひは止まず彼の爲す所頗る不理屈千萬なることありされど事實に於て其結果を擧ぐ彼等の相戦ふや衝突血を流し火花を散ず而して大體に於て兩者綜合し來たりて圓滿なる結果を持來たせり彼の佛國民を見ずや彼時として熱情火の如く神託人を動かすが如きものあり奇材天授鬼神の出沒せるが如きものあり一見快は乃ち快なりと雖其結果常に散漫に失するの憾あり而して英の之に對するや常に秩序的の方法と忍耐不拔とを以てし遂に能く之に打勝つを見る佛にチアンゾアークあり而して之を燒きたるもの英兵にあらずや佛にナポレオンあり而して之を流したるもの英人にあらずや以て如何に英の佛に異るかを知らるべき也此英國民の性質は亦宗教界に於ても現れたり看よ彼は一方に於ては多數の新思想を生じ自由教會を起しつゝあると同時に國家全體としては國立教會を立て監督制を守り千古儼然としてアンゴロサクソンの運命と共に益々其の光彩を放ち今や其教會伽藍に即位式を舉行して大ブリテン及疆域中日没する事なしと誇稱する印度瀆州加奈陀を始めとして全世界に散在せる殖民地に君臨せられむとす吾人は茲に聊か彼が宗教界を論じて其特性を檢せむと欲

す、是れ制度組織の是非を論ずる爲めにあらず、國立教會にせよ、自由教會にせよ、如何に彼國民が實地經營の點に於て成功せしかを示さむと欲する也。

十六世紀宗教改革の當時、英國教會の獨立分離を促したる動機ほど滑稽なるはなく、不理屈なるはなし。ヘンリー八世は初めルイテルに反對して、羅馬教會を辯護し、法王より教會保護者の名を賜ふに至れり。然るに法王、ヘンリー八世の離婚事件に異議を挟むに及びて、忽ち羅馬教會より分離して、英國教會を獨立するに至れり。其原因は此の如き不理屈千萬なりと雖、實際上に於ては羅馬教會組織の儘を變更せず、單に法王の主權を否認し、之を國王の權に歸して、勢力を固むるに至れり。此に於てや、舊來の監督制を其儘踏襲し、全國統一の實を擧ぐるに於ては、却て獨逸の宗教改革に優るものあり。抑獨の宗教改革はルイテルの信仰と反對によりて、舞臺を開きたるものにして、諸侯は之か援助の地位に立ちたるもの之を英王が單に政治的に分離せるに比すれば、宗教としては、たしかに眞面目なり。されど事實に於ては如何、ルイテルに對立してカルビン派起り、又新教全體に反抗して羅馬舊教の反對改革起り、遂に獨逸各州教派を異にするに至れり。其

餘勢今日に至り、獨逸帝國は新舊兩教、其勢力を折半して、國家全體として、頗る統一を缺き、最も困難の狀態に陥れり。英國教會は分離の原因は此の如く俗なるにも拘はらず、爾後の經營に頗る力を用ゐる教會としては、遠くセント、オーガスチンよりの使徒繼承を主張し、信條教制を定め、確然として容易に變更を許さず、特に國家は國民全體中の健全なる宗教的分子をして、其要衝に當らしむる故に、宗教界は優に他の部門に後るゝなく、着々効果を收めつゝあること、恐くは歐洲第一に位するなるべし。是不理屈千萬なるも事實に於て成功すと謂ふ所以也。

分裂の形式此の如く俗なりと雖、英國宗教界の内部信念の猛烈たりしを忘るゝ勿れ。宗教改革の先驅者として先づ叫を擧げたるもの實に英人ジョン、ウヰクリフとす。彼は十四世紀の中頃既に羅馬教會の末路と題する論文を草して、先づ第一反對の矢を放ちたり。彼は全英教會の大部をして彼に一致せしめ、パイブルを翻譯し、宗教改革を宣言し、神學教授として教會の罪惡を講し、羅馬廳より逮捕禁錮の命令を受けたり。然れ共彼はカンタベリー教監を初め、英國貴族の同情を受けたり。彼は遂にローランドと名くる敬虔篤信者の會を組織し、全英を周遊し

て説教傳道に熱中せり遂に縲紲の辱を受け死後四十年屍は發掘され異端者と
 して焚かれたり後年十五世の初ボヘミヤブライグ大學に於てウヰクリフの説
 大に感化を及ぼしヨハンフスをして殉教の烟の中に叫ばしめて曰今や我が眼
 を燻ふるの黒烟は他日炎々として莊嚴なる教會を燒盡し去るべしと果然十六
 世の初めウヰツテンベルヒよ響ける叫は全歐の山川草木を震撼したりき以
 て英に於て如何に早く宗教改革の新生命か勃興しつゝあるかを知るべし

ヘンリー八世去りてエリザベス女皇來る歐洲宗教改革の歴史は實に血を以
 て飾られたり然れとも新舊兩教の衝突は英蘭のエリザベス蘇格蘭のメリーの
 二女性を驅りて空前絶後の慘憺たる悲劇を演ぜしめたりき是より先き蘇蘭の
 宗教改革者デヨンノツクス大陸に遊びカルボン派を學び故國に歸りて革新の
 事に従ふ舊教漸く滅びて長老教會の組織勢を得るに至る而して英蘭に在りて
 はエリザベス勝に乗じてゼシニイットを禁じユীগノーを迎へ三十九條を確
 定して監督教組織の基礎を固くし他教派を遇する頗る酷也遂に十七世紀の中
 頃英人武骨漢の標本たるオリバークロンウエルは劔を揮ふて下院の門に臨め

り此に英蘭王國の歴史は忽然として一條の溝渠を穿たれたり然れとも此溝渠
 たるや最も清濁なる流水を以て洗はれたりクロンウエル壯年の頃過激なる神
 經病に罹り憂鬱暗澹天上冀望の星辰は其影を隠し人生茫茫たる深坑は長へに
 蒼穹悠遠の光明を蔽へりカイライル贊して曰憂愁は貴尊の倒影也失望の深さ
 は冀望の高さを量るに足る宇宙に充つる地獄の黒烟は真心の力を以て天上に
 溢るゝ炎と光輝とに變化し得べしと果然クロンウエルは此時より森嚴なるカ
 ルビン主義の信仰を抱きて回天の事功を奏せり然れども彼は英國政教界に於
 ける一瓶の激藥一服の防腐劑たりし也電雷耳を劈くの聲は清涼なるオゾン
 を残して英國教會の青山を洗ひ去れり

十八世紀の初ウイルヤムローの眞面目なる招喚と云へる小冊子は英の信仰
 界を蘇生せしめたりサミュエルジョンソン曰く予が此書に接する迄は予は宗
 教に對して放縱なる談客に過ぎざり予の牛津に來りし時此書を以て普通の
 無趣味の本なるべしと思ひつゝ一讀始て宗教の熱心を抱きたりと遂に此本は
 ウィエズレット兄弟及其同志を驅りてメンチスト運動に奔らしめたり是れ外界に

於ける經濟工業の發達は、宗教に向て社會的救済の必要を促し來りたるものにして、傳道に、教育に、慈善に、蔚然として社會事業は其の枝を張るに至れり。而して此等の主義は遂にメソヂスト教會を作りしも、又英國教會の氣風を刷新するに大に與りて力あり。遂にオーウエジに至りて其極端に達し、労働問題を講じて、商業聯合を生ずるに至れり。

十九世紀に至りて二個の思潮は歐洲の天地に漲れり。一は前世紀に於ける自然科學に對する思想の反動として、儀式を重んじ、音樂を愛し、すべて教會を舊教化するものにして、英國教會内にて高教會運動 (High church movement) と稱するもの也。ニユーマンの如き遂に斷然として舊教の門に入りてカーチナル職となるに至れり。數年來ハリハックス伯を中心とせる儀式保存の運動の如き、亦是著しきものにして、僅かに香を焼く可きや否やの問題の爲め、年々國會議場に於て火花を散らして大討論あり。又他の思潮は現實的に社會の實際に向ふ者、英國教會内に於て廣教會運動 (Broad church movement) と稱するもの也。而して、モリス、トエンビー、ホールの如きは其極に達するもの也。蓋し十九世紀は社會民主主義

勃興の時代なり。而て其思想や、佛に、益々勢力を得て、國家を排し、教會を排し、其勢猖獗也。獨り英に於ては危險なる思想未だ他の如く行はれざる所以の者、慥かに是教會内外に於ける社會事業施設の完全せる反影たらずんば、あらず。吾人は温厚なるデョーリッヅ、ツヰルヤムの容貌に接して、初めて世界到る處に青年會の成立する所以を知り、刺戟力を有するセネラル、ブリスの辯舌をきいて、救世軍の擴張せる偶然ならざるを知る。而して此等幾多の運動は教會の内外に通じて、社會的改良の結果を奏すること洵に大なりと謂ふべし。

此の如く論し來れば、英國國民は何れの主義にまれ、頗る眞摯なる態度を以て問題を解釋し、大となく、小となく、全幅の精神を捧て之に着手する。所謂獅子兔を搏つに全力を用ゐるの概あり。宗教界の如き最著しく其特徴のあらはるゝを見る。而て國民全體として頗る沈着の性質を有し、一歩々々地盤を踏みしめて足を運ぶ趣あり。故に時代相當に幾多の運動ありと雖、僅かに其缺點を補ふに止りて、決して輕卒に根本的に基礎を顛覆して、其組織を變更するとなし、佛の如き時としては一時激越の情に乗して大破壊を行ひ、朝三暮四方針動搖甚しきとあり。獨逸

の如き理論に走り、空想を抱き徒らに整頓を期し、屢々改革を布きて、却て實際に親しからざるの弊あり、獨り英に至りては弊あれば乃ち改め、害あれば乃ち去る。恰も障子の破るゝや、忽ち之を補綴し、全體に於て大きに張り換ゆるの必要なが如し、英の宗教界亦此の如し、是常に實着なる改良を経つ、猶其組織に於ては宗教改革當時の國立教會制度を堅持する所以也、予倫敦に在るの日、毎日曜諸種の自由教會を訪ふ、各其特徴ありて、信者皆眞面目に之を行ふ洵に奇觀也、而して此等の自由教會が自由に游泳しつゝあるに拘はらず、英國教會の大海は毫も深淺を變せず、是れ英國教會が千古其態度を改めず、其地歩を占むる所以也、今や英皇戴冠式のウエストミンスター寺院に舉行せらるゝに際し、感最も深し、我國最親同盟國として幾多の人士其典に列せらる、冀くは其見るべきの所を見、翻て我國として、は我が歴史に則り、我が特徴を發揮し、我堅持すべきの要點を察し、我國將來の宗教經營に資せられむこと切望に堪へざる也。

一二 宗教形式の變遷

宗教は人生に對する一大救済の事實也、而して其精髓や永久不變にして、其結果千古渝らずと雖、之か人生上に現はるゝ形式に至りては、社會の趨勢と人心の推移とに従て、幾多の變遷なくんばあるべからず、何んとなれば、宗教は是れ正さに人生に對する救済にして、其人生なるものは、少くとも其形式に於て幾多の變遷あればなり、人生の形式既に變遷す之に應ずる宗教の形式變遷なくして可ならむや、宗教形式の變遷、吾人は寧ろ其必然の現象なることを信ずるものなり。

吾人は之を動物學者に聞く、軟體動物は其居住せる貝殻の形式如何によりて、其の動物の性質を知ることを得べしと、而して宗教亦然り、宗教の形式が如何に時勢と推移して變遷せるかを知らむと欲せば、宗教の住居たる寺院會堂の建築を一見して、先づ性質を認知し得べき也、吾人之れを西教の實例に徴して、明知する事を得べし、中古已後、伽藍の建築を目標するに、ゴシック式の高塔は盛々として林立し、彩色玻璃の窓を並じ來たる着色せる光線は、人をして幽玄の境に遊ぶ

の想あらしめ、高崇なる穹窿に融る香烟は哀婉なる音楽と調和して、恍惚として神明に交るの感あらしむ。伽藍は實に禮拜を主とする建築にして、而して聽講室としては最も不適當なるものならずむば、尙宗教改革已後に至りて、宗教の事一に内心の確信によりて、一身を支配する人生の要件として、外界の感觸によりて情操の満足を買ふを主とせざるに至れり。此に於て儀式禮拜の事廢れて、説教訓は寧ろ公共禮拜の要點となり、教會は却て聽講室となるに至れり。かくして改革教會は單純なる集會場を以て伽藍に代ふるに至る。是豈宗教狀態の變遷を暗示するものにあらずや。今世紀の初に至り組制的教會 Institutional churchなる者起り來たりて、教會建築の新式を促し、過去數世紀間の集會場より一步を進めたること恰も嘗て集會堂が伽藍より一步を進めたるが如し。是抑々教會なるものが其役目を異にし、從て其方法を一變したるものならずむば、此組制的教會なるものは勿論聽講室を存せり、然れども單に是のみを以て全構造を獨占するものにあらず、社交的生活のために談話室あり、智力及殖産の訓練の爲めに讀書室、教授室、職工室あり、殊に著しきは體育保養の爲めに體操、游泳、沐浴、投球

等の設備を有するに至れり。是實に社會的意味を宗教の上に加へ來りたる結果ならずむば、あらざる也。此の如く儀式禮拜、説教訓、社會改善、三者其目的を異にするに從ひ、宗教の形式を異にするに至れり。然らば何が故にかく目的を異にするか、是即ち宗教が救濟せんとする人生其物が既に變化を來せばなり。而して吾人は時世の變遷に伴ひて、宗教の形式に改良を施すべき必要を感ずるもの也。故に吾人は宗教が此の如く變化を來したる社會的原因を論じて、亦我佛教が將來採るべき方針に資する處あらむとす。

十六世紀宗教改革の起りたるや、羅馬教會の腐敗に他きたる人心に向て、生ける信仰か光明を發揮し來りたるが、大原因たること言ふ迄もなし。されど其形式の改革に至りては、大に社會的原因の存するを見る。中世封建制度は瓦解して漸次新しき社會團體を生じ、遂に中央に集權して、歐洲現時列強の國家的勢力の基礎を形作りし時代にして、既に大勢として各國獨立の宗教組織を欲するの時世たりし也。加るに古文學の復興は教會の内外に向て新らしき光を送りて、宗教の教理及び組織に於て幾多の疑義と濫用とを發見し來るに於てをや。ルーテルの

信仰はたしかに燎原の一點火たりしに相違なし。然れども既に獨逸各地の諸侯は既に業に各勢力を集中して、羅馬權威の下にあらざりし也。カルピンはたしかにゲンフの宗教政治を實現せり。瑞西の天地は既に自由の思想を孕みて自治の精神を發揮せり。宗教改革時代の社會的原因は既に人の知る所、特に吾人が詳説を要せざるべし。

進みて十七世紀の初めに當りて、獨逸及び英國に於て相類似せる二箇の運動起りて、宗教界の氣風を一新せり。乃ち獨の敬虔主義 *Piety* と英のメソヂスト運動 *Methodist movement* 是なり。前者はスパーネル及びフランクは其運動の中心にして、從來の如く單に理論一邊を以て神學を論じ、乾燥無味に陥るの弊を脱して社會上に幾多の施設をなし、ハルレにフロンケン、ハッスなる組織を作り、孤兒院あり、小學あり、中學あり、女學校あり、傳道學校あり。百般の慈善事業を經營し、信仰を事實的に顯現せり。而して其の極チンツェンドルフ伯に至りては、信仰を中心として社會的に而かも共働的なる兄弟協團を生ずるに至れり。兩者は獨逸に於ける宗教の社會的生面を開きたる起源にして、前者のフロンケン、ハッスは、現今

益々其範圍を擴張して、教育上有數の機關となり、後者は現時外國傳道の基礎となりて益々其効果を奏せり。而して英のメソヂスト運動は亦同しく規則的に嚴格に道德品行を正しくし、教育に慈善に總て社會改良の點に於て一生面を開けり。是より英米の宗教的社會運動亦盛也。

此の如く十七八世紀の交社會的傾向を生し來りたるもの決して偶然にあらざる也。常時は正さに農業經濟は一變して殖産工業の經濟と一變し、諸種の器械は發明せられ、勞働の方法に於て著しき變化を來たし、都府の人口一時に増殖して社會の面目頗に一變せり。殊に一般の人心貨殖の一方に向ひて、一國家の利益は必ず他の國家の不利益なりとの如き經濟思想を生し、相競て貿易に殖民に其競争益激しく、社會は舊時の靜安を許さざるに至れり。此に於て、此等の人生、此等の社會に向つて救濟の實を擧げむとするや、宗教は、勢事實的社會的ならざる可からざる固より其所也。而して十九世紀に至りて此の如き殖産工業及び勞働組織上に於ける問題は益々其極に達し、火花を散らすに至れり。此に於てや、宗教界亦面目を一變し、諸種の社會救濟方法の講ぜらるゝ所以也。是組制的教會、*Organized*

functional church 宗派上の組織的社會改良運動 Organized denominational effort for social betterment 等の大に盛なる所以也。

之を要するに宗教が今や正さに社會的救濟の使命を擔ふて二十世紀の征途に上る是實に大勢也我國維新已後の社會的變遷頗る激變にして彼歐洲に於ける宗教改革已後の機運一時に漲り來りたるの概あり北海の寒國一たび春風雪融くるの候に至らば梅櫻桃李一時に花開きて前後の區別なしと我國の社會亦之に酷似するものあり我宗教家たるもの世界の趨勢に鑑み經營施設する所なかるべけむや最後に一言す可ものあり曰く他なし此等諸種の社會的改善の運動なるもの信仰の根源より流出るに非ずむは決して力強き動機たる能はざる也殊に佛教の社會上に對する理想は平和と同化とを第一義とするもの若し實行施設をして之に伴はしめは彼の西洋各國に於て基督教者が死守して防ぐ能はざる社會主義に向て根本的に解決を與へ得べきものたしかに二十世紀に於ける世界的宗教たるの資格を有するもの也之に生命を與へ之を社會的に施設し經營し實行して世界の舞臺に推擧する實に我國の任務也。

一三 佛教の見地に立ちて社會問題を

解釋す

歐洲近時學界の思潮は社會的見解を以て總ての問題を調理するの傾向あり其甚しきに至りては宗教道德哲學等古來幾多人文の歴史なるものは畢竟表面にあらはれたる覆面衣裳に過ぎずして若し其の内部に入りて之を検すれば實際的生活の經濟史に外ならず從て古來幾多の宗教なるものは固と是れ一種の社會的運動にして宗教の開宗者は畢竟社會經濟上の缺陷に對する救濟者に外ならずといふ蓋し是れ極端過激の説にして宗教を解するに社會の經濟的一面のみを以てするもの吾國現時の状態を以て此説を聞くときは或は奇異の感を爲すものあらむ然れども吾人は此説自身よりも寧ろ此の如き説を生じたる現時歐洲の社會と及び其社會が宗教に向て要求する所のものを研究する必要をみるものなり宗教者の或者は理想を貴ぶの極遂に現實界を忘れ内心のみを顧みて外界の事實を蔑視するに至り遂に社會問題の如きは宗教の關知せざる所

となすに至る。是れ他が社會一方に偏するだけ、亦内心一面のみを以て宗教を解せむとする者、其人生救済の眞意を解せざるに至りては一也。

吾人は歐洲現時の社會を見るに、一方に殖産工業の發達と共に、他の一方には社會に於て財産上、勞働上、幾多の不平均を生じ、隨て道德に、風俗に、教育に其弊害甚しきものあり、爲に現時の社會を以て満足すへからざるものとなし、社會の改造を主張するに至る。十八世紀に於ては第三級即ち一般平民が其權利を伸張して、國民輿論の中心となり、勢力の樞機となりしが、第十九世紀に至りて、從來の第三級は今や中流社會として却て其數を減じ、其下に勞働者なる第四級を生ずるに至る。而して其第四級に利益を與へ、生活上に資するを以て目的とし、今や正さに社會問題は頭を擡げて、廿世紀の舞臺に於て其解釋を促し來りつゝあり。而して未だ一定の解決を生ぜず、或は社會民主主義を主張して國家及び教會に反對するものあり、國家社會主義を主張して民主主義に反對せんとするものあり、又宗教を主位とする社會主義あり、新敎主義のものは保守的にして寧ろ國家社會主義に近く、舊敎主義の者は敎國主義を以て國家と相容れずと雖、亦痛く民

主主義を擯斥せり、此の如く幾多の解釋ありと雖、何れも一掬の水を以て大火を救はむとするが如く、前途頗る困難にして、富者が富を吸收すること愈々甚しく、從て第四級を以て満足せしむること益々遠し。吾人歐洲に於ける社會問題の將來を考ふるに、未だ容易に其運命を卜する能はざる也。

基督教を解する者は曰く、耶穌は畢竟社會救済者に外ならず、當時下層の社會の困難を自由ならしめ、經濟的の危急を救ひ、權位の壓制に反抗して、人間の平等を主張し、一種の空想的計畫を作り、地上の困難を慰藉して、天國の光榮を樂ましめし者に外ならずと、若し此の説の如くならしめば、一種のユートピアにして現實的に何等の救済をも施すと能はざりし也、然れども當時の社會事情を考ふるに、たしかに當時權位にある者は下層貧賤に向て何等の憐愍の情を有せず、壓制暴戾の下に怨嗟の聲を發しつゝありしは事實也、而して此時機に際して彼が爲したる福音中に於ける、少くとも宗教的饑渴なる言辭は、經濟的の貧窮と關係し、信仰的生命なる言辭は、日常生活の意義と連絡したること明らか也、之を要するに、社會問題を解釋するの形式は、貧者として、富者と戦ひ、賤しき者として位ある

ものとなつて、都ての方面に向て戦争の方法を以て平和の天地を開かむとするは、基督教本來の主義にして、歐洲古來の政教的關係より近世社會問題の解決に至るまで一として此形式によらざるなし。此一點に於て吾人大に疑なき能はず。戦は果して克く平和を持來すべき資格あるか、争は遂に克く他をして和融なる世界を作らしむる性質あるか、吾人は歐洲社會問題の解決方法が常に戦ふことを以て唯一の手段とすを見て其結局を怪しむもの也。十八世紀に於て第三級團が第一第二級團に對する運動の結末が、佛國革命の血を以て歴史上に描かれたる事實を見て、其將來の行路を豫想し、人類平和の爲めに頗る寒心に堪へざるものあり。

佛教を解する者は曰く、佛陀は畢竟社會救濟者に外ならず、印度古來階級制度頗る嚴格にして、所謂カストなるものは痼疾となりて社會を化石せしめ、活動を枯死せしむるの間に立ち、釋尊自ら王族に出で、自ら其の位を捨て、其富を捨て、成道の後、四姓平等を唱へて社會の病根を除き、理想的團體を形成せり。と、此説亦社會の一方面のみを見たるの説にして、宗教としての本領を看破せずと雖、たしか

に此社會的方面は他の宗教的本領と連關なくむはならず、釋尊の出家は固と宗教思想の發芽たる精神的煩悶より出でたるものにして、四姓平等の如き直ちに一般の社會に向て強制的に施さむとする社會的計畫にあらずして、既に精神的感化を受けたる已上に於て、同一の佛子として、四姓の區別を没し、互に實行せむとするもの即ち精神的團體の成規に外ならず、然れども自ら王族に生れて、永久之を捨て、顧みず、又社會に向て直接四姓平等を主張せずと雖、苟も精神的感化を世界に敷くを目的とせば、其感化の及ぶ所社會上に結果を來すこと言ふ迄もなし。之を要するに、其社會問題を解釋するの形式は、富者は富を捨て、貧者と手を握り、位あるものは位を顧みずして、賤しきものと起臥を共にし、社會間に築かれたるカストの城壁を開らき、相互の感情を融和せしめ、有無相通して、貪惜する處なく、圓滿平和の世界を來たさむとするもの、是佛教本來の主義にして、日本古來の政教的關係を初として、國民道德の形式に至るまで一種の和氣飄々たる着色を帯ふる所以のもの、皆此に職由せずむばあらざる也。吾人は信ず、今後二十世紀の舞臺に立ちて、眞個に社會問題を解釋し、圓滿平和の世界を現出せむと欲せば、

此解決たるや古今唯一の方法たる可き也。人を咀ふものは亦人に咀はれ、劍を以て向ふものは亦劍を以て報るらる。吾人は戰が以て平和を持來す所以を知らざる也。

佛教の理想此の如く高尚にして適切也。要は唯此理想を活用して、果して克く之を實際施設の上に實現すると否とにあり。東洋古來理想の點に於て確かに西洋に對して一日の長あり、然れども實際上の點に於て常に後に墮若たるを見る。佛教者が從來其教理を運用し、信仰の圓熟せる決して西教の下に出づるものならず。然れども、之を社會に應用するの點に至りては頗る幼稚なるを見る。蓋し是れ日本に於ける社會事情か未だ西洋の如く複雑ならざるによると雖、一は理想界のみに重きを措きて現實界を顧みざるの結果也。苟も生ける信仰を抱き、苦める同胞を眼前に控ゆるもの、冥想一番其理想を此世界に實現し來れ、社會改善の策着々として現はれ來らむ。

佛教に淨土なる思想あり、或は樂國と云ひ佛土といふ、是れ實に社會として最も完全なるもの最も圓滿なるもの最も平和なるもの最も無碍自在なるものに

あらずや。而して是實在にして永久の事實也。吾人佛陀を信するもの共に住し、共に生ずる國土也。是人生救済の最終にして社會活動の極致也。是れ佛陀の慈悲心によりて計畫せられ佛陀の修行によりて實現せられ佛陀の念力によりて成就せらる。吾人佛陀を信するもの安心感謝の餘、此現世界に於て此淨土の面影を實現し來る可し、是止めむと欲して止むべからざる者、實に佛教者が社會問題解釋の要點也。若し此信仰を動機として着々實際施設の道に就かば如何なる社會改良かならざらむ。政治家は須らく淨土の面影を實現するが爲めに清淨の政治を爲すべし。實業家は淨土の面影を實現するが爲めに清淨の實業を爲すべし。此に於て人生々活の上に於て眞に宗教的意味を有するのみならず、遂に完全なる社會を現出すべし。若し此精神を以て勞働者教育、病氣保險、家族保護等百般の問題を解釋せば、必ず刀を迎へて割くるの感あらむ。

一四 社會の根底的改造

我○國○現○時○の○社○會○ほ○ど○不○真○而○目○なる○時○代○は○な○か○る○べ○し○政○治○界○に○お○れ○實○業○界○に○
 あ○れ○將○た○宗○教○界○に○お○れ○腐○敗○に○腐○敗○を○重○ね○姑○息○に○姑○息○を○加○へ○表○面○一○見○嚴○然○た○る○
 形○式○を○備○ふ○る○が○如○し○と○雖○内○心○毫○も○操○持○す○る○所○な○く○其○行○動○云○爲○一○も○真○摯○の○氣○風○
 の○微○す○べ○き○者○な○し○唯○外○界○境○遇○の○變○遷○に○從○ふ○て○飄○々○乎○と○し○て○身○を○世○上○風○波○の○間○
 に○處○す○る○の○徒○の○み○極○言○す○れ○ば○我○國○社○會○腐○敗○の○原○理○は○其○社○會○を○形○成○す○る○の○各○分○
 子○が○根○底○的○に○腐○敗○せ○る○に○お○り○各○社○會○の○精○神○委○靡○枯○死○せ○る○に○お○り○結○果○を○追○ふ○て○
 主○義○を○顧○み○ざ○る○に○お○り○殊○に○道○德○上○に○於○て○嚴○格○な○る○實○行○を○爲○し○て○人○を○し○て○秋○霜○
 烈○日○の○威○あ○ら○し○む○る○如○き○は○遂○に○毫○も○見○る○可○か○ら○ざ○ら○む○と○す○人○は○我○國○將○來○に○於○
 け○る○經○濟○的○破○産○を○憂○ふ○而○し○て○吾○人○は○精○神○的○破○産○の○怒○濤○既○に○國○民○の○頭○上○に○澎○湃○
 た○る○を○見○て○轉○蹇○心○に○堪○へ○ざ○る○も○の○あ○り○

言ふ勿かれ、吾人を以て奇矯の言を弄して世を罵るものなりと、又言ふ勿れ、嚴肅の思想を以て世上を悲觀するもの也と、須らく襟を正しくして各社會の現状

を密察せよ、政治家は何が爲めに政治を爲す、其位を得るが爲めか、其權を得るが爲めか、苟も其堅持する主義を實行し、其目的濟世利民にありとせば手段として、位を得權を攫取せんとする固より其所也、然れども、其位を得んとする手段に於て、其權を攫取する順序に於て、既に業に自ら其主義を傷け、其所信に反背せる行爲に出づるもの、滔々として皆是也、此の如くして權位を得て主義を行はむといふ、矛盾も亦甚しき哉、皆是權位其物を目的とするもの、却て其主義を犠牲にすることなしと云ふ可からず、此の如き政治家を以て組織せられたる政治界は、果して眞面目なる政治界と云ふ可きか、眞摯なる行動、毅然たる操行を望み得べきか、吾人は其表面の整々堂々たるにも似ず、其精神の腐敗墮落せる今日の如き激しきを知らざる也。

宗教界の事、吾人深く之を言ふに忍びざる也、宗教の眞髓は信仰也、之を形式に實現するもの、儼然たる宗派たり、寺院たり、教會たり、而して行爲の上にあらざる、や嚴格なる道徳となり、社會の救濟となり、人格の修養となり、品性の陶冶となる、若し極端に言はしめば、現時我國の宗教界は眞面目の意味に於いて、何れの所

に其の面影を認め得べきか。天下驚々として宗教を憂へ、道德を唱ふ、之を憂へ、之を唱ふるの人、既に自から其眞面目を攫取せず、今日の宗教界は盲人の相導いて、斷橋の下に墮るが如し、宗教界の混亂蓋し今日の如き甚しきは無し、吾人は確かに將來に於て希望の光明赫々たる者あるを信ずるもの也、吾人は信念の地下に、磅礴たる者あるを感ずるもの也、然れども未だ東方の微白を示さざる也、萬人閭中に彷徨して其適歸する所を知らざる也、苦しむべし、憂ふべし、天に叫ぶべし、地に泣く可し、最も神聖なるべき宗教が最も腐敗し、最も光明あるべき教界が暗澹たること、恐くは今日の如く激げしきを知らざる也、又此の如き政治若くば此の如き宗教を評する、世の所謂教育家、學者なるものを見るに、毫も感服すべきの點を發見せず、彼等は他を評することを知る、自ら行ふことを知らざる也、彼等は他を論ずることを知る、自ら信ずることを知らざる也、而して其本領たる教育及び學問の事にありて、其主義の確立せざる、其位置の爲めに汲々たる、其所信の堅實ならざる、道德を嚴守せざる、社會に感化なき、何ぞ他の政治界、宗教界と撰ぶ所かある、之を要するに我國現時の社會は政治となく、宗教となく、教育となく、學問と

なく、眞面目の氣風蕩然として地を拂ふて空し、我國現時の忠實に此に在り、

然らば如何にして此社會を改造すべきか、曰く他なし、之を其根底より改造すること也、根底より改造すと云ふは決して一時の運動によりて消極的に破壊するの謂にあらず、徹頭徹尾健全なる積極的方針を以て社會の各分子を根底より改造すること也、單に形式の變更にあらずして實質を改造すること也。

近世醫學學理上に一新紀元を開きたる、獨逸解剖學者の泰斗ウヰルホー博士は細胞説を創唱し、身體は畢竟個々の細胞の組織より成るものにして、從來身體各部の病と稱したる所のものは、決して各部の病にあらずして、之を組成する細胞自身の病たることを明らかにせり、氏か此の發明は醫學界上一大光明を放ちたり、而して吾に醫學界のみに貢献せしにあらずして、直ちに氏は自ら之を政治上の原理に應用し、細胞を以て各個人とし、身體を以て國家とし、諸機關の組織を以て社會各部の組織と比較し、氏は自ら政界に於て一方の雄將として、醫學界に於ける如く昨年退隱に至るまでは、又政界の明星たりき、今若し氏が思想を應用し、來りて我國現時の社會に於ける病根たるものを察するに、政治、宗教、教育、學

者所謂各部の病なる者は、實に各部を組織する所の各個の細胞自身が病めるなり。腐敗せるなり、パチルスを寓せるなり、若し夫れ細胞分裂を以て其各部機關繁殖とせむか、益々其腐敗を傳染し、其パチルスを遺傳し、遂に底止する所なからむとす。既に腐蝕其極に達する細胞は亦如何ともすべからず、是特に健全なる新細胞を以て根底より改造せざるべからざる所以也。

從來世人の社會上の改善を策するもの、多くは形式の改良にして實質の改良にあらず、組織の改良にして分子の改良にあらざる也。是大に不可なり。猶彼の身體各部の病なるものは、細胞自身の病なることを悟らざるが如し、而して其腐敗せる細胞を用ひて屢々組織を變更し、形式を改むと雖、何等の功益なき洵に其所也。看よ、政界に於て屢々政黨の改造を謀り、内閣の交迭を行ふと雖、單に形式の變更に止りて、毫も其細胞實質の改造を見ず、宗教界亦同じく多年紛々擾々として、常に事絶ゆるなしと雖、畢竟形式組織を改良するのみにして、其實質たる各個細胞に至りては、毫も變化を見ず、腐敗せるものは如何にするも腐敗せるもの也。之を縦に列するも、之を横に並ぶるも、之を方形に組織するも、之を圓形に組織するも、

も細胞の改造せられざる限りは、眞面目の意味に於ける改善は覺束なし。是れ吾人が根底的の社會改造を主張する所以也。

然らば如何にして健全なる分子を作り、如何にして新細胞を繁殖し、第二の政界、第二の教界を組織すべき根底を形作る可きや、是實に根本的の實際問題也。予は斷言せむ、彼の榮ゆるものをして榮えしめよ、砂上に築かれたるの樓臺は遂に其久しきを保つ可からず、彼の腐敗するものをして腐敗せしめよ、腐敗極まりて始めて清明の天地は開かるべし。唯吾人が現時の急務とするもの、生命とするものは、新進精銳の青年が彼の腐敗を感染せず、彼の虛榮に誘惑せられず、堅實なる志操を有し、清淨なる社會を形作り、歩一歩其立脚地を定め、其地盤を固くせよ。大磐石上各個堅固なる煉瓦石を以て、着々積み立てられたる殿堂は、世上の風波を嘲り、惡魔の襲來を笑殺せむ、而して此の如き堅牢なる地盤立脚地とは、果して何ぞや、曰く、宗教の信仰是也。

彼佛陀を信するものは中心居然として佛陀の聖意に安住するもの、天下を奮ふて彼に向ふも、彼は泰然として其所信に殉すべし、彼佛陀を信するものは、滿

身○漸○然○と○し○て○佛○陀○の○至○誠○に○感○泣○す○る○も○の○天○下○の○富○を○以○て○彼○を○誘○ふ○も○彼○は○森○服○
 に○し○て○毫○も○犯○さ○る○い○な○か○る○べ○し○彼○佛○陀○を○信○ず○る○も○の○は○確○然○と○し○て○佛○陀○の○大○勇○
 猛○心○に○よ○り○て○激○勵○せ○ら○れ○た○る○も○の○大○火○三○千○世○界○に○満○つ○る○あ○る○彼○猛○然○と○し○て○進○
 む○べ○し○彼○佛○陀○を○信○ず○る○も○の○は○油○然○と○し○て○佛○陀○の○大○慈○悲○心○に○よ○り○て○鎔○融○せ○ら○れ○
 た○る○も○の○百○萬○の○怨○敵○毒○炎○を○吹○き○て○彼○に○向○ふ○も○彼○哀○々○悲○愍○の○涙○を○垂○れ○て○忽○ち○春○
 風○平○和○の○世○界○を○開○闢○す○べ○し○嗚○呼○信○仰○な○る○哉○信○仰○な○る○哉○信○仰○は○從○容○動○か○ざ○る○大○
 地○の○如○く○信○仰○は○群○生○を○濕○す○こ○と○大○水○の○如○く○信○仰○は○罪○惡○を○焼○く○こ○と○大○火○の○如○く○
 信○仰○は○意○志○を○猛○烈○な○ら○し○む○と○大○風○の○如○し○言○ふ○勿○れ○吾○人○を○以○て○徒○ら○に○理○想○的○
 の○空○言○を○爲○す○も○の○也○と○看○よ○古○來○の○開○宗○者○は○實○に○燎○原○の○一○點○火○に○し○て○遂○に○信○仰○
 を○以○て○社○會○の○根○本○的○改○造○を○實○現○せ○し○者○に○あ○ら○ず○や○吾○人○は○此○信○仰○の○靈○火○を○以○て○
 彼○の○腐○敗○せ○る○社○會○的○細○胞○に○滅○せ○る○パ○チ○ル○ス○を○焼○き○消○滅○せ○し○佛○陀○の○生○命○を○滅○せ○る○個○
 々○の○新○細○胞○を○以○て○社○會○を○根○底○的○に○改○造○せ○む○と○欲○す○る○者○也○

一五 阿片的佛教

西○人○の○東○洋○的○事○物○に○對○し○て○惡○辣○な○る○批○評○を○爲○す○者○時○々○阿○片○的○佛○教○な○る○造○語○
 を○用○ひ○る○こ○と○あ○り○是○固○よ○り○佛○教○の○真○義○を○知○ら○ざ○る○も○の○言○に○し○て○決○し○て○佛○教○
 其○物○の○真○價○を○上○下○す○る○は○足○ら○ず○と○確○確○か○に○東○洋○的○弊○害○を○指○摘○し○て○痛○罵○骨○に○徹○
 す○る○者○吾○人○信○仰○の○生○命○人○生○活○動○の○根○本○た○る○宗○教○に○冠○す○る○に○生○命○の○鴆○毒○人○心○の○
 麻○痺○劑○た○る○阿○片○的○な○る○形○容○詞○を○以○て○す○侮○辱○是○よ○り○甚○し○き○は○無○し○聽○く○者○以○て○賊○
 と○爲○す○に○足○る○須○ら○く○冷○靜○な○る○頭○腦○を○以○て○此○熱○罵○が○如○何○な○る○教○訓○を○吾○人○に○與○ふ○
 る○か○を○考○察○せ○よ○

古○來○理○想○的○考○察○は○東○洋○の○長○所○と○す○る○所○に○し○て○靜○坐○冥○想○心○を○天○外○に○馳○せ○精○神○
 偏○く○六○合○に○瀰○漫○し○て○宇○宙○と○洪○荒○を○同○ふ○す○る○が○如○き○妙○味○に○至○り○て○は○蓋○し○西○人○の○
 及○ふ○能○は○ざ○る○所○な○ら○む○然○れ○共○人○間○長○所○の○存○す○る○所○は○即○ち○短○所○の○伏○在○す○る○所○東○
 洋○人○が○理○想○的○に○長○せ○し○だ○け○却○て○現○實○的○に○頗○る○不○足○す○る○を○見○る○宗○教○の○如○き○道○徳○
 の○如○き○常○に○其○説○く○所○高○尙○圓○滿○な○る○に○も○拘○は○ら○ず○其○實○際○的○の○施○設○に○至○り○て○は○全○

然其趣を異にし、人にして其説く所全く空言戯論にあらざるやを感はしむるものなきにあらず。確かに其説の高きだけ却て其立脚地の堅實ならざる也。其言天に近きだけ足地上を遠かる甚だし。故に教理の高尙なるは偶々以て其實際と遠かるを證明する所以にして、現實界を離れたる理想論は人をして主觀的思考にのみ沈溺せしむるに至る。蓋し阿片的中毒を促し來るの一着歩先づ此點より胚し來らざるなし。

一たび理想と實際と相乖離するに至らむか遂に理想は一種の空想に終り實際とは何事にまれ單に實行すれば可也と云ふに終る可し。其極に達するや單に理想一邊の事を司るものを生じ、人稱して之を學者といひ、單に實際一邊の事を職とするものを生じ、人稱して之を實務家と稱す而して學者は徒らに空中に樓閣を築き、自家胸中の天地を妄想して以て自ら得たりとなし、實務家は其目的の如何を問はず、手段の是非を顧みず、其結果を以て事功を銜はむと欲す。此に於てや、理想一邊に偏するものは何等の活氣なく、何等の生命なく、遠く人生を離れ、人心の琴線に接觸する所なく、甚しきは消極無爲以て高尙なりと考へ、人世より退

嬰して益々理想に近接するものなりと考ふるに至る。實行の伴はざる理想は歌の坐して天下を想像するが如く、單に自家心上の虚影を畫きて一時の主觀的快樂を取るに過ぎざる也。而して之に反して他の理想の伴はざる實際に至りては、盲人の何等の方向をも考へずして漫りに急躁狂奔するが如く、或は滯壑に顛墜することもある可く、或は深谷に墮落することもあるべし。其甚しきに至りては徒らに私慾の爲めに馳驅せられ、虚榮の爲めに幻惑せられ、紛々擾々益々醜を極むるに至るべし。古來宗教の實際問題に於て屢々腐敗を極め、墮落の極端に達する所以のものは畢竟宗教の理想を忘れ、信仰の生命蟬脱し來りて、徒らに益々蠕動を事とする他の動物性活動と何の撰ふ所なきに至りし結果也。

吾人借々現時佛教界に於ける思潮を察するに極端なる二種の相反對せる傾向を生ぜり。其一は放縱散漫なる凡俗的風潮にして、其一は空想退嬰を事とする遁世的風潮是なり。前者は世上の嗜好に投し、凡俗の風儀に同化するを主とする者にして、其弊の極るや、俗界に墮落して腐敗汚穢俗の最も俗たるものにして、宗教の本領を失墜するのみならず、却つて宗教の名の下に敗徳汚行を極め、權力爭

奪を事とし、空名虚位を食り自家の利益を以て最後の目的とするに至る。後者は然らず、慥かに前者の如き宗教の墮落其極に達したるの時世にありては、一種の激藥として其功なきにあらずと雖、他の紛々たるを厭ひ、他の擾々たるを憂ひ、以て自ら清ふするを以て能事とし、目的とするものなり。他が凡俗的經營に汲々たるに反して、自ら理想的空論を喜び、他が争鬭を事とするに反して沈黙を以て唯一の徳義と考へ、自ら高尚なりと爲し、脱俗なりと假定して一時の表面的沈靜を假裝する者也。前者は凡俗卑猥にして其阿片的の甚しき固より言ふを待たすと雖、後者も亦確かに他の極端に趨りて徒らに有爲の精神を壓伏し活潑なる氣風を消磨せしめ、枯木死灰以て自ら得たりとなすに過ぎざるのみ、他の世上の紛々を救ひ擾々を沈め、腐敗せる社會を改善するの功果なきのみならず、僧人心を萎靡腐爛せしむるに至りては、是亦たしかに阿片的佛教の垢罵を免るゝ能はざるものゝ如し。

抑、佛教の信仰なるものは靈活無碍にして、人間罪惡の根底に向て救濟の功を示し、道義實行の動機として至大の勢力を有するもの也。佛陀の光明は吾人悶

々の心中を照して慈愛の涙を湛へしめ、佛陀の威神は吾人擾々の胸底の間に金剛の信念を貯へしむ。夫れ佛教の理想なるものは即ち此活力を獲得するに在り。何ぞ佛教の理想を抱くものにして冷々然として退嬰を事とし、消極主義に陥りて空理に走るの理あらむや。佛教由來積極的の勢力を有するもの也。然れども彼の煩惱を消滅し、罪惡を解脱する寂滅涅槃の思想は、凡人をして消極的空寂を以て最後の理想とするかの誤解を生ぜしむ。小乗佛教既に此誤解に陥れり、大乘佛教其積極的眞意を發揮して社會救濟の實を擧ぐ。然れども現時宗教の信仰蟬脱して其精神を委靡せしめ、其靈活の力を失ひ、徒らに教理の遺骸を抱きて空想に馳せ、理論を事として遊戯三昧に沈溺し、懈慢界に墮落し、社會は眞摯なる信念と嚴肅なる道德蕩然地を拂ふて空しからむとし。此の如くして大乘佛教は積極的也と云ふも、單に理論的に積極なるのみにして事實的に積極たるを得ざるなり。教理は大乗的極致に達せりと雖、實際上に於ける彼の灰身滅智を目的とせる小乗の徒と何の撰ぶ所かある。此に至りて阿片的佛教の暗たしかに其病根に適中するの快刀たるを感ずる者也。既に理想なるもの其活力を失し、靈性を喪ふ此の

如し、宜なる哉、實際界に向て何等の感化をも與へずして、腐敗墮落を極めしむる今日の如く甚だしきに至るや。

已上の言を以て單に現時の宗教界のみに適用すべきの論議となす勿れ。我國すべての社會は何れも皆阿片的也、麻痺的也、蝕毒的也、政治社會にみよ、實業界にみよ、何等の理想もなく、何等の信仰もなく、唯徒らに虛榮と空名を追ふて、事を好み喧囂を事とするのみ、社會の風教を司り、國家の教育に關係する學者、若くは教育家なるもの、所論を察するに、毫も靈活なる所信を抱くものなく、人心上に何等の感化をも與ふるとなし。而して其説く所、架空の言議を爲すのみにして、實際施設上に何等の効果をも與へざるもの、滔々として皆然り。此の如くにして我國現時の社會なるものは、各個人内心の道德的制裁全く弛緩し去り、政治的活動の大眼目なく、實業的道德毫も行はるゝなく、國家として若くは社會として其到着點を顧みるなく、恰も扁舟の飄々として海上に漂へるに似たり。其施設する所唯徒らに邊幅を修飾し、形式を美麗にして以て自ら得たりとするの輩のみ、果して將來吾人國民の運命を如何にせんとするか。吾人は多言せず、現時朝野政治家の

行動内外實業家の畫策、果して何の處にか健全なる施設と堅牢なる地盤の上に立つものがある。吾人は阿片的政治、阿片的實業、阿片的教育の弊滔々として極る所を知らざらむとす。

翻て印度にみよ、暹羅、緬甸にみよ、支那にみよ、朝鮮にみよ、何か故に此の如く、無氣力に何か故に此の如く、懦弱に何か故に此の如く、活氣なく昏々として眠り終らむとするが、印度今日と雖、ベタを暗んじ、幽幻なる哲學に通暢する學者多く、暹羅、緬甸、戒律を墨守して塵外に超然たる僧侶はあり、支那亦草澤の英雄粗策なる頭腦を以て憂國の涙を灑くもの多々あるべく、朝鮮亦麥莠を誦ふて隱君子をきめこむ者あらむ。而して其他の半面をみよ、幾多の生靈は或は塗炭の苦に陥り、無氣力懦弱の遊民となり、貪戾飽くなき猾商となり、不規則なる行政となり、亂暴なる政府となり、個人に權利の思想なく、社會に道德の制裁なし、阿片的社會の將來夫れ此の如し。我國頻りに形式的文物を輸入して、沐猴の冠を學ぶと雖、人心の根底より大改善を施し、積極的に靈活なる佛教の精神を興起せしむるにあらずむば、我國將來の運命岌々乎として夫れ危き哉。

昔者サボナローは伊國貴族か淫樂沈溺する間に起ち毅然として直言侃々
 神權政治を唱へて遂に殉教の炎に斃れクロムウエルは猛然孤劍を揮ふて英國
 奢侈の氣風を一洗し摯實質撲一に信仰の火を以て社會を改造せり翻て我國古
 來の聖人高僧を看よ傳教弘法の兩大師は南都上下淫樂の社會を破壊して森嚴
 清肅なる山佛法を開き法然親鸞の兩聖人は源平二家の阿修羅的血闘と榮枯盛
 衰とを歴々目撃し斷然山を下りて京洛市民の間に投じ平民的宗教を開闢し社
 會的宗風を實行し清新なる信仰の威力をて群靈を化し衆生を救ひ賜へり洵に
 是吾人永劫の生命人生活動の根源也今や我國政界教界正さに腐敗墮落の極に
 達せり古聖人の高風を追懷して感止む能はざるものあり實に我國民たるもの
 佛教の眞精神に立戻るべき時にあらずや一たび其信仰を生かし來り各人自ら
 懺悔して佛陀の求濟を仰ぎ社會の罪惡を根除せよ我國政界教界を清め社會を
 改造し東洋諸國の阿片的中毒を覺醒する決して難事にあらず也

一六 歐米各國に於ける宗教の特色

歐米各國に於ては、宗教と社會とは最も密接なる關係を有する者にして、例せば政治上にせよ、教育上にせよ、若くは社會問題、勞働問題等の凡ての社會上の事件に關係を有し影響を及ぼさざるはなし、而して此等に關する著書が必ず宗教に關する記事あるを見て、如何に、宗教と社會とは離るべからざる關係を有するかを知ることを得べし、その茲に至りし所以のものは、蓋し一朝一夕の事にあらず、國家の成立を始めとして、歴史的に關係を有するが爲なり、故に歐米各國の宗教を研究するには、此の歴史的の點に着眼するを要す、從て各國歴史を異にし、國民の氣風を異にし、殊に政治上の關係より宗教の上にも各々顯然たる特色の存するを見る、勿論宗教其者は世界的のものにして、信仰其者に至りては毫も國によりて其性質を異にせざるも、宗教界の經營即ち實際の事業に就ては著しく其特色のあらはるゝ所以也、今少しく之を略説せむ。

亞米利加

亞米利加の宗教は社會的と云へる點に於て著しく發達をなせり。全體亞米利加は商工業の國にして從て宗教が其社會に應ずべき状態を有するに至れり。宗教は人生の救濟なりと云ふ立場よりすれば其人生の狀態が時勢に從て變化すると共に宗教も亦其形式を變してあらはるゝは自然の勢也。

現時亞米利加に於ては社會事業に力を注ぐの宗派即メソヂスト、又はバプチスト等の新教の無慮數百の各派相競ふて發達をなし、各地に撒布せり。是等の宗派が當初殖民時代の時より深かき關係を有して各地に根據を築けり。例せばホストンは固とピュリタンの殖民したる所に於て、現今と雖自由思想盛にして、宗教上に就ても新思想の中心たり。ユニテリアンの如きも、此の地に根據を有せり。又費府の如きもクエーカーの根據を据ゑし處なるを以て、今も其勢力盛大也。バアチモニーは舊教の根據地にして、今もカレデナル、ギボンと云ふ人が此處に居を占めて、亞米利加全體の舊教を統一しつゝあり。此に注意すべきことは、亞米利加が全體新教の盛なる地なるにも拘らず、漸々舊教が勢力範圍を擴大し來

ること、是也。十九世紀に於ける舊教が教線を布きたることは、慙くべきものと云ふべし。此のバアチモニーは新教の中に於ても嚴格なる實行を主とせる。メソヂストが最も勢力を占め居る也。其他各地々々諸種の教會存せざるはなし。而して亞米利加全體を通して、宗教の氣風如何と云ふに信仰と云ふより寧ろ社會と云ふ點が主たるか。如し、輓近紐育ホストン、ペンフェロ等各地の教會に於てインヂチ、エシヨナル、チャーチ、即ち粗制的教會が盛大となり、從來の如く教會を以て單に日曜日、に於ける禮拜の場所と定めずして、其周圍には青年の寄宿舎、勞働者の集會所、其他諸種の俱樂部を以て満たされ、日曜日に限らず、週日にも屢々教會に於て集會をなし、社會の改良及び窮民の保護をなし、又日曜日に教會に集會するに就ても、眞面目なる信仰と云ふよりも、社會的に此場所に依て一種高尚なる樂を得ると云ふ傾向也。從て教會内部に於ける音樂、若くは讚美歌の歌手などは餘程精進して、人の嗜好に適せしめむとするもの、如し、此の點よりして或は教會を以て一の遊戯場と云へるが如き非難なきにしもあらざれども、こは社會と云ふ事を主として見做したる結果に外ならざる也。

又亞米利加に於ては、單に教會の名義に於て爲し居る事業の外に、諸種の社會事業、慈善事業の著しく發達を見る。殊に亞米利加に於て最も効果の顯れたるは青年會なりとす。今其大勢を示す爲めに昨年の統計の一部を擧ぐれば、米國全體に於ける寄附金が二千四百萬圓に上れり。而して昨年は諸種の會社に於ける製造業に従事して居る人々を入會せしめたるが、其の數四百萬人の加入者ありたり。又鐵道作業者が五萬人以上にして、學生は四萬人餘りなりし。又別に子供の部分が一五萬人、其他陸軍に海軍に土人の間にも種々の便利を與へ、殊に昨年は海軍の青年の爲めに集會所を設けたり。此等青年會の中心が亞米利加の各市到る處これあらざるはなし。紐育の本部及び市俄古の中央本部は宏壯なる建築にして宗教的社會的體育的の各部が何れも種々の施設を企たてざるはなし。又下層の社會に向ては例の救世軍は盛に活動し居れり。其他監獄の改良にせよ、惡少年の感化にせよ、墮落せる婦人を救濟することにせよ、各自それ／＼に計畫せられつつありて、少しも遺憾なしと云ふべきなり。唯々亞米利加の社會事業の長所と短所とを擧ぐれば、規模の大なるは長所にして、其遺り方の突飛なるは彼の短所なり。

り○と○云○ふ○べ○し○。全○體○米○國○は○製○造○等○に○於○て○機○械○の○變○更○を○な○す○に○は○隨○分○突○飛○な○る○改○良○を○行○ふ○と○い○ふ○事○な○る○が○社○會○事○業○に○於○て○亦○此○弊○あ○る○を○免○れ○ず○例○せ○ば○惡○さ○も○を○感○化○す○る○代○り○に○稍○も○す○れ○ば○之○を○優○遇○す○る○傾○あ○る○か○如○し○。要○す○る○に○亞○米○利○加○の○宗○教○の○特○色○は○一○言○以○て○之○を○掩○へ○ば○社○會○的○の○語○は○蓋○し○其○肯○綮○を○得○た○る○も○の○なら○ひ○か○。

英吉利

英○國○の○宗○教○界○に○就○て○其○特○徵○を○見○る○に○恰○も○英○國○の○國○民○が○保○守○的○な○る○か○如○く○宗○教○界○も○亦○頗○る○保○守○的○な○り○。英○國○の○國○民○が○頗○る○眞○面○目○な○る○か○如○く○宗○教○界○の○事○も○亦○實○に○頑○固○に○し○て○眞○面○目○也○。第一○宗○教○制○度○は○國○教○制○也○。即○ち○歴○史○的○に○之○を○云○へ○ば○ヘ○ン○リ○イ○八○世○の○時○羅○馬○法○王○と○衝○突○し○て○英○國○全○體○の○教○區○を○率○ゐ○て○國○家○を○以○て○經○營○す○る○所○の○教○會○即○ち○國○立○教○會○を○打○ち○立○て○たり○。而○し○て○其○組○織○は○監○督○教○會○に○し○て○全○國○を○三○十○六○七○の○教○區○に○分○つ○て○各○教○監○が○之○を○統○轄○し○、又○之○を○ば○ヨ○ー○ク○及○ビ○カン○タ○ベ○リ○の○二○大○教○區○に○區○別○し○、更○に○之○を○カン○タ○ベ○リ○の○大○教○監○總○括○す○る○所○と○な○り○。此○組○織○は○昔○よ○り○今○に○至○る○ま○て○少○し○も○變○更○せ○ざる○也○。而○し○て○其○英○國○教○會○内○部○を○窺○

ふにハイ、チャーチ、ロー、チャーチの二大潮流の行はるゝあり、殊にハイ、チャーチの
 通り方を見るに、香を焼き禮拜を行ひ、頗る頑固に儀式を守り、殆ど舊教と何の選
 ぶ所なし。此香を焼く問題に就ては、英國教會の三十九ヶ條の憲章に照らすに甚
 た不當なりとして、カンタベリーの大僧正は是を差止めたるに、異論囂々として
 屢々貴族院の問題に上りしとありき。以て如何に其保守的にして、宗教上の問題
 に就ては一舉一動苟もせざるを知るべし。又神學杯の研究を見るに頑固と評
 するの外なし。英國教會の教師はオックスフォード、ケンブリッジ兩大學及び各地
 の神學校よりも出るが、主として倫敦大學のキングスコレツチの出身者多し。其
 仕方を見るに、随分古い通り方にして、古くあるだけ夫だけ信仰の點に於ては堅
 實なりと云ふべし。

西洋に於て日曜日を嚴格に守るとは、恐くは英國の如きはなかるべし。其會堂
 内に於て眞面目に祈禱を捧げつゝあるは、是英國教會の特徴として見るべき也。
 而て最も奇なる現象は、一方には斯の如く國立教會が盛大なると同時に、これに
 反抗して起りたる自由教會も亦頗る盛なる事也。米國は格別として歐洲大陸に

於て自由教會の勢力ある、且つ生氣に富むことは、恐く英國の上を越すものはな
 からむ。社會事業と雖、倫敦より盛なる地はなし。十九世紀に於ける社會事業の發
 達に於て種々ありと雖、皆悉く其源を英國に發せざるはなし。今日米國に於て盛
 大を見るに至りし青年會は、其初め倫敦に於てジョージ、ウイリヤムと云ふ人の
 創めたるものにして、現にストランドのエキセターホールは其本部なり。斯の如く
 青年會は英國の本國にありては勿論、殖民地に至るまで非常に擴張せられたる
 也。大ブリテン丈にても中央本部の數は凡そ千五百にして、殖民地にては中央部
 凡そ三百を下らず。今世界中に於ける青年會の成績を擧ぐれば、本部の數が七千
 五百七にして、會員の數六十二萬〇六百二十一人に上る。會堂の數七百三十七に
 して、其價額六千四百萬圓以上なりと云ふ。斯く發達したるも、其源は倫敦にして
 獨り青年會なるのみならず、救世軍も倫敦に於て發したる也。監獄の改良も亦其
 端を英國に發せざるはなし。右の如く社會事業に力を入れたる結果として、英國
 には歐洲大陸の如く社會民主黨なるものは起らざる也。また實際起るの必要な
 き也。現に成化事業の効を發したる結果として、監獄の囚人は漸次其數を減し、惡

少年杯も漸く減少するに至りぬ要するに英國の宗教界は信仰を基礎として實際的の事業の上に著しく効を奏したるものと云ふべし其大體の潮流は至極保守主義なりと斷言するの適當なるを覺ゆ。

佛蘭西

佛國の宗教は舊教也全體佛國人民の氣風は頗る感情的にして狂熱に奔る國民也加之舊教の力強き且つ熱心なる訓練を経たる結果として其信仰の狀態も頗る過激にして時としては死だも尙顧みざるの色あり而して佛蘭西を視察するに於て極端なる兩面あるとを注意せざるべからず一應巴里の市街を表面的に視察すれば世人の云ふが如く浮華なる物質的娛樂を以て満されつゝある一の世界的遊戯場に過ぎざる也確に言ふに忍びざる墮落の行はるゝとは事實也併し乍ら巴里市民自身は頗る儉約にして且質素其身を守り金錢を浪費せずして他國の金員を吸収するに勉めつゝある也尙又他の部分を深察するに一方に腐敗ある丈他の方面には上に云へる如き驚くべき熱心を以て信仰を鍛へつゝあるを知るべし之が現象の見るべきは舊教の教監組織の間を横に縦にして

羅馬法王の所轄たる僧侶及び尼の結社即ち修道院に於て見るとを得べしセシニットを始めとしてフランチェスコ・ネル・ドミニカン・カピタン等巴里市街丈にても僧侶の方が凡そ三十種尼の方は百種も成立し居る也此會に入るものは心は清貧に安じ身を清淨に行ひ其上長に對しては從順を以て主義とする也會には秘密の規約あり例せば教育事業を主義とし居るものは佛蘭西國內を初めとして世界各市に中學小學の舊教的教育を授け又傳道を主義とし居るものは内地は勿論外國に至るまで傳道者を派遣し又傳道者を養成し常に其說教を印刷して各地に配布し又慈善事業を主とし居るものは著しく其點に專任し居らざるはなし現にサン・パンサンと云へる慈善事業を主として居る會合は社會的利益を興へ又セシニットの如きは目的の爲に手段を顧みずと云ふ主義を以て過激に政治的運動をなすものあり佛國の宗教は洵に危險なる程全心を打ち注ぐものと云ふべし因みに清國に於ける所謂教亂と稱するものは即ち此佛國の舊教侵入して極端なる主義を實行したる結果に外ならず將來東邦問題を研究せんとする人は深く注意を要す現に佛蘭西に於ては國家と教會との關係が一間

題として提起せられ、現内閣は舊教徒の正反對の態度に出で、政府は是等の結社に向て諸種の迫害を試み、又教會は飽まで之に抵抗して兩三年間或は議會に於て甚しきに於ては暴動を惹起して紛雜を招きたるは、確に此修道院に原因を發したる也。教育事業の如きは古來全く此舊教教師の手に委せられ、現今と雖事實上僧侶の勢力甚だ大なるもの也。故に佛國政府は此教會に反對する主義よりして、宗教々育を全廢するの方針也。全體歐羅巴に於る教育と宗教の關係を見るに、英吉利も獨逸も皆宗教を教育の中に包含せざるはなし。唯何れの教會の宗教を用ふべきかと云へる點は困難なる問題にして、社會の道德を養成するには必ず宗教の力に漸らざるべからざるとに就ては毫も異論のなき所也。獨逸の如きは小學より中學に至るまで宗教教育の時間を加へざるはなし。近頃英國に於て宗教教育に關して問題起りしが、固より宗教其者を排斥する意味にはあらざる也。米國の如きは前述の通り、幾多の教會あるを以て、唯聖書を教うる點に於て、小學校にて宗教と育を施し居れり。獨り佛國に於て宗教を排斥するは、前述の如き、特別なる國家と教會とに衝突を來したる結果、政策より出たるものにして、其實宗

教其者に罪あるにあらざるとは明らか也。將來我國に於ては道德の根底を鞏固にするは、是等の點に就て深慮ある方策をとりて我國に適したる宗教を經營し、一方には國民の志操を鞏固ならしむると同時に、一方には歐羅巴に於て斯の如き害毒を流したる宗教の浸染を避くるとを勉めざるべからず。要するに佛蘭西は徹頭徹尾舊教國にして、狂熱的信仰が其特徴なりと謂ふべし。

獨逸

世人の知るか如く、ルーテルが宗教改革の火焰を擧げたる舞臺にして、新教と獨逸の國家とは離るべからざる歴史及精神的の關係存在する也。獨逸聯邦は各其州に從て宗教を異にすと雖、新教と舊教と同一の取扱をなし居れり。試みに王室の異なる宗教を列舉せんか、即ち普魯西は神教、バイエルンは舊教國也。其他佛蘭西に近きライン地方は舊教の勢力盛にして、チェウリングンの七州は宗教改革の根據地たるを以て新教獨り旺盛也。スツットガルトは獨逸の新教地中最も健全に發達し、慈善事業一として具備せざるはなし。又佛蘭西より分割したるアルサス、ロートリンゲンの二州、及び東方に於けるポーランドの獨逸に屬したる部

分の如きは、素より舊教の盛大なる地なるが、陰に陽に獨逸的勢力扶植せんとし、て屢々國家は舊教徒の反對を受くるとあり、之を要するに獨逸は新教の根據地たれども、反對改革に際して舊教に取り返され、其一半の勢力を失ひ、現時は舊教と事々に相争ひつゝあり、これ獨逸宗教の狀態なりとす。

而して獨逸の國民が全體に理屈的にして且つ學問的なるか、如く宗教の上に於ても神學の研究より、教理史、教會史、教會法の研究等を始めとして、宗教哲學等總て宗教に關する學問研究は頗る盛にして、伯林大學を始めとし、獨逸瑞西に於ける三十有餘の大學には必ず神學科の設けあらざるはなし、或は新教を主とし、或は舊教を主とし、或は新舊兩教を併せて研究するものあり、而して獨逸人は、恰も思想界の上に随分新き説を出すか、如く、宗教上に於ても新奇なる説をなす者多し。近頃著名なるは、伯林大學に於て教理史の大家たるハルナツク氏はクリスト教の眞髓と云へる講義を千九百年の冬大學に講せられたりしが、之を出版にするや否や、教會より大なる反對を受け論難攻撃の聲喧騒を極めたりき、嘗に獨逸内のみならず、歐洲全體に及んで英吉利邊にても諸種の批評盛にして、教界の

一奇觀たりし、勿論此人の研究して居る原始的基督敎の事は、すでにオックスフォード大學の教會史の教授ハツチ氏の云へる説と殆ど同様にして、敢て珍とするに足らざる也、而るに英吉利には偶々斯の如き人ありと雖、そは一部に行はるるのみにして、全體に亘りて勢力を占むるとなし、獨逸にては兎角思想界に於ては斯の如き新しき説屢々出て、獨りハルナツクのみならず、ライヒテヒの大學教授ソウムと云へる人の如きも之と類似の考を有せり、要するに獨逸は學術的理論の點に於て大に其特色を發揮せるものと謂ふべし、而して學問や理論に傾向を有する丈、それ丈、信仰の點は意外にも冷淡なりと云はざるべからず、現に日曜日教會を參觀するに、英の如く眞面目ならず、米の如く社會的にもあらず、又學者、學生、人民等に就て其信仰を叩くに感服するに足るものなし、然しながら獨逸の特色たる何事も研究して其研究の結果を實行すると云ふ點は他に於て見るべからざる所也、余が米國にて教會法を取調ぶる時著名なる大學の教授が殆ど其名をも知らざりし程心に留めざりき、又英國に於てもかゝる傾向を見しが、獨逸に至つては既に歴史的の經過に於て示す如く、國家教會の關係複雑なる爲め

從て他の公法民法等と相並んで必ず研究せらるゝ也其研究の結果國家が教會を取扱ふ經營の上に現れ來り英の如く保守的に陥らず米の如く散漫に失せず佛の如く衝突を起すとなく複雑なる新舊兩教の關係を圓滿に統御する所以也宗教家も亦佛國の舊教の如く暴力に出るとなく靜に活動しつゝある也故に政治上に於て一種の中央黨なる者を組織し國會中第一の多數を占め勢力も頗る盛にして皆是れ舊教主義也現今獨逸の國是は舊教徒の歡心を買ふとに汲々たり若し其弊を擧ぐれば此舊教の教監が國家と同腹心となり非人道を行ひたるが即ち清國に於ける膠州灣事件是なり彼は全く宗教の本領を棄て宗教の機關即ち教會が國家の奴隸となり國際場裡非人道の行爲をなしたる者也我々東洋人は單に彼を非人道として言論上批難を試みるに止まらず實地の點に於て着眼する所なくんば偉大なる悔を殘すに至らむか要するに西洋に於ける宗教は劇藥の如し益あると共に害も無論免れざるなり而して空論に非ずして實際的なり乃ち理論的研究を主として之によりて成立したる結果を實行するとは獨逸宗教の特色といふべきか而して慈善事業も非常に發達せりこれ皆研究を先

にして實行を後にしたれば也彼の實際の點より發達して理論を後にする英國とは全く正反對なりといふべし亦以て兩國宗教の性質を窺ふに足らむ

餘論

以上は歐米に於ける最も興味ある最も著しき四ヶ國に就て其特色を略述したる也其他露西亞の希臘教會は極端なる壓制極端なる國家主義にして國民は精神的に宗教の權威を免るゝと能はざるが如く養成せられつゝある也露西亞が歐羅巴中獨り專制的の國體を今日まで維持したるは全く此宗教の力に依りしものなりされど漸次新思想勃興し來りトルストイの如きは教會より破門せられ又大學生は屢々騒動を惹起し遂に露西亞皇帝は信教の自由に就て詔勅を發せられたり然れども吾々は該國民信仰の基礎鞏固にして深く根底の養はれ居るを注意せざるべからず其他伊太利は羅馬教會の根據地にして國勢は次第に衰殘に傾きたるも獨り教會の勢力依然として其勢力の存するを見る他の瑞西和蘭丁抹瑞典等は獨逸と同しく新教國にして白耳義、埃國又南方の西班牙葡萄牙は佛國と同しく舊教國也其大體は前に列舉したる四ヶ國の大勢より押

して之を想像するに難からざる也。
此の如く歐米各國は其主義の如何に拘はらず國民は皆一種の理想を抱き國家は何れも人間已上の使命を帯ぶるものとして各々偉大なる宗教的自覺を有せざるはなし此に於てや思想遠大にして堪忍不撓の精神を抱けり看よ英人は印度及南亞弗利加を征服して其非人道的政策は實に惡むべしと雖英國の宗教家は劍の後はパイプを以て人民を悦服せしめむと試むるにわらずや露國の侵略主義實に嫌ふべしと雖も彼希臘教會の理想と表裏の關係あるに非ずや吾國古來平和清淨なる佛教思想を以て養成され其々の間感化を蒙り無意識の裡に偉大なる大命の下に活動しつゝある者而して國民舉て其理想を忘却し萬衆茫茫五里霧中に彷徨して其仰望すべき標的を失ふ日本國民たる者須ら其天職を自覺して向上の一道を辿りて崇高なる理想を實現すべき也。



一七 宗教的經營及び社會事業を論ず

竹園精舎の經營

大聖釋尊猶カピラヴスツの太子たりし時絶大の求道心を起し生老病死の大問題を解決せむと欲し夜に乘じて王宮を遁れ駿馬に跨りて將に迦毘羅城門を踰へむとするや第六天の魔王之を要して諫めて曰く汝七日の後轉輪大王として全印度に君臨せむとす請ふ止れ復徃く勿れと太子毅然として宣言して曰く此の如き千億の名譽も我に對して今日何等の誘惑力を有せずと天下王國の捧物を退くること恰も口より唾を捨つるが如し忽然として一個の乞食者となり路にマカゾハ國を過ぎむとするやビンバサラ王見て大に驚きて曰我王舎城を首府として都邑八萬人口十八吉羅を有すマカダアンヌの兩國廣袤四千八百哩地豊かにして民富む穢くは卿と共に之を分ち領せむかなと太子辭して曰く我地上の王國を欲せず我求むる所は大覺者たらむと欲する耳とビンバサラ王乃ち請ふて曰く太子若し覺者に達し道を弘むるに至らば先づ王舎城に來りて我

が爲めに法を説き給へど固く約して別る。爾後六年太子は遂に成道し給ひ、ベナ
 レスに五比丘を度し、ウルベラに三迦葉を化し、遊行して遂に王舍城に入り給ふ
 や、ピンバサラ王喜び迎へて人民と共に法を聴き、忽ち法淨眼を得嘆じて曰く、我
 太子たりし時、五種の願望を有したりき、我王位に登らむと欲する其一也、神聖絶
 對の大覺者の我王國に來らむと欲する其二也、我彼に對して恭敬尊重せむと欲
 する其三也、彼我が爲めに大法を宣説せむことを欲する其四也、我之を聴きて傾
 解し、大悟せむと欲する其五也、而して今や全く此願望を満足するを得たりと、謹
 て王宮に迎へて之を供養す、王乃ち以爲らく、露くは一良地を下して佛を請せむ
 かな、其地たるや、都を去る遠きに過ぐべからず、又近きに過ぐべからず、衆人の容
 易に來り見るべき所にして、悲雜沓せず、夜喧嘩ならず、靜閑以て道を求むるに適
 せざるべからずと、乃ち王其樂團たる竹園を下し、金瓶に盛るに清水を以てし、謹
 んて佛の手に注ぎ捧げて曰く、我佛を以て首長として、佛弟子教團の爲めに、此竹
 園を喜捨し奉る、唯願くは哀愍して納受し給へと、乃ち世尊默然として之を受け
 給ふ、而して偈頌を説きて、王を勵まし且つ安慰を與へて曰く、

若し人能く布施すれば、慳貪を斷除し、
 若し人能く忍辱すれば、永く瞋恚を離れ、
 若し人能く善を造れば、愚痴に遠ざかる、
 能く此三行を具すれば、速かに般涅槃に至る、
 若し貧窮の人ありて、財の布施すべき無くむば、
 他の施を修するを見る時、隨喜の心を生ぜよ、
 隨喜するの福報は、施等と異なることなし、
 是實に佛教に於ける僧伽藍の權輿也、宗教的經營の模範なり、吾人其意味の深長
 なるを味はずむばあるべからず、
 次に吾人をして頗る感激に堪わざらしむるものは、祇樹給孤獨園に於ける精
 舍の創立也、舍衛國の商人アナタピンダカなるものあり、家富み、特に貧窮孤獨
 の者を賑恤す、故に彼を稱して給孤獨と名づく、蓋し佛教徒に於ける慈善者の標
 本也、彼一日王舍城に於ける友人一商人を訪ふ、彼佛を供養するの準備をなすア
 チタピンダカ隨喜の心を起し、遂に逝多林を獻せり、此林は逝多太子の有せし所

太子地を獲ふに足るの金を以て賣らむと云ふ。アナタビンダカ之に應ず。太子大に感して七重の伽藍を築き、遂に奉る實に是祇園精舎也。

嗚呼、佛陀は俗的の王國を捨て、正義の王國を建設し給へり、真理の王國を開闢し給へり。ベナレスの說法既に之を明言し給ひたるにあらずや。既に佛自ら萬乘の貴を捨て、精神的の教團を形作り給ふ。佛の眼中、財物なく、富貴なし、而して猶富貴の人をして慈善布施を勧め給ふ所以のもの、寧ろ吾人同胞をして互に相助け相救ふの徳を養はしめ給ふにあらずや。ベナレスの富豪なる青年ヤシヤなるもの煩悶に堪へず、夜に乗して家を遁れ、佛に詣て、道を求む。佛先づ慈善布施の功德を説き、而して安心の道を以つてし給ふ。ヤシヤの父追て至る。佛亦た説くに慈善布施の功德を説きて道に入らしめ玉ふ。遂にヤシヤの母及妻を感化し、四人の親友を感化し、五十人の同業商人を感化し玉ふ。而して佛は此の如く慈善を勧め玉ふ所以のもの、其投する財物其者を主とし玉ふにあらず、之れを投するの精神的慈愛を要とし玉ふにあらずや。若し單に財を施し、貨を散するを以て其目的となさば、太子自ら其財を散し、又ヒンバサラ王國の一半を受けて之れを衆に

散ずるも可也。佛陀は實に布施慈善の行能く慳吝貪慾の煩惱を滅すを賞し玉ふ。若し俗的受授を以て人に與ふむとせば、ヒンバサラの王國を傾くるも不可也。若し内心解脱の結果によりて真正の喜捨をなさば、一竹園の地猶以て優に佛陀及佛弟子を供養するに足れり。財の多少にあらず、精神の如何に關する也。若し貧窮の人ありて財の布施すべきなきの時、他の布施慈善に對して、滿心隨喜の念を生せば、喜捨の人と異なるなしと云ふ。豈高崇なる説法にあらずや。獨り布施のみ此の如くならむや。人若し他の怒に對して能く忍ばむか、他を怒するが爲めに善なるにあらず、却て是れ自己か怒を滅すが爲めに善なる也。人若し他に對して善行をなす、他を利用するが爲めに善なるにあらず、却て是れ自己か愚昧を滅するが爲めに善なる也。此の如き精神的修養の有形上に實現し來りたるものは、是れ佛陀の教團にして實に彼の正義の王國なる者、即宗教的經營の模範なりと謂ふべし。

奈良朝時代の經營

我國聖德太子の政を擬し玉ふや、恐くは釋尊を以て理想とし玉ひしなるべし。而して政治上に社會上に着々として、此の如き宗教的經營の實現せられたるを

見る。法隆寺建立は當時の信仰を有形に實現したるものにして、四天王寺即悲田、療病、施藥、敬田の設立は、佛陀の精神を社會事業にあらはせるもの。爾來歷朝益々此國是に則り、施設經營至らざる所なし。聖武天皇の朝實に其極に達せり。而して天平十五年十月十五日帝發願し玉ひ、東大寺盧舍那佛金銅の大像を造りて、以て華嚴海印三昧中の境界を實現し、天下百姓と同一利益を蒙り、共に菩提を致さむことを願ひ玉ふ。而して經營の方法を見るに、頗る宗教的眞精神の發洩せるに感せず。むばあらず。其詔に曰く、夫天下の富を有つ者は、朕也。天下の勢を有つ者は、朕也。此富と勢とを以てせば、功を成すこと難きに非ず。惟恐る民を勞して能く、感望せしむることなきを。故に豫め知識する者は、各介福を求めよ。宜しく毎日三拜して中心誠を存して、以て此像を造る可し。若し人ありて、一枝の草一杷の土を持して、助け作さむと願ふ者は、之を聽さむ。國郡等の司、因緣收斂して、百姓を侵擾すること勿れ。遐邇に布告して、朕か意を知らしむ。と。良辨僧正之か勸進となりて、諸國に募緣し、行基菩薩伊勢の大廟に詣して、勝る。何ぞ其經營の肅々として自ら謹むことの切實なるや。

此の如く聖武天皇か國分寺を諸國に作り、中央に東大寺を起す。皆皇后光明子の勸發する所也。而して晉に此の如き建築經營の事のみならず、慈善的社會的事業に於て意を用ゆる最も切也。悲田、施藥の二院を置き、天下の饑饉を恤まれたり。殊に最も吾人をして感嘆措く能はざらしむる所の者は、皇后が施設に成るところの癩病院也。吾人は之に關して世に傳ふる所の傳記頗る宗教的趣味の存するを感せず。むばあらず。曰く、東大寺成るの時、后心中に以爲らく、大像の大殿、皆既に備る。帝は外に勵め、我は内に營む。勝功鉅徳加ふべからざる也。聊か誇るの意あり。一夕閑裏、空中聲ありて曰く、后誇る莫れ。妙觸宣明、浴室滌濯、其功言ふべからざる而已。と。后怪み且つ喜びて、温室を建て、貴賤をして浴を取らしむ。后又嘗て曰く、我親しく千人の垢を去らむ。と。君臣之を憚るも、后の壯志沮むべからざる也。遂に九百九十九人を覓る。最後に一人あり、全身疥癩甚だしくして、臭氣室に滿つ。后垢を去り難し。又自ら思ふ、今千の數に滿たんとす。豈之を避くべけむや。と。忍ひて背を楷ふ。病人言く、我惡病を受けて、此瘡を患ふること久し。適良醫あり。教へて曰く、人をして膿を吸はしむれば、必ず癒ゆるを得む。と。而して世上深く悲むものな